

ああ、無情。

みあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は滅亡の危機に瀕していた。人々の祈りが頂点に達した時、伝説に謳われた勇者が現れる。果たして勇者は世界の危機を救い、人々を安寧に導く事が出来るのか。「おお、勇者よ。死んでしまうとは情けない」「ところで、何故俺、いや私はここに?」「うむ。それこそが勇者の特殊能力。死んだら、王の前で生き返るのだ」マジかよ……。不死身の勇者の運命や如何に。注意：あくまでもコメデイです。

いまさら忘れられた頃にはじファンから移転。

もう自力でホームページ作ろうなんて絶対に考えないよ！

目次

| | |
|-------------|----|
| 第一話：勇者の旅立ち | 1 |
| 第二話：伝説の武器 | 7 |
| 第三話：一筋の光明 | 14 |
| 第四話：呪文屋 | 22 |
| 第五話：古の魔物 | 29 |
| 第六話：みかわしの服 | 42 |
| 第七話：情報屋 | 48 |
| 第八話：魔法使い | 58 |
| 第九話：ドラゴン | 65 |
| 第十話：王女 | 76 |
| 第十一話：小さな決意 | 86 |
| 第十二話：いかづちの杖 | 97 |

| | |
|-------------|-----|
| 第十三話：太陽の石 | 110 |
| 第十四話：悪魔の騎士 | 118 |
| 第十五話：口トの鎧 | 129 |
| 第十六話：ゆきうさぎ | 145 |
| 第十七話：銀の竖琴 | 159 |
| 第十八話：予言者 | 173 |
| 第十九話：野宿 | 187 |
| 第二十話：勇者口ト | 199 |
| 第二十一話：ゴーレム | 210 |
| 第二十二話：不安 | 222 |
| 第二十三話：口トの印 | 228 |
| 第二十四話：エリザ | 240 |
| 第二十五話：死神の騎士 | 250 |

第二十六話：ロトの剣

263

第二十七話：リバスト

273

第二十八話：魔王

286

第二十九話：決戦

299

第三十話：リボン

318

第三十一話：結婚式

333

第三十二話：勇者

355

第一話：勇者の旅立ち

幼い頃に両親が死んで、近所の武器屋の下働きをしながらその日暮らしの生活をしてきた俺は、ある日、城に呼ばれた。

一般庶民が城に入ることなどまずないから、さすがの俺も緊張していた。通されたのは、玉座の間のようだ。初老の男が立派な椅子に座っている。冠をかぶってるから、あれが王様なんだろう。

「おお、良く来た勇者口トの末裔よ」
は？ 今、なんつった。

「実は、我が娘が竜王にさらわれてしまったのだ」

だから、何の話だ。

「ここに50ゴールドある。これで旅の準備をしてくれ」

待て、俺に助けに行けっか？ つーか、50ゴールドで何をしろと。

「では、勇者よ。旅立つのだ」

さすがに、話についていけなくなった俺は手を上げた。

「質問があるんですが」

「……なんだね」

発言許可が下りたようだ。

「勇者の未裔つてのは、初耳なんですけど……」

「でも、君が勇者なのは間違いない」

「根拠は？」

「勇者にのみ伝わる特殊能力があるのだ。そして、君はそれを持っている」

そんなもんがあんのか？ 俺に。

「ちなみに、どんな能力なんです？」

「それはおいおいわかるだろう」

待てやコラ。何故に顔を背ける。

「まあ、それはそれとして」

我ながら、寛大だな、俺。

「正直、50ゴールドでは5日分の路銀にしかありませんが」

これは事実だ。

宿屋に一泊、8ゴールドの時代に何を考えているんだ、このオッサンは。

「……これは、私のポケットマネーなんだ」

安っ！

「王女とはいえ、娘を助けるために、国の金を使うわけにはいかないのだよ」
世知辛い世の中だねえ。

憂鬱な気分で城から送り出された俺が、街に足を踏み入れようとしたその時。

「危ない！」

あん？

ゆつくりと背後に振り向くと、馬車が猛烈な勢いで突っ込んでくる。

ああ、これは死んだな。

馬車に撥ねられた俺は、空中へと放り出され、石畳へと叩きつけられた。

痛え……これが死ぬって事か。

勇者、ここに死す。はは、笑えねえ。

俺の意識はだんだんと暗くなり、そして、俺は死んだ。

そう、俺は死んだはずだった。

なんで、王様の前にいるんだ？

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

死んだのは間違いないらしい。

「……して、勇者よ。何があったのだ？」

「街に入ったら、馬車に撥ねられました」

「……本当に情けないのう」

ウルセー。

「ところで、何故俺、いや私はここに？」

なんか妙な予感がするんだが。

「うむ。それこそが勇者の特殊能力。死んだら、王の前で生き返るのだ」

マジかよ……。

「さらに言いにくいことに……」

所持金を見ろ？

げっ、25ゴールドになってやがる。

「それが、代償と言うわけだ」

地獄の沙汰も金次第ってか？

さらに笑えねえよ。

そんなこんなで、仕事場でもある武器屋に辿りついた俺は装備を整えることにした。

「おお、勇者。良く来たな」

何故に知ってる。

「親父、これで揃えられるだけの装備をくれ」

有り金全部の入った袋をカウンターへ置く。

といつても、25ゴールドしかないんだが。

親父は、袋を覗き込むと憐れみの表情を俺に向けた。

やめろ、そんな目で俺を見るな。

俺が悪いんじゃないんだ。

この国が、王様がいけないんだ。

「これだと、この程度だな」

そして、カウンターに置かれたのは何と！

ひのきの棒——たいまつのは柄じゃねーのか？

布の服——今着てる服と何が違うんだ？

なべのふた——これをどうしろと？

この3つだった。

「それは、最低限文化的な装備だ。それでもかなりオマケしてやったんだぞ」

そして、俺は旅立った。

最低限文化的な装備を身にまよって。

スライムがあらわれた。

勇者の攻撃、ダメージを与えられない。

スライムの攻撃、3のダメージ。

勇者の攻撃、ダメージを与えられない。

スライムの攻撃、痛恨の一撃！ 9のダメージ。

勇者は死んでしまった。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

三度、王様の顔を見ながら、俺は神に祈っていた。

誰か俺を助けてくれと。

第二話：伝説の武器

城を出た俺は、しばらく修行を積む事にした。

だが、最弱のスライムにすら勝てない俺は悟った。

死んでもやり直しなら、死ぬ気でやろうと。

そうすれば、いつかは勝つ事もあるさ。

……会心の一撃、とかな。

「……おお 勇者よ、死んでしまうとは情けない」

どうした？ 最初の頃の元気が無いな。

「勇者よ、今日はこれで何回目だと……」

「20回程だろう？ たいした回数じゃない。 気にするな」

何度も会ってる内に、何故かタメ口で話すようになった王様と俺。

「せめて、夜中くらいは勘弁してくれんか？」

「それこそ、家があればそこで寝るんだが……」

俺の言葉にそっぽを向いて、口笛を吹くオッサン。

そう、俺には家が無い。

否、今朝はあつたのだ。

俺は、夕方のことを思い出していた。

日も暮れ、続きは明日にでもしようと思つた俺は、信じられない光景を見た。

「……家が無い」

辺り一面、更地になっていた。

とりあえず、そこらのおっさんを捕まえて尋問する。

「ひいー！ 有り金全部置いていくから、命ばかりはお助けをー！」

ちよつと待て、ちよーつと待て。

誰が、追い剥ぎだというんだ。

まあ、確かに金はほしいんだが。

懇切丁寧に問い詰めると、怯えた顔をしながらも教えてくれた。

「今朝早くに、王様の命令で……、その……区画整理とか」

奴か、奴の仕業か。

俺はこの時初めて、他人に対して殺意を抱いた。

「そ、それじゃ、私はこの辺で……」

おお、ありがとうな、おっさん。

精一杯の笑顔を向けると、さらに怯えながら全速力で去っていった。全く、失礼なことだ。

そして、俺は城へと急いだ。

すると、見張りの兵士に捕まった。

「怪しい奴め！ 覚悟しろ！」

今にして思えば、思わず逃げようとしたのが間違いだった。

見事に槍で一突き。

気付いた時には、玉座の間にいた。

「おお！ 勇者よ、死んでしまうとは情けない！」

「……あんたんとこの兵士に刺されたんだが」

わずかの沈黙。

「まあ長い人生、たまにはそんなこともあるじやろ」

「ねーよ！」

城の兵士には話を通しとけよ。

それはさておき、今はそれよりも大事なことがある。

「俺の家はどうした？」

「あの辺は前々から区画整理の予定があつてな。通知は出しておつたはずじゃが」
「つーか、俺の家と聞いただけでそこまで話せる時点で、クロだろう。」

「だからつて、勝手に……」

「立退き料が出ておるぞ」

その言葉に、俺は屈した。

10000ゴールド。

こんな大金、初めて見た。

そして、この金で装備を整えることにした。

城を出る時、見送った兵士の顔が何故か引きつっていたが、気にしない。

なんせ、今の俺は最高に気分がいいからだ。

そして、その足で閉店間際の武器屋に駆け込んだ。

「どうです？ 親父さん。いい買い物だと思いませんか？」

店の親父は、旅の行商人と商談中のようだ。

こつそり聞き耳を立ててみる。

「でも、確実性の問題がなあ」

「何をおっしゃいます。このモンスターを一撃で倒すことのできる武器が、今ならたった1000ゴールドですよ!」

モンスターを一撃?!

「買った!!」

思わず、口が出ていた。

「オイオイ、勇者よ。やめとけ、やめとけ」

親父は何故か止めに入る。

「こちら、勇者様ですか? いや、お目が高い! 勇者様に使って頂けるなら宣伝効果も抜群! 今なら、大特価980ゴールドでお譲りしますよ!」

おお! 太っ腹!

こうして、俺は伝説の武器、どくばりを手に入れた。

そして、呆れ顔の親父を尻目に、意気揚々とモンスター退治に出発した。

スライムがあらわれた。

勇者の攻撃、1のダメージを与えた。

スライムの攻撃、3のダメージ。

勇者の攻撃、1のダメージを与えた。

スライムの攻撃、2のダメージ。

勇者の攻撃、1のダメージを与えた。

スライムを倒した！

おお！ 初めてスライムに勝った！

スライムの死体を調べる。

あつたあつた。

3ゴールドを手に入れた。

この武器スゲー！

でも、一撃じゃなかったよな。

偽物か？

何度も死にながら、この後、何度も試したが一向に効果が表れなかった。

本当に効くのか、コレ？

とりあえず、ポケットにしまおうとした俺は、誤って自分の指に刺してしまった。

「おっと、しまったしま………った？！」

意識が唐突に暗くなる。

まさか？　これは……。

「おお！　勇者よ、死んでしまうとは情けない！　……どうしたのじゃ？」
「気にするな。この世の不条理を噛み締めてるだけだ」

俺はうずくまったまま、動くことができなかつた。

……俺の急所って、指先にあつたんだなあ。

現実逃避にも似た思いを抱きながら。

第三話：一筋の光明

980ゴールドもした、伝説の武器が使えない代物だった。

この事実は、俺の心に暗い闇をもたらした。

そんなどん底にいた俺にも遂に一筋の光明が。

そう、それは呪文。

俺は勇者なんだ！

ならば、魔法が使えてもおかしくないだろう。

でも、どうやったなら使えるんだ？

「ひっ。」

玉座に座っているオッサンは、手に持った剣をもてあそびながら、冷たくのたまった。

……何か間違ったことを言ってしまったのだろうか？

「いや、だから、呪文はどうすれば使えるのかと」

先程の質問をもう一度繰り返す。

どくばり事件の後、何度もスライムとの死闘を繰り広げ、最近では死なくなつた。少し遠出をしてみようと林に足を踏み入れた所で、スライムベスに出会つてしまつた。

スライムの見た目そのままに体色が青から赤へと変わった姿。

ただの色違いだろうと油断したのがいけなかつた。

久しぶりに死んでしまったのだ。

このままではいけないと街の住民に話を聞いた所、勇者といえれば魔法だというのだ。

そういえば、昔語りに聞いた勇者ロトの伝説も剣と魔法の物語だつたはずだ。

剣は余裕があつたら買うとして、問題は魔法だ。

魔法の覚え方など、誰に聞いても知らないという。

だからこうして、二度目の挑戦に失敗したついでに話を聞きに来たんだが。

「今、何時だと思つてる?」

「朝の3時だが?」

ああ、そうか。

前に、夜中に来るなと言われたな。

だが、待てよ。

「今は朝だ。夜中じゃない」

その一言が余計だったのか、オッサンはゆっくりと立ち上がると、俺の目の前まで歩いてきた。

何のつもりだ？

俺がいぶかしんだのも束の間、無言で俺を一刀の下に切り捨てた。

……あんた、実は相当つえーんだろ。

次第に暗くなる視界の隅に、スゲー笑顔の王様が見えた。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

あんたが殺したんだろうが！

だが、その叫びは封じられていた。

素敵な笑顔のまま、首に剣を突きつけていたからだ。

「あー、次からは気を付けることにする」

後で聞いたことだが、昔、このオッサンは獅子王と呼ばれていたほど、武勇に優れた人物だったらしい。

ただ、この時の俺はそんな事など全く知らなかった。

「ふむ、よろしい。先程の話だが、正午までには手配しておく」

オッサンは、剣を手に持った鞘に収めると、衛兵を呼びつけた。そして、畏まる衛兵にとある命令を申し付ける。

「勇者殿を特別室に案内してくれ。正午まで、絶対に外に出すでないぞ」
特別室？ やつと部屋を用意する気になったか。

この時の俺は、多分喜んでいた。外出禁止など気にも留めなかったほどに。

「なんだココは？」

「勇者様のお部屋です」

地下を何階も降りた先、鉄の扉には確かに『勇者の部屋』というプレートが掛けられている。
辺りは暗く、衛兵の持ったたいまつが無ければ、自分の手も見えないだろう。

そんな空間だった。

「では、勇者様。朝食はお持ちしますので、ごゆっくり」

衛兵は、扉を閉めるとたいまつを持ったまま元来た道を戻っていった。

呆然と見送ってしまった俺の目の前で、重そうな鉄の扉が閉まる。

「なんだこりゃ。あ、開かねー。テメー、たいまつは置いてけー!!」

真つ暗な部屋の中。

叫んでも、聞こえるのはただ自分の声。
俺は、いつのまにやら眠っていた。

「勇者様、勇者様、朝食をお持ちしました」
体が揺さぶられる。

くあー、良く寝た。

でも、石畳つてのは寝にくいもんだなあ。

あー、体痛えー。

目覚めた俺が見たのは、ここに連れて来た衛兵とは違う、どこかで見たことのある若い兵士だった。

「あれ？ あんた、どっかで会った事ねえか？」

俺の問いに、男は体を震わせると「もしかして、ナンパですか？」とステキな事をのたまった。

俺は無言でそいつを殴り倒した。

「……冗談ですよ、勇者様。先日は、大変失礼なことをしてしまいました、申し訳ございません」

そうか、冗談か。もう少しで伝説の武器を発動する所だったぞ。

と……先日？ 俺に失礼なことをした兵士というと……？

「ああ！ 俺を刺し殺した兵士か！」

「ええ、その節は本当に申し訳ありませんでした」

土下座をするような勢いで、何度も頭を下げる。

「気にすんなって。お前は職務だったんだし、俺は死に慣れてるしさ」

「なんて寛大な人だ。……僕、一生勇者さまについていきます！」

勇者は、従者を手に入れた！

連れて行きますか？

⇒いいえ

男を連れ歩きたくなかった俺は、断ることにした。

「その申し出はありがたいが、お前を連れて行くわけにはいかない」

「何故ですか?! 勇者様！」

「この旅は、本当に危険なんだ。それに、もしも魔物が街に攻めてきたらどうする？ 兵

士の仕事は力無い民衆を守ることだ。勇者を守る事じゃない」

「ですが！」

反論しようとする男を押し止め、俺は言った。

「勇者の仕事は世界を護る事。その中には、お前も含まれてるんだぞ」

うおつ、今なんかカッコいいこと言っちゃったか?! 俺!

「わ、わかりました勇者様。僕はいつまでもお待ちしています!」

俺はその時、自分の言葉に含まれていたある事に全く気付かなかった。

「勇者よ、一つ尋ねたいことがあるのだがのう」

約束の時間、俺は玉座の間に通された。

呪文の事についてらしい。

いくつか打ち合わせをして、帰ろうとした時、オッサンが俺に話しかけてきた。

「何だ? 俺は忙しいんだが」

「城の兵士にプロポーズしたというのは、本当か?」

突然、何言いやがるんだ、このオッサンは。

「いやなに、朝食を運ばせた兵士の様子がおかしくての。事情を聞いたら、そう言ったんじゃないが」

「バカな事を言うな! 俺の趣味は、10才から18才までの若くて可愛い女の子だ!

決して、男などに言い寄るものか!」

……待てよ? まさか、アレか?

「……勇者よ、いくらなんでも10才からはまずいじやろう?」

そんなことはどうでもいい。

とりあえず、あの時の会話を包み隠さずオッサンに話した。

「……さすが勇者じゃな。ワシのような一般人では到底及ばんよ」

勇者を切り倒す一般人がどこにいる。

普段なら、そう突っ込んだところだが、今の俺は抜け殻だった。

「ああ、もう、死にたい……」

「構わんぞ。どうせココに戻ってくるんじや」

その言葉に、俺はただ涙するしかなかった。

第四話：呪文屋

あのことは忘れてくとも忘れられない。

こうなったら街を出るしかない。

だが、そのためには強くならなくては。

前回は行きそびれたが、今度こそ俺は魔法を覚える。

あー？ この辺か？

俺は、オツサンからもらった地図を頼りに、ある建物をさがしていた。

その名もズバリ『呪文屋』だ。

何でも、勇者コースやら魔法使いコースやらがあつて、選んだコースによつて習得する呪文の種類が変わるらしい。

もちろん、勇者たる俺が選ぶのは勇者コースだ。

ただ、『屋』と付くだけあつて金が掛かる。

が、そこはそれ、王様のコネでなんとかなるそうさ。

おつ、もしかしてコレか？

平屋建てで、ちよつとした道場くらいの大ききさだ。
デカイ看板が掲げてある。

『呪文あります』『一見さんお断り』『ただの冷やかかしには、当店自慢の氷結呪文が飛びます』『いつもニコニコ現金払い』などなど。脅し文句に見えなくも無い。

さすがに入るのを躊躇していたが、意を決して足を踏み入れた。

「いらつしやいませー、許可証はお持ちですかー？」

若い、とは言えなくも無い中途半端な年齢の女性が現れた。

美人と呼べなくも無い。俺は呼ばないが。

「ああ、これだ」

道具入れの中から、紙切れを取り出す。

誤用を避けるため、王の許可がないといけないのだそうだ。

「まあ！ 勇者様でしたか。光栄ですわ。世界を救う手助けが出来るなんて」

感極まったように、涙を眼に浮かべる。

正直、見苦しい。

「ところで、勇者様。私、まだ23才なんですわが」

「ああ、そのくらいだろうな」

思った通り、守備範囲外だ。興味ない。

「ひどいですわ、勇者様」

「ふむ、ところでさつきからどうして俺の心の声に突っ込んでくる?」

「これも魔法の一つですわ」

そうなのか、魔法とは奥が深いものだ。

「こちらが料金表になります」

料金表になる前は何だったのか、聞きたい気もするが話が進まないのでやめよう。

「ちっ」舌打ちが聞こえたような気がするが、スルー。

魔法使いコース——250ゴールド

僧侶コース——200ゴールド

勇者コース——20000ゴールド

待てやコラ、勇者だけ桁が違うぞ。

「お客様は勇者コースですよね? 当然」

「ああ、そうなるな。ところで、料金の方だが……」

「100分の1の値段で受けるようにと言われております」

意外に手配が早いな、あのオッサン。

「出世払いで頼む」

2000ゴールドなんて大金、持つてるわけが無いだろう。

「困ります！ ただでさえ需要の低い勇者コースですのに」

どうしろと言うのだ。コチラも無い袖は振れない。

「でしたら、仕事の依頼を請けてみられたらどうでしょう？」

「仕事？」

年増女いわく「23!!」、ダメレ。

近くに冒険者の酒場なるものがあり、そこで仕事の依頼を請けては報酬をもらうということができるらしい。

さっそく、行つて見る事にした。

ほう、なかなか良い店だ。

内装も悪くない。

ただ、客のガラだけが異様に悪い。

「兄さん、初めて見る顔だね。職業はなんだい？」

化粧のケバイ女が話し掛けてくる。

「どうやら、彼女が店主らしい。」

「勇者だ」

辺りを沈黙が包み込んだ。

そして、屈強な男達が次々と席を立って、外へ出て行く。

何故かしら、皆、尻を庇っている様子。

痔持ちだろうか？

「あんたが勇者かい。ふーん、惜しいねえ」

「何の話だ？」

店主はジロジロと俺を見回す。正直、気分が悪い。

店に残った者も、コチラを無遠慮に見ているのがわかる。

「あんた、男にしか興味無いって本当かい？」

……何故に知っている？ 俺の黒歴史を。

なるほど、さっきの連中はソレか。

正直、今の俺は疲れていた。

だから沈黙をもってソレに答えた。

「なら、あんたにピツタリの仕事があるんだ」

どうやら、悪い方に話が転がったらしい。

さすがに訂正しようとしたが、次に続いた言葉に口を止めた。

「前金200ゴールド、成功報酬は800ゴールド。ここで依頼を請けてくれるなら、

前金をすぐに渡すよ」

またしても、俺は金の力に屈してしまった。

所変わって、ここは呪文屋。

俺は、勇者コースを希望した。

最初に覚えるのは『ホイミ』、回復呪文だ。

これを覚えれば、旅が楽になる。

今までは、薬草買う金も無いし、宿屋に泊まる金も無いしで、正にデッドオアアライヴだったわけだが、これがあれば少なくとも死ぬまでのサイクルは長くなることだろう。

「アレ？」

年増女「23！」……訂正しよう。

プラス5才女はしきりに首を傾げている。

「私の呼び名に付いてはもう良いわ……」

そりやどうも。

で、何が問題なんだ？

「私をするようにやってみて」

あん？　こうやって、こうやって、こう。

「ホイミー！」　ホイミー！

彼女の後に続けて行すが、何も起こらなかった。

彼女の手からは白い光が溢れている。

「……アンタ、適性ないわ」

ぐはっ！　これだけ引っ張つといてこのオチかい！

前金使つちまったから、今更断れねーし、俺はコレに賭けてたんだぞ。

どーしてくれる?!

俺の将来は暗澹たるモノだった。

第五話：古の魔物

ホイミが使えなかった……。

衝撃の事実が明らかになった。

が、しかし！

捨てる神あらば拾う神あり。

なんと、炎系呪文であるメラが使えたのだ。

適性がないのは、回復呪文か、勇者の道か。

……もう人としての適性も無くしてるのかも知れないが。

俺は依頼の待つ村へと急いでいた。

何でも、古の魔物が封じられている洞窟から女の声が聞こえると言うのだ。

封じられた魔物は女性型のモンスターだという。

古文書によると、男をたぶらかし、精気を吸い取るという事だ。

だから、他称男好きの勇者に依頼が回ってきたんだが。

……言っておくが、あくまでも他称だ。

俺は、普通に年下女好きだ。

だからこそ、俺にふさわしいとも言える。

大抵、この手の魔物はお姉さまか女王さまだからな。

俺の守備範囲外だ。

だと、思ってたんだがな……。

「おお、勇者よ!! 死んでしまうとは情けない!」

気が付くと、俺は玉座の間にいた。

すげー久しぶりにオッサンに会った気がする。

「で、勇者よ。今回はどうしたんじゃ?」

「いや、洞窟の最深部に扉があつてな……」

俺はオッサンに事のあらましを語りながら、その時の事を思い出していた。

「勇者様! よくぞお越しくございました」

「早速だが、案内してくれ」

俺は、着いて早々、村人に洞窟の入り口まで案内してもらった。

こんな仕事はさっさと終わらせたかったからだ。

「勇者様、コレをお持ちください」

洞窟に入ろうとした俺に、村人が包みを差し出す。

中身は、たいまつ3本に薬草5つ。

代金は？ と問う俺に村人は告げた。

「饑別にございませ。勇者様からお金を取ろうなどと滅相もない」

正直、非常にありがたかった。

実質、手探りで行こうとしていたからだ。

いざとなればメラもあるし。

そんなことを考えていた俺は、激しく心を打たれた。

「わかりました。ありがとうございます。例え死んでも、この依頼を全うしてみせ

ます！」

「さすが、勇者様！ ですが、死んでもなどは言わないでくださいませ。無事なお帰り

をお待ちしております」

良い村人だ。

あのクソ王とはエライ違いだ。

この村人のような人間ばかりなら、世界も平和だったに違いない。

何気に国王批判をしつつ、洞窟を下っていった。

思ってたよりも広いな。

俺の目の前には、大きな鉄の扉がそびえている。

まるで、「勇者の部屋」のようだ。

こんな所に閉じ込められるなんて、ついてないよなあ。

昨日の自分を思い起こさせる。

ここまで来るのに、何故かモンスターは一体も現れなかった。

そのかわり、あちこちから尖った岩が突き出ていたり、落とし穴の如くポツカリ穴の開いた空間があつたりと、たいまつが無ければ間違いない、オッサンと何度も顔を合わす破目になっていただろう。

あの村人に感謝しながら、重い扉を開いた。

へえ、こんな風になつてるのか。

中は、普通の住居のようだった。

暖炉もあるし、テーブルセットもある。それに何かの魔法なのだろう、ほんのりと明るかった。

そこでもなにより目立つのは、部屋のだ真ん中に置かれた天蓋付きの大きなベッド。

そして、そこに腰掛けて泣いている一人の少女の姿だった。

年の頃は5才前後、銀色の長い髪がベッドの上に広がっている。

もつたない、俺はそう思った。

俺は、少女特有のさらさらとした長髪を手櫛ですくのがなにより好きなのだ。

たとえ今は守備範囲外でも、5年も経てば立派なレディーだ。

目の前で美しい髪が傷むのは見たくない。

そう思った俺は彼女に声を掛けた。

「どうしたんだい？ お嬢さん」

「……………すいてるの」

「ん？ なんだって？」

顔を上げる彼女。

予想以上に可愛らしい。

5年後にはさらに美しくなっていることだろう。

「おなかすいてるの」

真つ赤な瞳が俺をじっと見詰めてくる。

「だから、お兄ちゃんの血、ちようだい」

「お主、バカじゃろ」

オッサンの第一声は、俺の繊細な心に深いダメージを与えた。

「第一、洞窟の最深部、扉の向こう側の時点で普通の人間でないことが分かりそうなもん

「じゃろ」

「だって、可愛かったんだぞ。あれが魔物だなんて普通思わねーだろ」

「そうだ、あれは反則だ。」

「俺はリベンジのため、再びあの洞窟へと潜った。」

「そして、扉を開けた。」

「お主、何故生きておるんじゃ?!」

「そこには、あの少女の姿があった。」

「否、あの時よりも微妙に成長している。」

「見た所、8才くらいか。」

「何故、と言われても困る」

「微妙にオツサンと喋り方がかぶる少女は、驚きを隠せない様子。」

「そこはそれ、勇者だから?」

「俺にも分からないことを聞くな。」

「ならば、もう一度吸い尽くしてくれるわ!」

「おお、勇者よ! 死んでしまうとは情けない!」

また死んだらしい。

「じゃあ、もういつペン行って来るわ」

「うむ、頑張るのだぞ。勇者よ！」

オッサンに見送られて、また洞窟に潜る。

「ヒイーツ！ 何故生きておるのじゃ?!」

また成長している。今度は10才くらいか。

おもしろい。

どこまで成長するのか試すことにしよう。

再び、彼女の接吻を首筋に受ける。

3度目ともなると、余裕が出てきたな。

血を飲み下そうとしているのだろう、ときたま首筋に当たる舌の動きが何ともエロい。

おお、意識がぼーつとしてきた。

「これで、二度と生き返るまい」

彼女の言葉を最後に意識が閉じた。

「おお、勇者よ。死んでしまうとは情けない」

再び、オッサンの前。

「じゃ、行って来る」

「うむ、行って来い」

四度、扉を開ける。

「ヒ、ヒイー!! 許してたもれ、許してたもれ!」

彼女は、俺の姿を見た途端、ベッドの中に潜り込んでしまった。

一瞬、垣間見えた彼女の姿は12才くらいだった。

良し! 俺は心の中で喝采を送った。

「怖がることは無いよ。俺は何もしないから」

そう語りかけながら、ベッドに近付く。

「ほ、本当か? 嘘じゃあるまいな。嘘だったら、メラゾーマ喰らわすからな!」

メラゾーマかよ!

内心、ビビりながら優しく諭す。

「大丈夫。今までだって何もしなかっただろ?」

正確には、何も出来なかったただけだが。

「む、そういえばそうじゃったな」

シートからちよこんと頭を出して、上目遣いにこちらを見詰める。

ぐはっ！ ダ、ダメだ、そのカツコでこつちを見るな。

「自己紹介がまだだったな。俺は、勇者をやってる……」

「勇者!?!」

オイ、最後まで紹介させろ。

はあ、仕方ない。

俺は、渋々うなづく。

「そうだ、お……」

「勇者ならば、あの不死性も理解できる」

最後まで喋らせろ。

「お主、竜王を倒すために旅をしておるのじゃな」

閉じ込められていたわりに情報通だな。

「そうだ、た……」

「ならば、わらわも連れて行け!」

だから、最後まで喋らせろと……。

ああ?! いきなり何言ってやがる。

まあ、確かに願っても無いことだが。

「構わんが、そ……」

「では、すぐに準備をしよう！」

人の話を聞け！

彼女は、ベッドを飛び出すと惜しげもなく肌をさらす。

白くてとてもキメの細かい肌だ。

銀色の髪が彼女の裸体に纏わりついて、とてもよく似合う。

陳腐な言い方だが、まるでおとぎ話に出てくる女神のようだった。

じつと見ていると、ふと彼女の真つ赤な瞳と目が合う。

「なんじゃ？ わらわに欲情しておるのか？」

「すまん、こんな所で理想の女性に会ってしまったて、理性が抑えられないんだ」

その言葉に、彼女は何故か頬を染め、とんでもないことを口走った。

「良いぞ。お主はわらわのご主人様じゃからな、契約もせねばならんしな」

その言葉に、俺は必死に握っていた理性の手綱を手放すことにした。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

あ？ ……何で俺、ここにいるんだ？

ひよつとして、これが世に言う『腹上死』って奴か？

「ああ、またな。オツサン」

オツサンへの挨拶もそこそこに再びあの洞窟へ。

果たして、彼女はそこにいた。

「すまぬ、初めてじゃったので加減が効かなんだ。許してたもれ」

「いや、気にするな。そういえば名前を聞いてなかったな」

色々順序が間違ってるような気もするが、気にするな。

俺は気にしない。

「わらわはアリシアじゃ。シアちゃんと呼んでたもれ」

シアちゃんか。

「シアちゃん」

「なんじゃ、あるじ」

打てば響くようなこの返事。

これだよこれ、俺に足りなかったのは。

「シアちゃんのフルネームは何て言うの？」

「わらわの名は、アリシア・フォン・クローベルじゃ」

じゃあ、今度はもう少し深く。

「シアちゃんはいくつかな？」

「さんびやくとんで、じゅうにさいじゃ。つと、あるじ。レディーに年を聞くのはマナー違反じゃぞ」

と同時に、彼女の右手から灼熱の炎がほとぼしる。

ああ、これが炎系最強呪文メラゾーマか……。

全身を炎に焼かれながら、俺は思った。

312才って、どこも飛んでねーだろ、と。

「ナイス、突っ込み……」

これだけを言い残して、俺は死んだ。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

いや、さすがにあれは死ぬだろ。

「して、どうなった？」

「落とした」

端的にそれだけを告げた。

ひよつとしたら、落ちたのは俺のほうかもしれんがな。

そして、再び洞窟へ戻る。

そこで、俺に関して衝撃の事実が明かされた。

「あるじよ。お主、先程のメラゾーマ、防いだじやろ」

「いや、完膚なきまでに死んだが」

「本来なら、骨も残さず焼き尽くすはずじや」

何気に怖いことを言う。

そういえば、死ぬ前に喋る余裕があつたな。

「あるじの対魔法守備力、それなりに回る頭、ひよつとして……」

さりげなく酷いことを言われた。

それなりつて何だよ。それなりつて。

だが、それ以上に続きが気になった。

「お主、魔法使いではないか？」

は？ 開いた口がふさがらなかつた。

第六話：みかわしの服

突然告げられた衝撃の事実。

今にして思えば、確かに兆候はあった。

スライムとの命を懸けた死闘の日々（52戦6勝45敗1分け）。

プライドを捨てて手に入れた200ゴールドが無駄になった勇者コース（メラは共通）。

そして、魔法使いにしか装備できないどくばり、さらにそれに980ゴールドも使ったこと。

ん？ 途中から金の話が変わったな。

まあいい、これからは魔法使いとして生きよう。

そうすれば、俺の人生も薔薇色だ。

……薔薇色つても、ソツチ系の趣味の事じゃないからな！

街へと帰る道は俺は歩いている。

行きと違うのは、一人の少女を連れている事。

自称「守護者」兼「下僕」のシアちゃんだ。

そして、俺の装備も変わっている。

布の服が、みかわしの服になった。

なんと、シアちゃんがくれたのだ。

「わらわのあるじとして、相応しい格好をしてもらわなければ困る」と言つて。

メラを使えるようになったから、スライムなんて目じやないぜ！

しかも、装備は格段にレベルアップ。

なにしろ、みかわしの服といえ、3000ゴールドもするからな！

スライムがあらわれた。

勇者はメラをとなえた。火の玉が指先からほとぼしる。

スライムに6のダメージをあたえた。

スライムを倒した。

「焼きスライムの出来上がりだ」

「うむ、ゼリーのようどうまそうじやな」

「たいして美味いもんじや無かつたぞ」

「食つたのか?!」

いや、金が無くてな。

死んで生き返つても、腹が膨れるわけじやないしな。

スライムのぷりぷりとした身が美味そうに見えてつい。

「生きてる奴を、ガブツと」

何気にひのきの棒よりも攻撃力が高かったのは悲しかったな。

しかも、見事にあたった。

俺の菌形のついたスライムが動きを止めると同時に、俺も意識を失ったからな（冒頭文の1分け）。

うん、あの時のオツサンの言葉ほど、心に響いた物は無かったな。

「さすが、勇者はやるのが違うのう」

シアちゃんが、あの時のオツサンと一字一句同じ言葉を投げかけてくる。

「それで、その後どうしたのじゃ？」

「さすがに見かねたのか、衛兵のおっちゃんが金貸してくれた」

あの時は、あのおっちゃんが神様に見えた。

「しかも、20ゴールドだぞ。20ゴールド。出世払いで構わんとか言ってくれて」

あの時は、おっちゃんにすがって、マジ泣きしたな。

「……苦労したんじゃない、あるじ」

アレ？ 景色が滲んで見える。

泣いてない、俺は泣いてないぞ。

そうこうしている内に、街が見えてきた。

もうすぐ街に着く、その時、奴があらわれた。

そう、俺のライバル、不倶戴天の敵、スライムベスだ。

だが、俺もあの時の俺とは違う！

「シアちゃんは下がっているろ！ アレは、俺が決着を付けなきゃいけない相手だ！」

「イヤ、ふう、……もう何も言うまい」

シアちゃんは激励の言葉をかけようとしたのだろう。

だが、俺たちの間にそんな言葉は意味をなさない。

それに気付いて、言葉をおさめたのだろう。

「さあ、来い！ 勝負だ！」

勇者の攻撃。

勇者はメラをとなえた。しかしMPが足りない。

「アレ？」

スライムベスの攻撃。

スライムベスは体当たりを仕掛けてくる。

勇者は、身をかわした。

「さすが、みかわしの服！」

勇者の攻撃。

「ここは、ひのきの棒で！」

スライムベスはかわした。

「やるな！ さすがは我がライバル！」

だが、ここで俺は致命的な隙を見せてしまった。

ひのきの棒を振り下ろした体勢のまま、奴の攻撃を受けてしまったのだ。

「やばい！ やられる?!」

だが、ここでみかわしの服が驚異的な回避を見せた。

……俺の身体を無視して。

ゴキツ!!

勇者は身をかわした。

しかし、20のダメージを受けた。

勇者は死んでしまった。

「あるじ……、それはどーかと思う」

シアちゃんの悲しそうな声を最後に意識が途絶えた。

「おお、勇者よ！ 死んでしまおうとは情けない!!」

久しぶりに見たオッサンの顔が、何故か滲んで見えた。

第七話：情報屋

俺の目的は何だったか。

勇者として名をあげることか？

金を儲けてウハウハ生活を送ることか？

それとも、世界を征服することか？

どれもこれも遠い道のはるか先にありそうな望みだな。

何で俺は旅をする破目になったんだっけ？

「勇者よ、姫のことはどうなってる？」

「姫？」

ああ、ああ、そういえば、そんな事も言ってたな。

すっかり、忘れてた。

「まさか、忘れていたとは言うまいな」

腰の剣に手をかけながら、オッサンが凄む。

「は、ははは、そんな事あるわけないだろ、オッサン。情報収集集中だよ」

「むう、それならば良いが」

オッサンは手をおろした。

ヤバイヤバイ、危うく殺されるところだった。

しかし、オッサンの娘か。

どんな顔してんだろな。

その時、ふと気付いた。

顔知らねーから、助けても分かんねーんじやないか。

「なあ、オッサン。姫ってどんな顔してんだ？」

失言だった。

鬼の顔というのは、あんな顔なんだろう。

真つ暗になる意識の中で、その顔だけが印象に残っていた。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

あん？ 何だ？ 視界が暗い。

いつもなら、オッサンの顔が見えるはずだが。

ん？ 後頭部に圧迫感がある。

顔にはじゆうたんのふかふか感が。

「くおら！ オッサン！ 足どけろ！ 足どけろ！ 足どけろ！」

俺は、オッサンに踏まれていた。

「全く、なんて事しやがる」

玉座に戻ったオッサンにぶちぶちと文句を言う。

「お主が余りにも阿呆なことを言うのでな。全く、姫はどうしてこんな男に……」
オッサンの言葉が引つ掛かる。

「ん？ ひよつとして会ったことあるのか、俺？」

「覚えておらんのか？ なんと薄情な男よのう。 烏の君と言えばわかるかの」

烏の君……？

あつ！ 思い出した。

6年前に会った、美少女の事だ。

黒髪が余りにもきれいだっただんで、そう呼んでたんだっけ。

あれ？ 何で俺、会ってんだ？

「6年前、お主はこの玉座の間に突然現れたのじゃ」

オッサンが突然、昔話モードに入る。

だが、聞く気は無いので自力で思い出すことにしよう。

あれは、6年前のある晴れた日のことだった。

俺は朝から武器屋で働いてたんだが、仕事が思ったよりも早く終わったんだ。んで、メシでも調達しようとして、川に魚釣りに行った。

結局、見事に落ちて、溺れて、気が付いたらココにいたんだ。

「おおー！ 勇者よ、死んでしまうとは情けない！」

起きた時の第一声はオツサンの声だった。

今、思えば、あの時に目を付けられたんだろう。

俺の勇者人生があこの時から始まったと言ってもおかしくない。

何故、自分が勇者と呼ばれているのかは分からなかったが、悪い気はしなかった。

勇者さま、勇者さまと、懐いてきた少女の姿があつたからだ。

当時15才だった俺は、10才のお姫様に一目惚れしていた。

あれが、年下好きの始まりだったのかもしれない。

名前を呼ぶのが気恥ずかしくて、髪の色にちなんで「烏の君」と呼んでいた。

……当初は「濡れ羽の君」と呼んでいたのだが、オツサンにしこたま殴られて改名したことも思い出した。どうやら、音が濡れ場を連想させたらしい。

なるほど、彼女が姫だったのか。

どうして忘れていたんだろうか？

こんな大事な思い出を。

「とということ、姫の情報が詩人の街にあることがわかった。……勇者よ、聞いておるか？」

オッサンの声に我に返る。

「あつ、スマン！ 聞いてなかった」

再び白刃が閃き、俺の意識は闇に閉ざされた。

「で、あるじよ。詩人の街というのはコチラの方角でいいのか？」

城に入るとき、門番ともめたので、仕方なく城門の外に待機させたシアちゃんと共に、詩人の街を目指している。

詩人の街とは言っても、詩人が住んでいるからではなく、有名な詩人の墓があるかららしい。

「ああ、城から北西に真っ直ぐって話だ」

シアちゃんは、どうも機嫌が悪い。

少なくとも、城に着くまでは鼻歌を唄うほど気分が良かったはずだ。

「シアちゃん、何かあったのか？」

「お主、あの門番とどういふ関係じゃ?」

「どういふ関係つて、勇者と門番以外にどういふ関係が……。」

「はっ! まさか、奴か!」

「無い! 無いつたら無い! 俺は無実だ!」

「それほど必死になるとは……やはり」

「やはりつて何さー?!」

「俺は、ただアイツに刺されただけで……」

「な?! もうそんな関係なのか!」

「ああ、どんどん誤解が広がっていく。」

「俺は、シアちゃん一筋だから……」

「あるじが両刀とは知らなんだ。だが! それでもあるじはあるじ。わらわはどこまで

もお主と一緒に!」

「少しは、話を聞いてくれ……。」

「オッサン、スマンかった。」

「今ならあんたの気持ちがわかる。」

「次に会った時は、何時間でも付き合つてやるから、この仕打ちは勘弁してくれ。」

「いまだ熱弁を振るうシアちゃんの横で、俺の心はどん底まで沈んでいった。」

「さあ！ 着いたぞ、あるじ！」

一人の世界に閉じこもっていた俺は、その声で戻ってきた。

視界に広がる町並みは、城下町と比べると少し閑散としていた。

しかも、城下町と決定的にある部分で違っていた。

「でかい石だなあ」

「うむ、わらわも見るのは初めてじゃが、これほど大きいとは……」

街の中心部に、巨大な石が鎮座していた。

どうも、これが詩人の墓らしい。

「さて、観光に来たわけじゃないんだ。情報収集といこう」

手分けをして、街の人間に片っ端から話を聞いたが、たいした情報は得られなかった。

手に入れた情報といえば、豎琴の音色が魔物を呼び寄せるだとか、ゴーレムは笛の音が苦手だとか、チョット逝っちゃってるんじゃないかと思えるような内容ばかりだった。

シアちゃんと合流して話を聞いたところ、裏の情報屋なる者がいるらしい。

早速行ってみることにした。

「アンタが情報屋かい？」

それらしい男に声を掛けると、黙って右手の手のひらを突き出す。握手かと思つて手を握つたが、違うらしい。

「50」

さすがにそんな俺を見かねたのか、男は声を発した。

「どうやら金を要求しているようだ。」

「せめて、45」

値切つてみた。

すると、シアちゃんに殴られた。

「恥ずかしい事をするでない」

仕方ない。おとなしく50ゴールドを手渡した。

「遥か南の街が、魔物に滅ぼされたそうだ」

「ふむふむ、他には？」

また、黙つて手を差し出す。

結局、200ゴールドも取られてしまった。

領収書を切るように頼んでみたが、無理だと言われてしまった。

ついでに、まともやシアちゃんに殴られた。

みつともないことをするなということらしい。

手に入れた情報は、4つ。

魔物に滅ぼされた街があること。

勇者口トの着ていた鎧がどこかにあること。

姫をさらった魔物が東の方向に飛んでいったこと。

姫がどこかの洞窟に捕らわれているらしいこと。

正直、最初の2つは役に立たない情報だが、後の2つは、まさしく欲しかった情報だった。

……だが、俺はあることに気付いてしまった。

最初の3つは街の噂で片付けられることかもしれないが、最後の1つは間違いなく、魔物と接触を持たなければ手に入らない情報ではないかと。

ひよっとしたら、奴は魔物とつながりがあるのかもしれない。

俺は、近くで警備していた兵士に、人相や場所などを詳しく通報しておいた。

シアちゃんのいない所で、こつそりと。

決して、金を取られた腹いせではない。

断じて、無い。

良い事をした後は、気分が良いなあ。

そんな事を思いながら、俺達は詩人の街を後にした。

第八話：魔法使い

別れの数だけ出合いがあると誰かが言った。

確かに、出合いは嬉しいし、別れは悲しい。

だけど、それは本当に均等なのか？

別れを悲しむより、出会えたことを喜ぼう。

そんなことを誰かが言った。

だけど、悲しいことは、素直に悲しいと言っても良いと俺は思う。

「のう、あるじ。」

城下町の夜。

シアちゃんが散歩に行きたいというので、一緒に歩いている。

いつもなら面倒くさいと断るところだが、何故だろう？

今日は断ることが出来なかった。

人ごみを抜け、静かな川のほとりに来たところでシアちゃんが呟くように話し掛けて

くる。

「なんだ？」

常とは違う様子に内心驚きながら、何でもないことのように返事を返す。

「空がきれいじやな」

「ああ、そうだな」

空には雲ひとつなく、星がきらきらと瞬いている。

彼女の瞳は空を見つめながらも、何か別の物を見ているようにも思えた。

「ちよつと、そこに座ろうか」

そう提案すると、反論することなく、ちよこんとほとりに腰掛けた。

俺は、その横に座り、彼女が話し出すまで待った。

「あるじ、勇者の伝説を知っておるか？」

そう言つて、彼女が語りだしたのは、この国の人間なら誰でも知っている勇者ロトの伝説。

俺のご先祖様の話だ。

だが、俺の知っている話とはいくつか違う所もあつた。

知り合いから聞いた話だと前置きして、色々な事を教えてくれた。

ロトという名は、後世の人間がつけた名だとか、勇者らしからぬ失敗談、数多の冒険談などなど。

だが、もっとも興味を引いたのが、勇者ロトが元々この世界の人間ではないというく

だりだった。

なんでも、空に開いた亀裂から落ちてきたというのだ。

「魔王が死んで、空の亀裂は閉じてしまった。その時、勇者はどう思ったろうな」

そこまで語って、空を見上げた彼女はまるで迷子になった子どものようにも見えた。

「……悲しかっただろうな。置いてきぼりをくらったようなもんだしな」

「そうじゃな。どうにかして帰りたいと、思っても仕方が無いじやろうな」

そう言って、彼女はもう一つの話 시작했다。

勇者口トの後日談だった。

勇者口トは故郷に母を残し、仲間達もそれぞれ故郷に何かを残してきた。

ある者はここで故郷を思いながら暮らすことを選択し、ある者は絶望して死を選んだ。

そして、ある者は故郷に帰る術を探して、闇の力に手を染めた。

そんな一人の魔法使いの話。

結局、その魔法使いは帰ることは出来なかった。

多くの人間を殺し、さらなる力を求め、新たな魔王となった魔法使いは倒されたのだ。

かつての仲間だった勇者の手で。

魔法使いは、死を覚悟した。

けれど、勇者は殺さなかった。

どういうやりとりがあつたかはわからない。

彼女も、そこまではわからないと言つた。

何を思つて、俺にそんな話をしたのかはわからない。

けど、俺は彼女に言つた。

「実際、その立場に立つてみないとわからないけど、俺も殺さないと思うよ」と。

「なぜじゃ?」

「だって、寂しいじゃないか。悪いことをしたのは分かるけど、自分の故郷の事を知ってるのは仲間だけなんだぜ。そんな人間がいなくなるのは寂しいと思う」

シアちゃんは、俺の言葉に「そうか」とだけ答えた。

「わらわはの、もうずいぶん長く生きてきた。人の中で暮らしたこともあるし、魔物の中で暮らしたこともある。でも、皆、わらわより早く死んでいくんじゃない」

だから、洞窟の中で一人ひっそりと暮らしていたのだと言う。

あの古文書も、シアちゃんが書いたのだそうさ。

人との接触を避けるために。

「わらわを退治しようとする者からちよつとだけ血をもらつて生き永らえて来たんじゃ」

どうしてそこまでして？

そう問う俺に、シアちゃんは、約束だからとだけ言った。

だが、待て、ちよつとだけって言ったな。

「俺は思い切り吸われた気がするんだが」

「腹が減りすぎてな。理性が飛んでおつた。でも、驚いたのはわらわとて同じじゃ。吸い尽くしても吸い尽くしても、元の姿で現れるんじやぞ。てつきり、ゴーストかと思つたわ」

そんな事を笑いながら言う。

彼女の顔にはもう先ほどまでの寂しそうな表情は残っていない。

「ほほう、シアちゃんはお化けがこわいのかな〜？」

ベッドで震えていた彼女の姿を思い出し、からかつてみる。

「い、今のはウソじゃ！ そ、そ、そんなことがあるわけなからう！」

必死に否定する彼女の姿に、ふと悪戯心がわく。

彼女の背後から手を回し、向こう側の肩をたたく。

「ヒッ！」

よほど怖かったのか、必死にしがみついてくるシアちゃんに愛しさを感じる。

「俺はここでシアちゃんに誓うよ。絶対に寂しい思いはさせないって。生きてる限りずっとそばにいるから、だから、もっとそんな可愛い所を見せて欲しいな〜なんてね」

「あ、あるじ……、今のはもしや」

「アレ〜？ どうしたのかな〜？ 何があつたのかな〜？」

俺がしたこと気付いたんだろう、シアちゃんの顔が怒りに染まっていく。

うん、やっぱり泣いてるよりは今の顔の方がずっといい。

シアちゃんは、右腕を後ろに引き、俺の鳩尾に向かって振り上げる。

俺に当たる寸前、シアちゃんの唇が何かを呟くように動いた。

その言葉が何かを確認する前に、俺の身体は天高く舞い上がっていた。

「ぬおおおー……！！」

意味の無い絶叫が口を突く。

まるで人が豆粒のようにも見える。

高い、高すぎるよ！ あの体勢から、何でここまで威力があるんだ?!

そして、俺は気付いた。

さっきのシアちゃんの言葉。

たった2文字のフレーズ。

それが「イ オ」だったことに。

その日の最後にオッサンと対面することになったのは言うまでもない。

必死に謝り倒して、仲直りして、翌朝再びオッサンの顔を見たことも言うまでもないことだろう。

第九話：ドラゴン

運命の出会い、それは突然訪れる。

俺とシアちゃんの出会いもそう。

ひよつとすると、オツサンとの出会いも運命だったのかも知れない。

なら、この世の全ては運命で縛られているのだろうか？

俺の奇想天外な人生も。

そして、彼女との出会いも。

「シアちゃん、本当にココであってんのか？」

島と島とをつなぐ、洞窟の中。

魔法で辺りを照らしながら前を歩くシアちゃんに話し掛ける。

「わらわの言うことが信じられんのか？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

詩人の街を出た俺達は一度王城へ戻った後、ココへ来た。

何でも、シアちゃんいわく、詩人の街よりも東の洞窟といえ、シアちゃんのいた洞

窟と、この沼地の洞窟しかないというのだ。

それで、この洞窟を歩いているわけなんだが。

「なんていうか、向こうの出口が見えてるんだけど」

島と島をつなぐ連絡道なだけあって、一本道なのだ。

とても、姫が閉じ込められているとは思えない。

「うるさいのう、あるじは。文句ばかり言っておらんで、少しは魔法の勉強でもしたらどうじゃ？」

「おう、ルーラが使えるようになったぞ」

「着地は出来るようになったのかの？」

くっ、痛いところを突いてくる。

ルーラって、瞬間移動呪文だと聞いていた。

なのに、空を飛ぶんだぞ。

てつきり、パツと消えて、パツと出るもんだと思ってたのに。

ルーラを唱えてから、初めて気付いた。

着地がスゲー怖いってことに。

初めて使ったときは、着地に失敗して頭から地面に減り込んだ。

2度目は、途中で城に突っ込んだ。

3度目は、うっかり屋内で使って、天井に刺さった。実は、いまだに成功していない。

しかも、ルーラを使った後はMPが枯渇するのだから、メラすらも使えない。つまり、戦闘中に死んで、ルーラに戻ってきたとしても、戦力外なのだ。

さらに、着地に失敗して再びオッサンの元へ、ともなりかねない。

俺的には、全く使えない呪文だった。

「まあ、そこはそれ、俺は実践型だから」

「……どういう意味じゃ、それは？」

自分でもよくわからない。

そんな会話をかわしながら進んでいくと、一本道の通路の壁に、扉が付いているのに気付いた。

「シアちゃん、あれあれ」

「扉、じゃな」

早速開けようと扉に近づく。

「あるじ、大抵そういう扉には鍵が掛かっておるか、罨がついておるもんじゃぞ」
そういうことはもつと早く言ってくれ。

シアちゃんの言葉が終わらないうちに、ノブを回していた。

「あれ？ 開いてる？」

でも、罨があるかもしれない。

慎重にドアを開け、隙間から中を確かめる。

「どなたかおられますか？」

俺は見た。

そこに巨大な何かが鎮座しているのを。

隙間からは、洞窟には似つかわしくない熱気があふれてくる。

それが何かに気付いて、俺は扉を閉めた。

「どうしたんじゃ？」

「アカイとかげがいた」

シアちゃんの問いにそう答える。

「……とかげ？」

今度はシアちゃんが覗き込む。

「ドラゴンではないか」

アレがドラゴンなのか、初めて見た。

シアちゃんはそのままた中に滑り込むように入ってしまった。

俺もついていく。

「何者ダ。モシヤ、才前達、勇者ノ一味ダナ。ココニイル王女ヲ助ケニ来タノカ？」
うおっ！ ドラゴンが喋った！

「何じゃ、ここに王女がおるのか。ほれ、わらわの言うたことは間違つてなかつたじゃろ」

シアちゃんが勝ち誇つたように、俺に言う。

「うん、シアちゃんはいいい子いい子」

頭を撫でてやる。

「子ども扱いするでない！」

「満更でもなかつたくせに」

「う、うるさい！」

うんうん、やつぱり、シアちゃんは可愛いなあ。

「貴様ラ、我ヲ馬鹿ニシテオルノカ？」

あー、忘れてた。

ドラゴンがいたんだっけ。

「そこをどいてもらえんかの？ わらわはお主を殺しとうないのじゃ」

シアちゃんが説得する。

だけど、そりゃ逆効果だと思っただけど。

「馬鹿ニスルノモイイカゲンニシロ!!」

ほら、やっぱり怒った。

「ふう、仕方あるまい。相手をしてやろう。あるじは下がっておれ」

ここは、ちよつとした空間になっている。

ドラゴンの背後に、小さな扉がついているのが見えた。

どうやら、あそこに姫がいるようだ。

俺は、後ろに下がって、シアちゃんの戦いを眺めつつ、チャンス逃さないように構

えていた。

「では、わらわから行くぞ」

そう宣言し、詠唱の構えに入る。

あれは、まさか?!

「ダメだ! シアちゃん!」

俺は叫んでいた。

「なんじゃ。邪魔するでない」

「ソレ、イオナズンだろ?! 洞窟が崩れちまう!」

「ああ、そういわれればそうじゃな」

イオナズンとは最強の爆裂呪文。

その名の通り、凄まじい爆発力をもって相手を倒す呪文なのだが……。こんな狭い洞窟内で使う危険性にはさっぱり気付いてなかったらしい。

「では、どうするか」

その場で考え込むシアちゃんを、じっと待っているドラゴン。

意外と律儀な性格のようだ。

「ヒャド系は使えねーのか？」

「うむ、相性が悪くての。 わらわはイオ系とメラ系とギラ系しか使えぬ」

うわ、爆裂系に炎系に閃熱系ってドラゴンと相性悪そうなのばっかじゃねーか。

「仕方あるまい。小技で攻めるかの」

そういつてシアちゃんは、ドラゴンとの距離を詰める。

「イオー！」

右手から白く輝く光球が飛び出す。

それは、ドラゴンに向かって勢い良く飛び出すと、鱗の表面で弾けた。

全然効いてないように見える。

そういえば、ドラゴンの鱗は鋼より硬いとか。

どうやって倒すんだ、そんなモン。

ドラゴンの爪や尻尾を、小柄な身体でひよひよいと避けていく。

そして、イオやギラをぶつける。

さすがに決定打に欠けるようだ。

緊迫した雰囲気の中、時間だけが過ぎていく。

そして、突然、戦局が動いた。

シアちゃんが無かにつまずいて、体勢を崩したのだ。

ドラゴンはその隙を見逃さない。

「危ない!!」

咄嗟に身体が動いていた。

シアちゃんを抱えるようにして、横に跳ぶ。

俺の後ろで奴の尻尾が地面を叩く。

みかわしの服の効果だろうか、どうやらふたりとも無事なようだ。

「すまぬ、あるじ」

腕の中で、シアちゃんが呟く。

「俺だって、やる時はやるさ」

そういつて、抱いていたシアちゃんを地面に立たせた。

すると、彼女は今まで見たことのない構えを見せる。

「あるじ、わらわの闘いをゆつくりと眺めておるがよい。もう無様な姿は見せぬ!」

そう言つて、彼女は俺の隣りでこう叫んだ。

「ド ラ ゴ ラ ム!!」

えっ?! それつて、竜変化呪文じゃなかったっけ?!

こんな近くで使つたら……。

案の定、俺はそのあおりをくらつて、跳ね飛ばされた。

「あるじ、何処に行つたんじゃ?」

変化が終わり、見回したのだから。

俺を見つけたシアちゃんは叫んだ。

「おのれ! 卑怯な! わらわにかなわぬと見て、あるじを狙うとは!!」

「イヤ、ソレハ、我ガヤツタノデハナク……」

「問答無用じゃ! 地獄の底で後悔するがよい!」

スマン、あなつたシアちゃんは止まらない……。

俺は、シアちゃんが逆上して吐いたであろう、灼熱の炎に焼かれながら、死んだ。

だから、こんな狭いところでそんなモン使うんじゃねーよ。

城から必死でルーラで戻ってきた俺が見たのは、煤けた広間と黒焦げになつたドラゴンとわずくまって泣いているシアちゃんだつた。

「あるじ、すまぬ。わらわがふがいなかったばかりに、お主を死なせてしもうた」

シアちゃんをなだめながら話を聞くと、自分が護ってもらったのに、俺を護れなかったことが許せないらしい。

俺が死んだ原因は言わない方がいいな。

そう判断する。

「えつと、お前生きてるか？」

「ヨ、ヨクゾ、我ヲ倒シタ、勇者ヨ。王女はコノ先ニイル。王女ヲ連レテ、トットト出テイケ」

とつとと出て行けつて、生きてんだな、こんな状態なのに。

すげーな、ドラゴンつて。

竜王つてのは、こんなの親分なのか。

きっと、手足がもげてても生えてきたりするんだらうな。

ピンチになったら、尻尾切つて逃げたり。

うわ、めんどくせー。

俺は、姫が捕らわれているであろう部屋の扉の前に立った。

シアちゃんはいまだに泣き続けている。

今更、罨はないだろうが、ゆっくりと扉を開く。

すると、向こうから勢いよく扉が開き、何かが俺にぶつかってきた。「魔物などに、わたくしは屈したりいたしません！」

その言葉と同時に、胸に灼熱感を感じた。

見ると、果物ナイフが根元まで刺さっている。

そりゃねーだろ。

俺の顔を見て、顔面蒼白になる美少女の顔を見て、俺は意識を失った。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！ ……しかし、お早いお帰りだのう」

そんな皮肉を言うオッサンに、俺は何も言うことが出来なかった。

第十話：王女

人の想像力とは素晴らしい物だ。

古来より人は、想像を形にすることで発展してきた。

しかし、時にはそれが恐怖を呼び起こすこともある。

……要するに、今の俺の状況なわけだが。

ようやく戻ってきた。

オッサンには適当な言い訳をしてお茶を濁し、ルーラで戻ってくれば着地に失敗して地面と激しいキスを交わし、そして今またあの扉の前にいる。

この扉の先はどうなっているのだろうか？

俺が殺されたことに気付いたシアちゃんの手でスプラッターハウスになってはいないだろうか？

もしそうなつてたらどうしよう？

オッサンにばれたら、殺される。

いや、殺されても死ねないから、あの特別室で一生を過ごすことになりかねない。

むしろそれよりも悪いかもしれない。

飽きるまで死刑を繰り返されて、となる可能性もある。

そうなる前に、シアちゃんを連れて逃げよう。

意を決して扉を開く。

すると、開ききる前に向こうから何かが俺にぶつかってきた。

これは、あの時の再現か?! とも思ったが違っていた。

「うっ、ぐすっ、ど、どこに行つてたんじゃ、あるじ。わらわを一人にしないでたもれ」

今までにないほど、大泣きしているシアちゃんだった。

大粒の涙が真つ赤な瞳から溢れ、顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

怒つてるわけじゃないみたいだな。

でも、一人? 姫はどうしたんだ?

……ま、まさか?!

最悪の状況を頭に描いたが、どうやらその心配は杞憂だったようだ。

抱きついてくるシアちゃんの頭越しに、部屋の入り口で放心状態になって座り込む姫の姿が見えた。

どうやら、シアちゃんからは、ドラゴンの身体が邪魔になって向こう側が見えなかったようだ。

良かった……、本当に良かった、皆が無事で。

いまだ泣きじやくるシアちゃんを抱き上げて、その頬にそつと唇を寄せる。そして「ゴメンな」ときさやいた。

「うっ、ひつく、よ、よいのじゃ、あるじから目を離れたわらわがいかなのじゃ」
なんか、俺のほうが迷子になったみたいだな。

まったく。

俺の首筋に顔をうずめて嗚咽をもらすシアちゃんを抱いたまま、姫に近付く。

久しぶりに見た姫は、きれいな黒髪を後ろで束ね、その宝石のような瞳は虚空を見つめていた。

「どうやら、俺が近くにいることに気付いていないようだ。」

「姫、姫……」

肩を揺さぶりながら声を掛けると、ようやく目の焦点が合ってきた。

「ゆ、勇者さま！ 私、私……、何て、何て事を。うっ、ううう……」

……今度はこつちか。

「あー、あー、俺、身体だけは丈夫なんですよ、昔から。だ、だからほら、泣かないでください」

もつと他に言うことがないのか、俺。

泣き止む様子が全く見えない彼女の姿にこれ以上なく狼狽える。

「で、でも、私、助けに来て頂いたのに……ううう……」

仕方ない、アレをするか。

昔から、女性の気付けにはこれが一番だつて言うしな。

「姫、失礼します」

そう言つて、俺は姫にキスをした。

無論、唇にだ。柔らかな感触が心地良い。

役得と言うなかれ。

実は正氣づいたシアちゃんに首筋を噛まれているのだ。

正直言つて、非常に痛い。

必死に痛みを噛み殺し、芝居がかった仕草で姫に語りかける。

「烏の君。涙を流しては、せつかくの貴女の黒い瞳が見えなくなってしまう。」

どうか、私に貴女のその美しい宝石のような瞳を見せていただきませんか？」

「あるじ、恥ずかしくないか？」

そんな声が耳もとで聞こえる。

恥ずかしいに決まつてんだらうが！

「姫は、昔からこういうのが好きなんだよ。結婚式ごっことかで、いつも言わされてたん

だぞ」

シアちゃんにだけ、聞こえるように話す。

「あるじ、それはごっこでは無いと思うぞ」

ん？ どういう意味だ？

しかし、聞き返すことはできなかつた。

姫がようやく泣き止んでくれたからだ。

「勇者さま。私の事を覚えていらつしやるのですか？」

「ええ、こんなに美しい貴女を忘れるはずがないでしょう？」

実際には、ついこないだまで忘れていたわけだが。

まあ、口に出さなきやバレはしまい。

「では、約束の事も？」

約束？ なんのことだ？

さっぱり思い出せないが、ここで忘れたとかいうと「そんな、ひどい…」とか言われ

そうだ。

とりあえず、知っていると答えておくか。

「ええ、もちろんです、姫。約束を果たすべく、こうして馳せ参じたのです」

その言葉に、姫は満面の笑みを浮かべる。

うん、正解だったようだ。

「では、私を勇者さまの妻にさせていただけるのですね。うれしゅうございます。ぽっ」
「なんですと？」

「いつそんな約束をしましたか、俺？」

「イテ、イテテ、絞まつてる、絞まつてるよ、シアちゃん。」

「あの、そちらの方は？」

「ヤ、ヤバイ、シアちゃんの事、どう説明しよう？」

「えーと、俺の娘？ 恋人？ 母親？」

「混乱する俺をよそに、事態はマズい方向に動いていた。」

「わらわは、勇者の永遠の伴侶じゃ」

「のぉー！ いきなりなんて事を!!」

「慌てる俺とは対称的に、シアちゃんは冷徹な笑みを浮かべている。」

「しかし、事態は俺たちの想像を遥かに上回った。」

「では、私は第2夫人ですね！」

「は？」

「なんとお呼びすればよろしいでしょうか？ お姉さま？ それとも……」

「えっ、いや、わらわはアリシアという……」

「では、アリシアさまとお呼びしますね！」

「う、うむ」

俺達は顔を見合わせた。

正直、この反応は意外だった。

当の本人は「私、実はお姉さんが欲しかったんです！」とはしゃいでいる。

「あ、あの、良い……の？」

思わず、姫に聞いてしまった。

しかし、返ってきた答えは「何か問題がありましたか？」だった。いや、かなりの美少女だし、俺は異存ないんだけど、シアちゃんがなあ……。

思惑が外れて、呆然としている。

何となくキスしてみた。

「あ、あるじ、突然何をするんじゃ！」

あ、戻ってきた。

姫はと言うと、「まあ、アツアツですわね」と微笑んでいる。

まあ、いいか。

なるようになるさ。

現実逃避だとは分かっているが、そう思わずにはいられなかった。

「あら、勇者さま？ どこかケガでもされてるんですか？」

旅立ちの準備をしていると、姫がそんな事を言ってくる。

ああ、そういうえば、着地失敗だとか、シアちゃんに噛まれた傷とかあったな。

「ああ、でも、たいした傷じゃないよ。すぐになおるし」

死ねば、無かつたことになるしな。

でも、その答えには満足しなかつたようだ。

「いけません！ 例え針に刺されたような小さなケガでも死につながることはあるんです！」

どくばりを指に刺して死んだことを思い出した。

……知ってて言ってるんじゃないよな。

「私に任せてください。少しは心得があるんです」

応急処置でもするのかと思っていた。

「ベホイミ」

小さく唱えると同時に、白い輝きが俺の身体を包み込んだ。

そして、その輝きが消えた時には、全身の痛みも、首筋の傷も全てが消えていた。

「お、王女よ、呪文を使うのか？」

シアちゃんが驚いている。

もちろん、俺も驚いている。

「ハイ、勇者さまの妻として当然のことですわ」

なんか、俺の立場がどんどん弱くなって来ている。

つていうか、俺、イラナイ子なんじゃ？

全快した身体とは裏腹に、俺の心は重く沈んでいた。

洞窟を出た俺達は、北にある温泉の村に向かっていた。

シアちゃんの髪も洗ってやりたいし、姫も身体を清めるには丁度いいと思ったからだ。

「あの？ 姫は他にどんな呪文が使えるんですか？」

「勇者さまほどではありませんわ。ほんのたしなみ程度です」

いや、俺、メラとルーラしか使えないんだけど。

なんか、勘違いされてる？

姫の呪文がたしなみ程度ではないことはすぐに証明された。

モンスターがあらわれたのだ。

そして、俺達はここで、とんでもない間違いに気付かされることになった。

姫が指先から、雷光を放ったのだ。

あの、これって、ひよっとして、ライデイン？
ってことは、姫が本当の勇者さま？

俺の立場は？

俺は本当にイラナイ子？

誰か、俺に教えてくれー！ー！！

心の中で叫んでいた。

第十一話：小さな決意

流れ星が落ちる前に、願い事を3回言えば叶うと教わった。

子どもの頃の俺は何を願っただろうか。

あの頃は、望めば何でも手に入ると思っていた。

ひよっとしたら、願い事なんてしなかったかもしれない。

今の俺の願いは何だろうか？

大人になった俺は一体何を願うのだろうか。

ようやく村に辿りついた俺達は、小さな宿屋に泊まることにした。

このご時世、客が来ることは滅多にないそうなので、俺達の貸切状態になっている。

姫は、早々に身体を清めたいのか、浴場に行った。

まあ、ひと月以上、ろくに着替えもできなかつたらしいので当然のことだろう。

俺はというと、シアちゃんの髪を梳いている。

洞窟での戦闘でススだらけになってしまったので洗ってやりたいのだ。

長髪の場合、洗う前に梳いておかないと絡まってしまう。

それを防ぐためにやってるんだけど、意外と大変な作業だったりする。

「考えてみれば、当然のことじゃな」

「なにが？」

突然、話し掛けてきたシアちゃんだが、何の話だかさっぱりわからない。

俺の返事も当然、聞き返すものになってしまった。

「王女のことじゃ」

「……ああ」

おそらく、姫が勇者だったことについてだろう。

正直、その話はしたくなかった。

けれど、シアちゃんはそんな俺に気付くことなく、先を続ける。

「魔王の支配によつて権威を失った王家が、勇者の血筋を取り込むのは当然といえば当

然のことじゃ。勇者本人でなくとも、子孫が王族に取り入った可能性もあるしの」

確かにその通りだ。

どつちが先にアプローチしたのかはわからないが、王家は勇者を引き入れることで、

求心力を高められるし、勇者側からみれば、王家に取り入るチャンスでもある。

実際の所はどうなのかはわからないが、その可能性は高いだろう。

けど、わからない事がある。

「どうして、俺が勇者なんだ？」

旅立ってから、ずっと思っていた。

剣も使えない。魔法も使えない。

ないないづくしの俺が、何故勇者と呼ばれるんだろう？

シアちゃんも、そんな俺の疑問にあっさりと答えた。

「それは、あるじがある意味、不死身だからじゃ。ロトも同じ能力を持っていたからかも知れぬがな」

「それは、勇者だからじゃないのか？」

「違う。勇者だから不死身ではない。不死身だから勇者となり得るんじゃ」

「じゃあ、姫は？」

姫は俺と同じ能力を持つてるわけじゃないのか？

「あるじ、お主はどうやって不死身かそうでないかを見分ける？」

「そりゃ、実際に殺してみるしか……、そうか！」

実際に死んでみて、初めてわかる能力なんだ。

死んだことのない人間は、この能力を持ってないってことになる。

「あくまでも、王女は勇者の素養を持った、けれども、勇者ではない、別の何かなのじゃ」

だから、俺が勇者なのか。

「……なんか俺ってかっこ悪いよな」

「なんじゃ？　突然？」

「俺さ、勇者だつて突然言われた時、本当に嫌だった。でも、どこか嬉しかった。俺も伝説の勇者みたいに、強くなるんだつて思つてた」

けど、現実は違つた。

「何度も何度も死んでさ。でも、全然強くなれないし、魔法もちよつとしか使えない。挙句の果てに、実は魔法使いだつて言われて……、姫も……」

涙がこみ上げて来る。

自分でも何を言つてるのかさっぱりわからない。

ただ、心に溜め込んでいた物を吐き出したかった。

「俺は、誰かを助けられるほど強くない。自分の身さえ守れない。それに……」

「あるじ、わらわは何度もお主に助けられた」

シアちゃんが、俺の言葉を遮るように語り掛けてくる。

「だけど、それは……」

「わらわの事、前に話したじゃろ。ずっと一人ぼっちじゃったわらわをあるじは助けてくれた。それに、ドラゴンとの戦いでも助けてくれた」

「それは、身体が勝手に……、それに、俺は死なないし」

「死なない云々は、後から出て来た事じゃろう？ その時は、そんな事考えもしなかったじゃろ？」

確かにその通りだ。

ただ、シアちゃんが危ないと思っただから。

「それが出来るのが、勇者じゃとわらわは思う」

シアちゃんの言葉は、俺の心に開いた隙間を塞いでくれた。

嬉しかった、ただ、無性に嬉しかった。

「俺、強くなるよ」

そして、シアちゃんの勇者になる。

小さな小さな決意。

けれど、俺にとっては大きな一歩。

俺の勇者への道は、今、本当の意味で始まったのかもしれない。

翌朝、俺達は王城へと向かう事にした。

姫を救出した報告をするためと、この後の指針を聞くためだ。

なんでも、王の能力で、強くなるためにはどのくらいの経験が必要かがわかるというのだ。

俺はオッサンにそんな事が出来るとは聞いてないが、シアちゃんの言うことだし、間違っていると言うことはないだろう。

歩き続けて、2日。

俺達は、遂に王城へと帰還した。

どこにいたんだというほど、たくさんの人が感謝の言葉をくれた。

あのオッサンですら、泣きながら、何度も頭を下げた。

「勇者よ、よくぞ、よくぞ！ 姫を助け出してくれた。思えば長い道のりだった。勇者をここに呼び、姫の救出を頼んでから、早1ヶ月。もうこの勇者ではダメなんじゃないかと何度思ったことか」

あのな、オッサン。嬉しいのはわかるんだが、スゲー失礼だぞ、ソレ。

「もうダメなんじゃないか」ならわかるんだが、「この勇者では」ってなんだよ。

まあ、確かに、ほんの数日前まで忘れてたわけだが。

だが、オッサンの言葉には続きがあった。

「だが！ 勇者は見事使命を果たし、姫をわしの元へと連れ帰ってくれた。心から礼を言わせてもらおう。ありがとう、勇者よ」

うわ、何か照れる。

俺、ほとんど何もやってないのに。

「さて、勇者よ。褒美は何がいい？ 出来る限りの物を用意しよう」

「えっ、マジ？」

オッサンは、鷹揚に頷いてみせる。

「うむ。何でも好きなものを言おうとよい」

「じゃあ、平穏な生活」

「それは無理じゃ」

即答かよ！ あっ、コラ、顔背けてんじゃねー！

ちっ、仕方ねーな。じゃあ、何がいいかなあ？

俺が何かを言う前に、姫が口を開いた。

「お父様、私は勇者さまと共に旅に出たいのです」

「何！ 勇者よ、どうということじゃ！」

いや、俺も何が何だか。

「私と勇者さまは、将来を約束した身。一時も離れたくないのでございます！」

「ほほう、では、勇者は姫を所望するというのじゃな」

睨んでる、睨んでるよ、おい。

「え……つと、そうだったり、なかつたり」

「勇者さま、私がいでは、迷惑でしょうか？」

姫が涙目で俺を見つめてくる。

こころなしか、オツサンの視線がさらに強くなつた気がする。

ここで、迷惑などと答えれば、姫を泣かせたとか言つて、成敗されそうだからといつて、そんなことはないと言つても成敗されることになりそうだからといふんだ。

だが、神は俺を見捨ててはいなかつた。

「王よ、今すぐ決めることはないじやろう」

「お主は？」

「わらわの名は、アリシアという。あるじ……勇者の守護者をしておる」

「ふむ、先程の言、どういうことだ？」

「王女は共に旅に出たいと言つただけじや。……わかるな？」

「む、言われてみれば、その通りじやな」

しばらく考え込んだ後、オツサンは結論を出した。

「姫の頼み、しかと聞き届けた。共に旅立つことを許そう。ただし、勇者よ！」

えっ？　俺？

「お主達の仲を認めたわけではないことをゆめゆめ忘れるでないぞ」

えっ、どういうこと？

「ありがとうございます、お父様！」

全然わかんないんだけど、教えてシアちゃん。

「……要するに、手を出したらアウトじゃ」

あー、なるほど。

あくまでも、仲間としてついてくるんであつて、恋人ではないってことか。

そうこうしているうちに、時は流れ、旅立ちの日を迎えた。

「王よ、わらわは後どのくらいで強くなれるのじゃ？」

シアちゃんが玉座に座るオツサンにたずねる。

「ふむ、アリシアどのは、後1億3千万でレベルが上がるじやろう」

うお、本当にわかるのか。

でも、どういう基準なんだ？

「スライムでいえば、6千万匹ほど殺せということじゃ」

「本当に？」

「ウソじゃ」

嘘か？……なんか本気っぽかったんだけど。

まあ、いいや。

「ほれ、次はあるじの番じゃぞ」

「じゃあ、オツサン、俺も頼む」

「う……うむ」

なんだ？ 何か言いよんどる。

ん？ 手招き？ シアちゃんにか？

「ん？ なんじゃ？」

オツサンに耳打ちされたシアちゃんの顔に驚きが広がる。

なんか、やばいものでも見えたのか？

「その、なんじゃ、気を落とすでないぞ、あるじ。これは一つの指針でしかないのじゃ」

「どういう意味だ？」

オツサンを見ると、今までになく悩んでいる様子だった。

「その、何と言うかの、あまりに気の毒で、今まで言えなかったのだが……」

「なんだよ！ さっさと言ってくれ。気持ち悪いじゃねーか」

「これは、王としてのマニユアルに書いてあるんじゃないからな。わしを恨むんじゃないぞ」

「いいから、言えって」

「……では、言うぞ。……ぞ、そなたは、もう、充分に強い。なぜにまだ竜王を倒せぬの

か、じゃ」

目の前が真っ暗になった。

竜王とスライムってガチだったのか？

それとも、スライムが強かったのか？

世界は、俺に厳しかった。

第十二話：いかづちの杖

時間を戻したい。

そう思った事はないだろうか。

取り返しのつかない事をしてしまった時。

たとえば、朝起きたら、裸の女性が横に寝てた時。

ああ、時が戻ればいいのに。

「……やっちゃまった」

最初に思ったのはその一言だった。

部屋の窓からは朝の光が差し込んでいる。

そして、俺の隣りには、あどけない表情で眠る少女の姿があった。

正直、何があったのか、さっぱり覚えていないが、状況的にアウトだろう。

……どうしよう、オッサンにばれたら殺される。

それより、シアちゃんにばれたらやばい。

昨日の今日で、もう手を出しましたなんて知れた日にはどんな仕打ちを受けること

か。

さいわい、シアちゃんは出掛けてくると言ったまま、昨夜から戻って来てない。せめて、この状況から抜け出そう。

「姫、姫、起きて下さい」

隣りで眠る少女を揺さぶる。

「…………ふ、うん…………あ、勇……者さま？」

目が覚めたようだ。

…………しかし、これは目に毒だ。

薄いシートに包まれた姫の身体は、俺を興奮させるには充分だった。

うお、やばい。

俺の体の一部分に、血液が集まるのを感じる。

「まあ、勇者さま。ゆうべはあんなに激しゆうございましたのに。ぽっ

は、激しく？ ……何やったんだろう、俺？

何で覚えてないんだよ、俺！

こんな、こんな、人生の一大イベントなのに。

俺は、思わず頭を抱えた。

「あら、二日酔いですか？ 昨夜はたくさん飲まれてましたから……」

酒? ……そうだ、酒だ!

昨夜は初めて酒を飲んだんだ。

昨日の事を思い出そうとした……が、そんな場合ではない。

「それより! 姫、早く着替えてください!」

「わかりましたわ。でも、その前に……」

姫は、こちらを向いて目を瞑る。

こ、これは、まさか、おはようのキスって奴ですか?!

俺は、何となく辺りを見回してから、唇に触れるだけのキスをした。

「ふふっ、ここのうの、夢だったんです」

そう言って笑う姫はとても可愛かった。

シアちゃんが帰って来たのは、支度が終わって朝食を食べている時だった。

腕には、長い棒状の包みを抱えている。

「お疲れ様です。アリシアさま」

「シアちゃん、何ソレ?」

「後のお楽しみじゃ」

そう言って、シアちゃんは笑う。

「どうやら、昨夜の事はばれてはいないようだ。

ほっと胸を撫で下ろす。

「そこへ、宿の主人がやってきた。

「お早うございます、勇者様。ゆうべはお楽しみでしたね」

イキナリ何言うとするか?!

「ん？ 何の話じゃ？」

シアちゃんは、首をかしげている。

「いや、昨夜、酒を飲みすぎちゃって……」

「ふむ、そうか。程々にするんじゃぞ」

「はあ、良かった。」

「では、わらわも支度をしてくるとしよう。あるじ達はゆっくりしておれ」

「そう言い残すと、シアちゃんは機嫌良さげに鍵を指先でクルクルと回しながら階段を登っていく。

ドアが閉まる音を確認して、俺は主人へと詰め寄った。

「どくばりを手にして……」。

「おっさん、わかるな。余計なことを言うんじゃないぞ。死にたくなければ、な」

俺は、主人の首筋にどくばりを突き付けながら、お願いをする。そう、これはお願いだ。

決して、脅迫などではない。

主人はぶるぶると震えているがきつと寒いのだろう。

「あの……、勇者さま」

はっ、そういえば姫の事を忘れてた。

振り向くと、姫がこう言った。

「口封じ……いたしましょうか？」

あの、姫、満面の笑みを浮かべながら、立てた親指で首を掻き切る動作はやめて下さい。

夢に出そうですから。

いえ、ですから、剣に手を伸ばさないで下さい。

主人の震えはいつの間にか「ぶるぶる」から「がたがた」に変わっている。

「いえ、さすがに、そこまでは……」

「そうですね。さすが、勇者さま。……後始末が大変ですものね♪」

いや、そういう事ではなくて……。

やっぱり、オッサンの娘だ。

いや、正直言って、こっちの方が怖い。

思わぬところで、血のつながりを確認した朝の出来事だった。

「準備は良いな」

支度の終わったシアちゃんが号令をかける。

いつものように、青いローブを身にまとい、フードはかぶらずに銀色の髪を後ろにたらしめている。

「はい、大丈夫です」

そう答えた姫は、動きを阻害しない程度に軽量化された鋼の鎧を身にまとい、腰には鋼の剣を吊るしている。

長い黒髪は結い上げて、銀色の髪留めでとめられていた。

盾は持たない主義なんだそうだ。まあ、両手で剣を握るからなんだけど。

しかし、あれだな、何と言うか、オッサンと同レベルくらいらしいんだよ、剣の腕。

何で、さらわれたりしたんだらうな？

「あるじ、忘れ物なぞしておらんか？」

「ああ、問題ない」

そういう俺はというと、旅を始めた頃に買ったひのきの棒と、980ゴールドで買っ

たどくばり、それにシアちゃんにもらったみかわしの服しか装備がない（なべのふたは壊れた）。

後は、旅に必要な保存食や調味料、薬、調理道具等の入ったりユックだけだ。

勇者が荷物持ちなんてパーティーは後にも先にも俺達だけだろう。

「では、主人、世話になったの」

シアちゃんの呼びかけに、宿の主人はこくこくと頷いた。

何故か、声が出ないようだ。

……やりすぎたか？

シアちゃんはいぶかしげにしていたが、そのまま玄関を出て行った。

「あの話、くれぐれもお願ひしますね。では、ご健勝をお祈りしております」

姫は、そう声をかけて出て行った。

それって、裏を返せば、何か洩らしたら命は無いつてことですか？

主人もそう考えたのだろう、またがたがたと震え始めた。

「あー、悪かったな」

主人は白目を剥きかけている。

俺はなけなしの50ゴールドをカウンターに置き、外に出た。

これで、美味しいもんでも食って、さっきの事は忘れてくれ。

そう眩きながら。

外は、快晴だった。

城下町の街並みが、朝日に照らされて輝いて見える。

シアちゃんは、俺が宿から出てくると、街の外に出るよう促した。

しばらく歩き、街から充分離れた草原に來ると、立ち止まった。

「この辺で良からう」

何をするんだらう？

シアちゃんは、手に持った布包みを解き始めた。

中から出てきたのは、装飾の施された杖だった。

先には寶石のような緑色の石がはめ込まれている。

「アリシアさま、それは？」

姫が問うと、シアちゃんはその杖を掲げた。

「これは、伝説のいかづちの杖じゃ！」

「いや、偽物だろ。どうせ」

間髪入れずに発した俺の返事に気分を害したようだ。

指先に炎が浮かんでいる。

「ほほう、あるじは余程死にたいと見える」

やば、何かフオローをせねば。

「いや、昔、俺が勤めてた武器屋に持ち込んできた奴がいてさ、それが見事に偽物で。そういうことがあつたからさ、はっはっは」

「む、そういうことならば仕方あるまい。実際に使つて見せようぞ」

シアちゃんはそう言うのと、杖を大きな岩に向けて「いかづちよ！」と叫んだ。杖から閃光がほとばしると、前方の岩が吹き飛んだ。

「おおー すげー！」

「まあ、すばらしいですわ」

「ふふ、ざつとこんなもんじゃ」

シアちゃんは勝ち誇っている。

「疑つてゴメンナサイ」

俺は素直に謝った。

でも、一つ不思議な事に気が付いた。

「あのさ、シアちゃん。今の、ギラ系の効果だつたと思うんだけど、どうしていかづち、つまり雷なんだ？」

「……あるじ、それが世界の理じゃ。気にしては負けぞ」

「ん、わかった」

これは口にしてはいけない事だったらしい。
素直に引き下がることにした。

「で、の。これがあるじに渡そうと思ってる」

「俺に？」

シアちゃんは頷く。

「うむ、これを使うには魔力はいらぬ。あるじには願っても無いことじやろ」

「俺のために、苦労して？」

「……う、うむ。その、あるじのためじゃからな」

そう言って、照れたようにうつむく。

俺は、大人しく受け取ることにした。

「ありがとう、シアちゃん。使わせてもらうよ」

「うむ」

「私には、何もありませんか？ アリシアさま」

姫が、うらやましくなったのか、シアちゃんに尋ねる。

いや、そんなポンポン出てくるもんじゃ……。

「もちろん、忘れてなぞおらぬ」

そう言って、指輪を取り出す。

あるんかい！

「これは？」

「疾風の指輪じゃ。すばやい動きが出来るようになるそうじゃ」

「ありがとうございます。では、少し試してきますね」

そう言って、姫は走り去った。

「あまり遠くへ行くでないぞ！」

「わかってます！」

遠くから返事が返ってくる。

まあ、俺より強いし大丈夫だろう。

「では、あるじも試すと良い。宝石を相手に向けるのじゃぞ」

シアちゃんが指差した先には、奴が、あのスライムベスがいた。

俺にはわかる。

別の個体ではない。奴に、俺のライバルに相違ない。

向こうも、俺を認識したのか近付いてくる。

「今度こそ！ 今度こそ、シアちゃんにもらった愛の力で、お前に勝ってみせる！」

「あ、あるじ、恥ずかしい事を言うでない……」

スライムベスの攻撃。

体当たりを仕掛けてくる。

勇者は、身をかわした。

「お前の攻撃は、既に見切った！ 今度はこちらの番だ！」

勇者の攻撃。

勇者はいかづちの杖を使った。

「いかづちよ！」

「あるじ！ 向きが逆じゃ！」

シアちゃんの忠告は一瞬遅かった。

宝石からほとぼりした閃光が俺の視界を真っ白に染める。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

また、これか……。

俺は、杖を掲げたまま、オッサンの前に立っていた。

もつと、使い方を聞いたとくんだった。

あの時に戻れたならば……。

俺は、後悔に包まれていた。

第十三話：太陽の石

夢を見た。

夢の中の俺はどこかの飼い犬だった。

子どもと遊んだり、ご飯を3食もらえたり、眠くなったら寝てみたり。

食う寝る遊ぶの三拍子そろった生活だった。

目が覚めた時、何故か涙が出た。

いかづちの杖の暴発に巻き込まれた（事にした）俺は、いまだ城にいた。
オツサンが、渡したい物があるというのだ。

はっ！ まさか、宿の主人が密告したんじや……？

引導を渡すってオチじやないよな。

そうなる前にいつそ殺るか？

ちようど、ここにはいかづちの杖がある。

まさか、これを防ぐって事はあるまい。

「それで、渡したい物ってのは何なんだ？」

杖を握り直しながら尋ねる。

何か動きがあつたら撃とう、そう心に決めて。

「ふむ、これじゃ」

そう言つて、オツサンが取り出したのは握りこぶし大の石だった。

何だそりゃ？

「これは、太陽の石というものじゃ」

太陽の石？

どっかそこら辺に落ちてゐる石と交換してもわからなそうだな。

「雨と太陽が合わさる時、虹の橋が出来る。この言葉と共に、代々伝えられてきた物じゃ。きっと、竜王を倒すのに、役立つことだろう。お主が竜王を討ち滅ぼし、世界に平和をもたらすことをわしは信じておる。さあ、勇者よ、旅立つのだ！」

「しっつもん！」

俺は声をあげた。

「何じゃ、良い所であつたのに」

オツサンは残念そうだ。

だが、これだけは確認しなければならぬ。

「あのさあ、俺、竜王を倒せって言われた覚えないけど？」

そう、俺は姫を助けて来いと言われたが、竜王を倒して来いとは言われていない。あの時点で、お役御免だったはずだ。

「今、言ったではないか」

「待て待て待て待て！ 今つて、今この場でつてことか？」

「そうじゃ。では、問題ないな」

「あるに決まってるだろ！」

だが、俺の意見は封殺された。

「衛兵、勇者殿をお見送りせよ」

何処からともなく現れた衛兵に羽交い絞めにされ、玉座の間から連れ出される。

「では、勇者よ、旅立つのだ！ 朗報を期待しておるぞ」

うっわ、めちやくちやムカつく。

「竜王倒したら、今度はテメーの番だ!! 覚えてやがれ!!」

俺は勇者らしくからぬ捨て台詞を残し、城から放り出されてしまった。

「ちよつと待て、俺は勇者だぞ！ 何でこんな仕打ちを受けるんだ?!」

衛兵に叫ぶ。

「この間貸した20ゴールドを返すなら、勇者と認めよう」

くおつ、こないだのおっさんか?!

ポケットを探る。

……しまった。朝、宿屋に置いて来たんだった。

しかも、さつき死んだので、5ゴールドしか残ってない。

「悪い、今持ち合わせが無い」

「では、出直してくるが良い。文無し冒険者よ」

も、もんなし?!

目の前で扉が閉まる。

「ちよつと待て！ 誰が文無しだ！」

叩けど喚けど返事は無い。

諦めて戻ろうとした時、

「姫様が憎い。僕も、勇者様の胸に抱かれない……」

物騒なセリフが背後から聞こえた。

振り向くと、そこにいるのは例の門番。

なんだ、このイベントの数々は？

そんなに俺を貶めたいか?!

「何が悲しゆうて、男を抱かにはあならんのだ！」

「そんな、ひどい……」

泣き崩れる兵士。

何処からとも無く、ひそひそ声が聞こえてくる。

「ほら、アレ見て。可哀想、あんなに想ってるのに……」

「きつと、姫様との結婚に邪魔になったから捨てるのよ」

「サイテー、私、ちよつとあこがれてたのに……」

明らかに聞こえるように言ってるだろ、お前ら。

「うわーん!! 覚えてやがれ、こんちくしょー!!」

俺は泣きながら街へ走った。

マジ泣きだった。

「おや、兄さん。こんな所で何泣いてんだい？」

顔を上げると、いつぞやの酒場の店主。

いつの間にか、表通りを突っ切って、酒場の前まで来ていたらしい。

理由を話すと店の中に入れてくれた。

まだ準備中なのだろう、静かな店内は落ち着いたたたずまいを見せている。

「あの時は悪かったねえ。急ぎの依頼だったから、ろくすつば確認もしないでさ。しかし、男好きってわけでも無いのに良く完遂できたもんだね。さすが、勇者って所かな」

俺の話をあつさり信じてくれた。

この人は、良い人だ！

守備範囲外だけど、良い人だ！

俺は、あの時のシアちゃんとの出会いを話すことにした。

「へえー、魔物と心を通わすか、そんな事も出来るんだね。……ちよつと待つて。今、ア

リシアって言ったよね」

「ああ、そうだけど……」

なんだ？ 討伐依頼が出てるって言うんじゃないだろうな。

「アリシア、アリシア、あつ、思い出した！ 確か、ここら辺に……、あつた」

「なんだ？ 妙な依頼じゃないだろうな」

俺の質問に、店主は首を振った。

「違う違う、ただの情報さ」

「情報？」

「そ。南の方にずいぶん前に魔物に滅ぼされた街があるんだ」

その話はどこかで聞いたことがあるな。

「そこにね、最近、魔物が住み着いたらしいんだよ」

「それが、シアちゃんと何の関係が？」

「まあ、話は最後まで聞きなよ」

店主によると、その魔物は人を襲うことは無いらしい。ただ、女が相手だったとき、必ずこう訊ねるらしい。

「お前は、アリシアか？」と。

「なんでも、家ほどの大きさの黒い鎧を着た魔物らしいよ」

俺は、店主に別れを告げると、シアちゃんの元へと急いだ。

シアちゃんは、姫と一緒にあの場所で待っていた。

「遅い！ 何をやっておったのじゃー！」

シアちゃんに走り寄ると、カウンターで殴られた。

姫がすかさずホイミをかけてくれる。

「そんな事より！」

「そんな事?! わらわを待たすのは、そんな事なのか?!」

「まあまあ、アリシアさま」

姫が間をとりなしてくれる。

姫に礼を言うと、オッサンに渡された物を見せる。

「これは、太陽の石か?!」

「アレ？ 何で知ってんの、シアちゃん？」

じつと見つめると、顔を背けた。

そして「知っておるから、そう言っただけじゃ！」と吐き捨てるように言った。

あちゃー、完全に怒らせちゃったみたいだ。

「確か、雨が太陽になる……だったっけ？」

「雨と太陽が合わさる時、虹の橋ができる。古くからの言い伝えですわ」

姫が補足してくれる。

「そう、ソレー！」

それに、それだけじゃない。

俺は、店主の話を皆に話した。

「悪魔の騎士……」

最後まで話し終えた時、シアちゃんがそう呟いた。

けれども、結局それ以上の事は、何も教えてくれなかった。

そして、翌朝、シアちゃんがいなくなった。

ただ「すまぬ」と一言だけ書いた手紙を残して。

第十四話：悪魔の騎士

彼女は、一人にするなど俺に言った。

俺は、彼女のために強くなると誓った。

けれど、彼女はたった独りで行ってしまった。

俺は彼女と共に生きると約束した。

ならば、俺のする事はただ一つ。

どこまでも、彼女を追いかける事だ。

俺は走った。

姫が引き止めるのも無視して。

街を出て、ただひたすら南へと。

息が切れる。

足が震える。

俺の体力の無さが恨めしい。

彼女は今、一体何処にいるんだろうか。

嫌な想像が頭に浮かぶ。
ダメだ。

余計な事は考えるな。

ただ、足を動かせばいい。

「勇者さまー！」

振り切ったはずの、姫の声が聞こえた。

振り返るとそこには、白馬に乗った彼女の姿。

「早くこちらへ！」

彼女の乗った馬に、無様に這い上がり、姫の腰に手を回す。

「しっかり、つかまっていてください」

馬は駆ける。

風景が、どんどん後ろへ流れていく。

当然、俺が走る速さとは比べ物にならない。

情けない。もつと冷静になれ。

俺は、シアちゃんの事しか頭に無かった。

姫が助けてくれなければ、シアちゃんの所まで辿りつけなかったかもしれない。

そう思ったとき、自然に言葉が漏れた。

「ありがとう」

「勇者さま？ 何かおっしやいまして？」

聞こえなかったらしい。

でも、それでいい。

俺は、姫を抱く腕をそつと強めた。

もう誰も失いたくない。

その決意を込めて。

疲れ果てた馬を放し、徒歩で滅びた街へ向かう。

だいぶ距離を稼いだはずだ。

もしかすると、目の前にひよっこり現れるかもしれない。

そう願いながら、ただひたすら歩き続けた。

「勇者さま、アレではないでしょうか？」

姫の声に、顔を上げる。

既に廃墟と化した街の残骸が見える。

残念ながら、ここまでに会おうことは無かった。

最悪の想像が頭をよぎる。

ん？ 何か聞こえる。

立ち止まり、耳をすませる。

話し声？

物陰に身を潜めながら、声の聞こえる方を覗く。

「久しいな、アリシア・フォン・クロールベル。いや、鮮血の魔女と呼ぶべきか？」

「ふん。そんな昔の事は忘れてしまおうたわ」

見つけた！ 良かった、無事だった。

飛び出そうとする俺を、姫が引き止める。

「もっと、状況を確認してからですわ」

また、やっちまった。

冷静になれ。

そう自分に言い聞かせ、姫に礼を言い、もう一度確認する。

シアちゃんの前に、黒い小山のような物が見える。

恐らくアレが、悪魔の騎士なのだろう。

洞窟で戦ったドラゴンよりは一回り程小さいが、きつとドラゴンよりも強いんだろ
う。

そんな風に思える。

「今は、人間に飼われているのだったな。その姿は、そいつの趣味か？」

「飼われているつもりは無い。わらわとあるじは対等の関係じゃ」

シアちゃん……。

「ふむ、当代の勇者は男好きと聞いておるぞ？」

ぶふう！ 何で、魔物にまで知られている?!

「……それは否定せぬ」

そこは否定しろよ！ まだ信じてなかったのか。

ん？ 姫、なんですか？

「本当、なんですか？」

「断じて違います」

姫に断言すると、再び注意を向ける。

「世間話をするために呼んだのではあるまい。一体、何用じゃ？」

「そうだな。単刀直入に言おう。竜王様の部下となる気はないか？」

「断る」

「ふん。あの男との約束がそんなに大事か？」

約束？ そういえば、前にそんな事を言ってたな。

「貴様には関係ない」

シアちゃんの瞳が冷たく輝く。

「あの男、確かアルスとか言ったか？」

「黙れ！ 貴様がその名を口にするな！」

あれほど怒ったシアちゃんは初めて見る。

でも、俺はアルスという名前が気になった。

シアちゃんにとって、大切な名前らしい。

少し、胸が痛む。

激昂したシアちゃんは両手を広げ、詠唱を始める。

そのわずかな隙に、悪魔の騎士は懐から何かを取り出すと、シアちゃんに投げ付けた。

ソレは、彼女の眼前ではじけ、光を発する。

目くらましのつもりかと思った。

しかし、その効果は次の瞬間にわかった。

「ベギラゴン！」

詠唱が完了した。

しかし、何も起こらない。

シアちゃんの顔に焦りが浮かぶ。

勝ち誇ったように笑う、悪魔の騎士。

「ふはははは！ 竜王様謹製の魔封じの玉だ。これで、しばらく呪文は使えまい！」
「おのれ！ 卑怯な！」

叫ぶ、シアちゃん。

「いつまでも呪文などに頼るからこうなる。これで、お前との戦いも終わりだ。アノ約束を守ってもらおうか」

そう言いながら、懐から何かを取り出そうとする。

「くっ、わらわがそのような辱めを甘んじて受けると思うな！」

何をさせる気だ？

シアちゃんがこれほど取り乱すなんて。

そして、取り出した物を見た俺は驚愕した。

「今こそ、300年の宿願を果たす時！ さあ、おとなしくこれを着てもらおう」
悪魔の騎士の右手に握られた物。

それは、メイド服だった。

俺は、メイド服は嫌いだ。

女性を従属させるような気分になるからだ。

シアちゃんも最初は下僕だと自称していたが、改めさせたほどだ。俺は、あくまでも対等の関係でいたいと思っている。

そういう意味でも、奴は許しがたい敵になってしまった。

いかづちの杖を構える俺に、姫が何かを手渡してくる。

ま、まさか、これは……！ どうして姫がこんな物を。

「アリシアさまに似合うと思ひまして、事前を買っておりました」

さすが、姫。

「ありがとう。シアちゃんも喜ぶよ」

姫をそつと抱きしめ、それを受け取る。

「じゃあ、行くよ」

「はい、いつでも」

右手に構えた杖を、奴の手元に向ける。

そして、俺は叫んだ。

「いかづちよ!!」

杖から放たれた光は、狙いをあやまたず、メイド服を直撃する。

燃え上がるメイド服。

「ま、魔法のメイド服が……。おのれ！ 何者だ！」

「俺のシアちゃんにメイド服を着せようとは、不屈き千万！ この勇者ア……」
「あるじ?!」

いや、シアちゃん。まだセリフの途中だから……。

「私もおりますわ」

姫が悪魔の騎士に斬りかかる。

奴は意外と機敏な動きで後ろにさがる。

「王女?!」

シアちゃんが驚く。

俺達は、シアちゃんを庇うように立つ。

「何故、ここにおる?」

俺は、姫と目配せをする。

「もちろん……」

「シアちゃんを助けに来たに決まってるじゃねーか」

姫の言葉を、俺が継ぐ。

「お主等……」

シアちゃんの声に涙が混じる。

「くつ、勇者め。我がコレクションを、おのれ！」

悪魔の騎士が吼える。

「ふん、シアちゃんにメイド服など似合うはずも無い。シアちゃんに相応しいのはこれだ！」

俺は、シアちゃんの頭にソレを付ける。

「銀の髪、白い肌、そして、赤い瞳とくれば、これしかない！　そう、うさみみバンドだ！」

「私が選ばせていただきました」

シアちゃんの頭に2本の長い耳が揺れる。

「お主等……」

シアちゃんの声に怨嗟が混じる。

「な、なんと、さすが勇者よ……。我もそこまでは至らなかつたわ」

悪魔の騎士は感服したように言う。

だが、次の言葉には俺もさすがにキレた。

「なれば！　我が勝った暁には、うさみみメイドとして迎えることとしよう！」

「させん！　うさみみシアちゃんは俺のだ！」

叫びながら、俺は突っ込む。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」
当然の結果だった。

第十五話：口トの鎧

こういう場合、王道つてのがあるよな。

仲間を助けて、最後に勇者が止めを刺すとか。

せつかく勇者になったんだから、少しはそういう役回りが欲しいもんだ。

なんか、こう、勇者つてのが軽く扱われてる気がする。

勇者口トつてのは、どんな奴だったんだらう。

ご先祖様のせい、つてことは無いよな？

城に戻った俺を待っていたのは、かつてない喧騒だった。

「すまんが勇者よ。お主の相手をしている暇はない。とつとと出て行け」

ちよつと待て。

勇者よりも大事な事つて何だ？

そんな問いに、オツサンは答えた。

「わしの大事なパトリシアが賊にさらわれてしまったのじゃ」

パトリシア？

姫の他に娘がいたとは聞いてないぞ。

だが、それ以上は聞き出せず、城を追い出されてしまった。

「勇者様！」

門番が駆け寄ってくる。

「一体、何が起こったんだ？」

「パトリシアがさらわれたんです」

いや、だから、パトリシアってのは、誰だ？

「馬ですよ。馬。国一番の駿馬で、王様の愛馬なんです。番をしていた者が背後から殴られて、気付いた時にはいなくなっていたそうです」

馬……。

ああ、なんかどこかで見た気がする。

というか、俺、さっきまで犯人と一緒にいたかもしれない。

「なあ、それって、白い馬か？」

「ええ、そうです！ どこかで見たんですか？」

「いや、王様が乗るって言うんだから、そんな色かな、と」

神様すみません、俺は嘘をつきました。

「………そうですか」

俺の答えを聞いて、門番はうなだれてしまった。

仕方ない、一声掛けてやるか。

「まあ、なんだ、その、頑張れよ。そのうちひよつこりと帰ってくるさ」

「勇者様……、僕みたいな門番にそんな優しい言葉を掛けてくださるなんて」

ヤバイ、またフラグ立てちまった。

俺は急いで城門から離れると、ルーラを唱えた。

「あつ、お待ちください。勇者様！」

俺を引き止める声から逃れるため。

そして、戦場で待つ愛する少女達のために。

上空から見た廃墟は正に戦場だった。

悪魔の騎士を中心に、建造物が吹き飛んでいる。

シアちゃんを庇いながらの戦いは苦戦を強いられているようだ。

と、姫が奴の剣で吹き飛ばされた。

途端に無防備になるシアちゃん。

だんだん地上に近付いていく俺。

彼女の前に颯爽と降り立ち、奴にいかづちの杖を叩き込む……つもりだった。

奴が一步前に出なければ。

「うわっ！ 馬鹿っ！ どけ！」

荒野に衝撃音が響き渡った。

勇者は、悪魔の騎士に30のダメージを与えた。

勇者は60のダメージを受けた。

勇者は死んでしまった！

「……おお、勇者よ。死んでしまうとは情けない」

オッサンに睨まれた俺は、すごすごと城を出た。

すると、門番が走り寄ってくる。

「勇者様、これを」

手渡されたのは、妙なデザインの帽子だった。

「これは、昔、父が手に入れたものです。たしか、山彦がどうか。きっと勇者様のお役に立つはずです」

早速、かぶってみた。

おお、ピッタリだ。

どうやら、魔法使いの装備らしいな。

俺は、門番に礼を言い、再びルーラを唱えた。

「それを僕だと思つて、大事にしてくださいね」

思わず投げ捨てたくなつたが、必死で我慢することに成功した。

再び、上空にいる。

先程と状況は変わっていない。

いや、どこか奴の様子がおかしい。

どうやら、さっきの衝撃で鎧の間接部分に支障が起きたらしい。
幾分、威力が落ちたのだろう。

あれほどの巨体の一撃を、姫が剣で受け止めている。

さらに、剣を弾き、奴の腹に斬り付ける。

いくらかのダメージを与えたようだが、倒すには至つてない。

俺は、その隙にシアちゃんと奴の間に降り立った。

「俺が止めを刺してやる」

奴の腹には亀裂が入り、もう一度攻撃を加えれば倒せそうだ。

「あるじー！」

「勇者さまー！」

姫が、シアちゃんを抱えて後ろに下がる。

俺は、いかづちの杖を奴に向けた。

「これで、終わりだ」

勇者の攻撃………の前に。

山彦の帽子の効果で、再びルーラが発動した。

「へ？」

物凄いスピードで奴が迫ってくる。

否、迫っているのは俺の方だ。

気付いた時には遅かった。

奴に止めを刺す事をイメージしていたためだろう。

俺はルーラの効果で、奴に向かって頭から突っ込んでいた。

再び、荒野に衝撃音が響き渡った。

悪魔の騎士に30のダメージを与えた。

勇者は16のダメージを受けた。

悪魔の騎士を倒した。

奴の鎧がもろくなっていたおかげだろうか。

それともこの帽子のおかげで守備力が上がっていたからだろうか。

俺は辛うじて死なずに済んだ。

「あー、視界が真っ赤だ」

正直に言おう。

俺は、死んだことは多いが、瀕死の重傷は初めてだ。

姫が慌てて駆け寄ってきて、ペホイミをかけてくれる。

「死なないでください！ 勇者さまー」

いや、ぶっちゃけ、死んだ方がマシ。

すぐ元通りになるし。

「……あるじ、お約束よのう」

シアちゃんの言葉がとても痛かった。

やっと立ち直った俺は奴の残骸へと近付いた。

その時、鎧の裂け目から黒い霧が吹き出した。

黒い霧は、空中にわたかまり、顔のような物を形成した。

「ふふふ、さすが勇者という所か。まさか我が敗れるとは思ってもよらなかった」

いや、あれは事故だろう。

正直、攻撃なんて1回もしてないし。

「ルーラにあのようない方があったとはな。さすが、あるじじや。長いこと生きてたわらわでも到底思いつかないんだ」

シアちゃん、バカにしてるだろ、それ。

「勇者さまは、常人とは頭の出来が違うんです！」

姫、それ、フォローになってませんから。

俺は、居たたまれない気分になった。

だが、奴はお構いなしに言葉を紡ぐ。

「だが、アリシアよ。貴様と決着がついた訳ではない。我は竜王様の城で待っている。その時こそ、剣と魔法のどちらが強いか、決着をつけるときぞ！ では、さらばだ！」

ちよつと待て、今、聞き捨てならないことを言ったな。

剣と魔法のどちらが強いか？

「こらー！ 説明して行け！」

奴は、言うだけ言って、北東の空へと飛び去った。

仕方ない。

もう一人を尋問することにしよう。

俺は、姫に目配せをする。

それだけで理解したのだろう。

そばにいたシアちゃんを羽交い絞めにする。

「こ、こら、何をするんじや!」

「何って、ドキドキ尋問タイム!」

俺は、道具入れからキメラの羽を取り出した。

シアちゃんは、身悶えている。

さすがに、300年生きた魔法使いも、呪文を封じられたうえに、くすぐり攻撃はきつかったらしい。

「まず、シアちゃんが何処の誰なのかをはっきりしてほしい」

俺の問いに、始めは躊躇していたが、目の前で羽をちらつかせると、重い口を開いた。

「わらわは、アリアハン王家に連なる貴族の娘じや」

「アリアハン?」

「勇者口トの生まれ故郷ですわ」

姫が教えてくれる。

えっ? それじゃあ、シアちゃんって。

「わらわは、勇者口ト、いや、アルスと共に魔王を倒した仲間の一人じや」

アルス、それがご先祖様の名前。

そして、シアちゃんの大切な人、か。

そこから先は、いっぞや聞いた話と同じだった。

魔王になってしまった魔法使いの話。

それが、シアちゃんの事だったらしい。

「これを聞けば、きつとお主はわらわから離れていくじやろう。そう思うと、話せなんだ」

そう言って、シアちゃんは涙を流す。

「シアちゃん」

名前を呼ぶと、彼女は顔を上げた。

「あの時に言ったろ。シアちゃんはずっと一緒にいるって」

「私も、アリシアさまの義妹ですもの。私達は、もう家族ですわ」

「お主等……」

シアちゃんは、声を上げて泣いた。

母親を見つけた迷子のように。

もう、彼女は孤独じゃない。

俺たちがそばにいるから。

シアちゃんが落ち着くのを待ちながら、俺は辺りを探索した。何か、こう、引つ掛かるモノがあるのだ。

まるで、心に呼びかけてくるかのような、妙な感じ。

聞けば、姫にもそんな感覚があるそうだ。

そして、俺は見つけた。

奴の鎧の残骸の下に、何かが埋もれているのを。

シアちゃんを呼んで、それを一枚ずつ広げた。

うわ、なんだ？ このえらく表面積の少ない水着は？

「それは、あぶないみずぎじゃ」

「商品名？」

「商品名じゃ」

ひとつひとつ、シアちゃんが解説してくれる。

あぶないみずぎに、魔法のビキニ、踊り子の服にエッチな下着。

さらに、天使のレオタードに、シルクのビスチエ。

どうも、悪魔の騎士のコレクションらしい。

こんなモンを鎧の中に入れて戦ってたのか、コイツは。

「そういえば、シアちゃんに着せようとしたのは？」

そう聞くと、嫌そうに答える。

「あれは、魔法のメイド服じゃ。あるじが燃してくれたおかげで助かった。もう、あれを着るような事態にはなるまい」

魔法のメイド服か……、ひよつとして、高いんじゃないか？

「そうじゃな、着る者に応じてサイズを変えするという代物じゃ。好事家に売れば、一万ゴールドは下るまい」

なんだと!? ……惜しいことをした。

まあ、他の物を売れば、それなりの値段にはなるだろう。

それで、妥協する事にした。

「あの、勇者さま。あの感覚の元なんですけど、ここから何か感じます」

姫が街のはずれの大木の根元を指し示す。

俺が、アレに引つ掛かっている間に、ずっと探していたらしい。

地面を掘ると、大きな木箱があった。

中には、立派な装飾の施された蒼い鎧がおさめられていた。

「まさか?! 光の鎧か?」

シアちゃんが叫ぶ。

光の鎧？

「ひよつとして、勇者ロトの鎧、ですか？」

「そうじゃ」

「これが、ご先祖さまの着てた鎧か。」

「ちよつと着てみるか。」

「姫に手伝ってもらって、やつとこさ身につける。」

「うおっ!？」

「ぶかぶかだったのに、しっくりくるサイズになったぞ。」

「精霊ルビスの力を宿しておるからの。選ばれし者ならば、丁度良いサイズになるじゃろ。」

「サイズは良いんだけどさ、やっぱり、俺には重過ぎるわ」

「またもや、姫に手伝ってもらってやつとこさ脱ぐ。」

「次は、王女の番じゃな」

「うん、姫が着けるのが良いと思う」

「姫は、身に着けている鋼の鎧の止め具を外し、そつと地面に置いた。」

「そして、ロトの鎧を手にとると、一人で身に着け始める。」

「……俺の時は二人がかりだったんですけど。」

「まあ！ とても素晴らしい物ですわ」

ロトの鎧を身につけた姫は、とても凛々しかった。

姫の華奢な身体にもびったりと合っていた。

「着心地はどうじゃ？」

「とても軽くて、動きやすいですわ」

前に着けていた鋼の鎧よりも金属部分が多いのだが、そう感じられるということは、
姫が鎧の持ち主に相応しいという事なのだろう。

ますます、俺の立場がなくなってくる。

まあ、なるようになるか。

俺達は廃墟の街を後にした。

「そういえば、姫？」

「どうなされました？」

「パトリシアが賊にさらわれたそうですよ」

俺は、遠回しに聞いてみた。

「まあ、賊にさらわれたなんて、酷い言いがかりですわ。わたしは、黙って借りただけです」

いえ、ソレが、さらわれたっていう事なんです。

「何の話じゃ？」

シアちゃんが首を傾げる。

元はと言えば、シアちゃんのせい、か。

彼女の頭の上には、未だに2本のうさみみが揺れている。

……お仕置き、だな。

「いや、シアちゃんがうさみみを気に入ったみたいだから、バニースーツを着せたらどうかと思っただけ」

「な、何を言っておるか！」

今頃になって気が付いたのだろう、シアちゃんの手がうさみみバンドに伸びる。

「まあ、私達からの折角のプレゼントを外してしまわれるのですか？」

ふと、その手が止まる。

上手い。この言い方なら、シアちゃんは断れない。

「くっつ、卑怯な」

「良い仕立て屋を知っておりますわ。街に戻ったら、早速行きましょうね、アリシアお義姉さま」

「うんうん、美しき姉妹愛かな」

「お主等はーっ!!」

シアちゃんの叫びが辺りにこだました。
世界は概ね平和だった。

「わしの可愛いパトリシアーっ!!」

玉座に座る、哀れな男以外は。

第十六話：ゆきうさぎ

こんな俺にも、色々悩みがある。

魔物にまで知られている、男好きという噂。

噂の元となった門番の始末をどうするか。

パトリシア強奪事件。

そして、その犯人が姫である事。

だが、一番の悩みは先日の戦利品をどうするかだった。

俺は、悪魔の騎士コレクションをベッドの上に並べた。

「何をやっておるのじゃ？」

シアちゃんと姫が部屋に入ってくる。

さすがに街中なので、うさみみは断固拒否されてしまった。

非常に残念にならない。

「それは、先日の……」

「まだ持っておったのか」

悩むのは止めた。

俺は俺らしく生きる事にしよう。

「2人に頼みがあるんだ」

「……なんじゃ？」

「まあ、なんでしよう？」

意を決して、口にした。

「これを着て見せてくれないか？」

「……おお、勇者よ。死んでしまうとは情けない」

気付いた時には、オッサンの前にいた。

まだ立ち直ってないのか、覇気がない。

まあ、今はそんなことはどうでもいい。

おそらく、いや、間違いなく、シアちゃんの仕業だろう。

どうやって殺されたのかはわからない。

だが、それよりも気になる事があった。

……燃やしてないだろうな？ シアちゃん。

城を出る時、門番に会った。

「ああ、コレ、返しとくわ」

俺は、山彦の帽子を手渡した。

シアちゃんいわく、諸刃の剣なのだそうだ。

再発動を予測できないのが欠点らしい。

「えっ?! お役に立てませんでしたか?」

いや、充分役に立ったんじゃないかな。

俺以外の魔法使いなら。

「いや、何か相性が悪いらしくてな」

連続ルーラはもう勘弁して欲しい。

「……そうでしたか。申し訳ありません」

あまり落ち込まれると罪悪感がわいてくる。

「まあ、ソレのおかげで悪魔の騎士っていうゴツイ魔物が倒せたんだ。それについては礼を言うよ」

「勇者さま……、いえ、お役に立てて光栄です」

無くても倒せたけどな。

というか、無い方が格好が良かった。

「じゃあ、俺は急ぐから」

「お気をつけて！」

何にだ？

シアちゃんにか？

それとも、姫にか？

心に問いかけながら、俺は宿へと急いだ。

部屋に辿りつくと、シアちゃんが縛られていた。

手は背中側で、足は束ねるように。

そして、口には猿ぐつわがはめられていた。

「何だ？ 何があつたんだ？」

俺は、シアちゃんの口を解放した。

次に、手の縄を解きにかかる。

「なんだ、コレ？ メチャクチャきつく結んである」

「王女の仕業じゃ！ アレを処分しようとしたら……」

アレ？ ベッドの上を見る。

良かった、全部無事だ。

姫が機転を利かせて、守ってくれたらしい。

「まあ、勇者さま。お戻りになられていたんですか」

続き部屋の扉を開けて、姫が入ってくる。

「姫、いくら何でもやりすぎでは？」

「そんな、ひどい……。私、勇者さまのために、必死でお守りいたしましたのに……」

瞳に涙を浮かべて、じっと見つめてくる。

か、可愛い……。じゃなくて、俺をそんな目で見つめないで——！

ううう、降参です。

「ありがとうございます。姫のおかげで助かりました」

「裏切り者——！！」

「仕方ないだろう？ 悪いのは、シアちゃんなんだし。アレを燃やそうとしたのが悪い

！」

「ということですよ。諦めてくださいませ、アリシアさま」

部屋の中に、シアちゃんのすすり泣きが静かに響いていた。

「ところで、勇者さま？ どれを着て欲しいんですか？」

姫の問いかけに、俺は悩んだ。

全部と言いたい所だが、さすがにシアちゃんが可哀想だから一着だけにしようとする二人で決めたばかりだ。

……踊り子の服にしよう。

お姫様とのギャップが一番大きい。

「どうですか？ 似合いますか？」

「うん、最高」

16才という、俺に言わせれば、最も女性が美しく輝いている年代。

しかも、普段は隠している、他人に見せた事の無い肢体がこの眼前に。

恥ずかしそうに、胸を隠す仕草が初々しくてたまらない。

しかも、ふとももが何とも言えない魅力を醸し出している。

触りたい。

無意識の内に、ふらふらと手が伸びる。

「おさわり禁止ですわ、勇者さま」

手を叩かれて、正気に戻る。

危ないところだった。

シアちゃんが睨んでいる。

ここで事に及んでいたら、申し開きもできないところだった。

胸を撫で下ろす。

「もうよろしいですか?」

さすがに姫も恥ずかしそうにしている。

いつもの服に着替えてもらうことにした。

「ふう、眼福、眼福」

シアちゃんの視線を感じる。

だがそちらを向くと、ふいと顔を背ける。

んー? これはひよつとして?

「シアちゃんも着てみる?」

「な、何を言っておるか!」

「アリシアさまも着られるんですか?」

いつの間に出て来たんですか、この人は?

姫の方に振り向く。

「な、何て格好してるんですか?!」

真っ白の下着姿で微笑む姫の姿。

さっきの踊り子の服よりも面積が広いところを見ると……じゃなくて!

目の毒どころではない。

「いいではありませんか。私達は夫婦なんですから」

「そう言いながら、俺に寄り添ってくる。」

「ななな、何をするつもりでありやがりますか?!」

「何って、夫婦の営みですわ。ちようど、邪魔ありませんし」

「そう言つて、シアちゃんの方を見やる。」

「そして、俺の頭を固定して、顔を近づけてきた。」

「こら、離れんか、お主等!!」

「いや、そうしたいのはやまやまなんだけど、がちりホールドされて逃げられないんだ、これが。」

腕に当たる柔らかな感触がさらに俺の抵抗力を奪っていく。

「アリシアさまが、私の選んだ衣装を着て下さるなら、止めてさしあげますわ」

「な!?!」

言葉を失うシアちゃんを横目に、姫の唇が迫ってくる。

あと3センチ、2センチ、1センチ……、付くか付かないかの所でシアちゃんが声を上げた。

「わかった! 着る! 着るから、止めよ!」

「素直でよろしいですわ」

姫が離れていく。

俺としては、もつたいないような気がする。

が、シアちゃんが怖いのでこれ以上はやめておこう。

シアちゃんの縄を解き、姫と共に続き部屋に入ってから15分。

俺は、じっと待っていた。

「勇者さま、準備ができました」

姫が扉から顔を出して、そう告げる。

待ってました！

「……やはり、わらわにこのような衣装は似合うまい」

扉の向こうから、声が聞こえる。

いつになく、気弱そうだ。

「とても似合っておりませう。自信を持ってくださいませ」

そして、扉が開いた。

そこに居たのは、女神さまだった。

「うおー！ー！！ 女神さまが、女神さまが降臨なされたー！ー！！」

「さ、騒ぐでないわ！」

「あらあら、勇者さまったら」

まだまだ発展途上の身体を包む、必要最低限の布。

幼い魅力を振りまく美しい肢体。

あぶないみずぎを身に着けたシアちゃんは、正に世界に降臨した女神さまだった。

「このような服装をするのは、もっとスタイルのいい女ではないのか？」

「否！ 胸の無い少女がビキニを着るのと同じように、これはこれで、味わい深いものがある！ いや、むしろこの方がイイ!!」

「まあ、色々と危ない発言ですわ」

そんなこんなで、ファッションショーは幕を閉じた……はずだった。

「次は、私のリクエストに答えていただきますわ」

それは、姫のこんな言葉から始まった。

「何を言っておる？ 先程、着たではないか」

「それは、アリシアさまの意思ですわ。わたしは、約束を果たしていただけておりません」

「……あー、そういえば、あの時確か、私の選んだ衣装って言ってたっけ」

「なんじゃと!! 騙しおったのか?!!」

シアちゃんが怒る。

まあ、当然なだけけど。

ていうか、俺も言われるまで気が付かなかったし。

「私としましては、約束を破ってもらわれてもいっこうに構いませんが……」

この辺の交渉技術はさすがだなー。

案の定、シアちゃんは歯ぎしりしながら、姫を睨んでいる。

さつき、シアちゃんはほとんど抵抗できずに、姫に拘束されたみたいだし、接近戦じゃ姫の方に分があるのか。

「……わかった。仕方あるまい」

「ありがとうございます。せっかくの衣装が無駄になる所でしたわ」

あれ？ 姫が衣装を準備したのか？

「では、しばらくお待ちくださいませ」

姫の後をシアちゃんがしぶしぶついていく。

やがて、2人の姿は扉の向こうに消えた。

十数分後、再び姿を現したシアちゃんは、ゆきうさぎになっていた。

「アレは、冗談ではなかったのか？」

「私、冗談なんて言いませんわ。ただ、サイズは目分量になってしまいましたけれども」

先日のバニースーツ発言を現実の物としたらしい。

白いうさみみにあわせて、白いレオタードに白いタイツ、おしりにはフワフワうさしっぽまで。

「シアちゃん、頼みがあるんだ」

「なんじゃ？ また、妙な事を言い出すんじゃないかな」

「抱っこしてもいい？」

俺は、答えを待たずにシアちゃんを抱きしめた。

「な、何をする?! あ、こら、変な所を触るな！」

俺は、頬ずりをしながら、撫で回す。

うさしっぽがいい。

何とも言えないこの肌触り。

もう、可愛くて可愛くて仕方が無い。

「王女！ 見てないで助けぬか！」

シアちゃんが姫に助けを求めろ。

「勇者さま！」

ふと、手を止めて姫を見る。

シアちゃんがその隙に手足をばたばたさせて逃げようとする。

「勇者さまばかり、ずるいですわ。私にも抱っこさせてください」
そう言つて、抱きついてくる姫。

「王女まで、なにをするか?!」

「アリシアさまがいけないんです。こんな格好で私を誘うんですから……」
「誘つてなぞおらぬわー!!」

朝が来た。

俺達は、旅立ちの準備をして宿を出た。

「勇者さま、昨夜はお楽しみでしたね」

姫がその声を掛けてくる。

姫は、後はおふたりで、とか言つて早々に退散してしまった。

もちろん、存分に楽しませてもらいました。

「えーと、聞こえてた?」

「ええ、とつても。今度は、私にもお願ひしますね」

姫はそう言い残して、離れていく。

シアちゃんはというと、俺の背中におぶさつて、まだ眠つたままだ。

「あるじ……、あ、愛しておるぞ」

寝言のつもりだろうか？

シアちゃんが耳元で呟いた。

「俺もだよ。シアちゃん」

そう返すと、俺は先に行った姫に追いつこうと走り出した。

次に目指すは、雨雲の杖。

今日は、絶好の旅日和だった。

第十七話：銀の豎琴

雨雲の杖は雨のほこらにあるらしい。
そんな噂を聞いて、俺達は急行した。
そこは、温泉の村の北にあるそうだ。
俺は迷わずルーラを唱えた。

「相変わらず、お約束よのう。あるじ」

呆れ果てるシアちゃんの声がかぐももって聞こえる。

「大丈夫ですか?! 勇者さま!」

慌てる姫の声がかぐももって聞こえる。

何だか視界が暗い。

口の中に泥の味が広がる。

それに、息苦しいし、首が痛い。

「アリシアさま、そちらを持ってください」

「ふう、仕方あるまい」

「いちにの、さんー！」

視界が明るくなった。

同時に、息苦しさも霧消する。

「お主は、ほんに期待を裏切らぬのう」

「勇者さま、無事で良かった……。地面に垂直に突き刺さった勇者さまを見た時は、息が止まるかと思いましたわ」

また着地に失敗したらしい。

しかも、地面が泥だったために、そのまま頭から減り込んだようだ。

かなりシユールな光景だったことだろう。

「ごめん、ふたりとも。ありがとう、助かったよ」

「本当に良かったですわ」

ホイミをかけながら、笑う姫。

「その格好でほこらに行くわけにもいくまい。温泉に行くぞ」

シアちゃんは、顔の泥を拭ってくれている。

「何を笑っておるのじゃ？ あるじ」

無意識に、俺の顔には笑みが浮かんでいたらしい。

「いや、俺は幸せ者だなと思って。本当にありがとう、ふたりとも」

「と、突然、何を言っておるか」

「私達は家族ですわ。家族なら当然の事です」

照れるシアちゃんと、満面の笑みを浮かべる姫。

俺は本当に幸せ者だ。

温泉に入り、準備を整え、俺達は雨のほころに向かった。

そこには、一人の老人がいた。

「そなたが勇者じゃな。雨雲の杖を取りに来たのであろう」

「ああ、そうだ。竜王を倒すためには必要な物だ。早く渡してくれ」

それが人に物を頼む態度か、とシアちゃんに背中を小突かれる。

「勇者よ。竜王は強い。倒されるとわかっていて、みすみす行かせるわけにはいかん。」

「では、どうすればよろしいのですか？」

姫が問う。

「この地のどこかに、魔物を呼び寄せる銀の豎琴があると聞く。それを持ち帰ったとき、そなたに雨雲の杖を授けよう」

なんだか面倒な話になった。

俺達は、老人から離れて話し合いを始めた。

「銀の豎琴って知ってる？」

「うーん？ どこかで見たことがあるのじゃが」

悩むシアちゃん。

「考える必要はありませんわ」

何故か自信に満ち溢れた姫。

「どうするんです？」

「あの老人にお願いをすれば良いんです」

そう言つて、劍に手をかける。

「却下じゃ」

「そんな……、勇者さま」

姫のお願いって危険だからな。

そういえば、あの宿の主人は元気だろうか。

この間行つた時は、何故か息子に代替わりしていたが。

「まあ、豎琴を渡せばくれるって言うんだから……、ん、豎琴？」

そういえば、どこかで豎琴の話聞いたような……。

「あつ、思い出した。詩人の街だ」

「うむ、そういうえほどこそこの詩人が持つておったな」

「では、次の目的地は詩人の街ですね」

俺達は、再びルーラで飛ぶことにした。

「なあ、シアちゃん。本当にこの格好じゃなきや、ダメ？」

「ダメじゃ！」

俺の問いに、シアちゃんはきつぱりと断言する。

「姫は？」

「本当は、私がして欲しいところですけど、これもまた趣があつて良いですわ」

俺以外に反対意見は無し。

「せめて、おんぶ……」

「往生際が悪いわ！ いいかげん諦めよ！」

結局、俺はよりにもよつて本当のお姫様にお姫様抱つこで運ばれることに。

男として、この扱いはどうかと思う。

「では、行くぞ！ ルーラ！」

こうして、俺達は詩人の街へと文字通り、舞い戻つたのだった。

「まあ、大きな墓ですわね。お父様にもこのくらいの墓を造って差し上げたら喜ばれるでしょうか」

いや、今から殺さないであげてください。

さすがにまだ2、30年は生きると思いますよ。

内心、姫に突っ込みを入れながら、俺達は門をくぐった。

「えらく警備が物々しいが、何かあつたのか？」

シアちゃんがそんな事を言う。

言われてみれば、前に来たときよりも兵士の数が多い。

「勇者様！」

その時、どこかから呼びかけられた。

「誰だ？」

目の前に、警備兵の一人が走り寄ってくる。

そして、おもむろに頭を下げた。

「申し訳ありません！」

へ？ 俺、なんかしたっけ？

「先日、情報を頂きました、魔物と内通している情報屋の件です」

あー、あー、あー、そういうばそんな事もあつたっけ。

……ヤバイ。シアちゃんにばれる。

「ほほう、魔物と内通してる？ そんな話は初耳だのう、あるじ？ 宿に泊まらずに帰った訳がやつと判ったわ」

は、はははは。面倒ごと巻き込まれなくなかったから、さつさと帰っちゃったんだよねえ、あの時は。

アレ？ それで何で俺が謝られるんだろう？

「兵士数人で捕縛に行った所、奴が本性を現しまして、逃げられてしまいました」

「えっ?! 本当に?!」

「さすが勇者さまですわ！ ひと目で魔物のスパイを看破されるとは！」

「わらわとしては、『えっ?! 本当に?!』という発言が気になるのじゃが……」

姫からは素直な賞賛が。

シアちゃんからは疑惑に彩られた視線が。

そして、兵士からは謝罪の念が向けられる。

正直、居たたまれない。

「それで、死人とか出たのか？」

俺は話を進めることにした。

「逃げおったわ」と呟く声が聞こえた気もするが、無視。

「いえ、どうやら奴も逃げるのに精一杯の様子で。けが人は出ましたが、死人はおりませ
ん」

「不幸中の幸いだったな」

俺の嫌がらせで死人が出たらたまらない。

胸を撫で下ろす。

「そういう訳で、兵士を増員して目下捜索中であります」

俺達は、兵士に礼を言い、詩人の墓へと向かった。

兵士の話によると、墓には秘密の入り口があるのだそうだ。

「こういうのって、大抵裏側になんかあるんだよなあ」

回りこむと、扉があった。

そして、その前に立つ一人の老人の姿も。

「よう、爺さん。ここが墓の入り口か？」

爺さんは俺たちを値踏みするように見ると、口を開いた。

「ここに入るつもりか？」

「ああ、銀の豎琴を探しにな」

「そうか。確かに銀の豎琴はここにある」

よっしゃ！ 大当たり！

だが、爺さんの話には続きがあった。

「だが、ここに入って生きて帰った者はおらぬ。死にたければ、行くが良い」

なかなか物騒な事を言う爺さんだ。

爺さんは扉から離れると、姿を消した。

そう、文字通りだ。

「お、お化け……」

シアちゃんが震えながら抱きついてくる。

ああ、幽霊が怖いんだった、シアちゃんは。

姫はというと、無性に感心している。

「こんなハッキリした幽霊は初めて見ましたわ」

この人に、怖いものは無いんでしょうか？

真つ暗な地下を、シアちゃんの魔法で照らしながら降りていく。

まだ怖いのか、俺の手をつないだままだ。

出てくる魔物は、姫が片っ端から斬り倒していく。

最深部の扉を開くと、ちよつとした広間になっていた。

中央の祭壇のような場所に、棺が置かれ、傍らには豎琴が立てかけられている。

そして、その前には人影があった。

「よくぞこここまで来たな、勇者よ。今こそ、我が恨みを晴らしてくれん！」
例の情報屋だった。

「当代の勇者はボンクラという話だったのだから。まさか、我が隠形を見破られるとは思つても見なかった」

いや、俺もまさか本当に魔物だったとは思つても見なかった。

金を取られなきや、今でも裏路地にいたんじやなからうか。

でも、そんな事は口にしない。

「ふん、俺の眼力の前では、貴様の隠形など物の役にも立たんわ！」

「さすが勇者さまですわ！」

姫の賞賛が快い。

「ならば、喰らうがいいわ！ 我が隠形の真髄をな！」

そう言つて、奴は姿を消す。

足音すらも聞こえない。

「きゃっ」

姫の悲鳴が響く。

「姫！」

「大丈夫です。勇者さま」

辛うじて、剣で受け止めたらしい。

奴の姿は完全に見えなくなっている。

しかし、確実にここにいらっしゃるらしい。

「くくつ、怖かろう怖かろう。我が力の前にひれ伏すが良いわ！」

部屋に声が反響するせいで、位置が読み取れない。

だが、俺の頭には名案が思い浮かんでいた。

「姫、こちらへー！」

姫に、作戦を小声で話す。

同時にシアちゃんにも。

「ピオリム！」

シアちゃんが姫に、素早さを増す呪文をかける。

姫は、全力疾走で祭壇に向かう。

その動きは疾風の指輪とも相まってまさに一陣の風のごとく。

俺は、いかづちの杖を姫に当たらないように四方八方に撃ちながら、シアちゃんと入

り口に戻る。

「ふははは、どこを狙っている！」

良く耳を澄ますと、祭壇の向こうから聞こえるようだ。

確かに、その後ろなら当たるまい。

けれど、それが狙い。

姫が豎琴を持つて戻るのを待ち、俺達は広間を出た。

「ふははははは……は？」

未だ高笑いを続ける奴を残して。

そして、俺達は、扉の前でその時を待つ。

「卑怯だぞ！ 貴様らー！」

そんな声と共に扉が開く。

俺達は、そこにありつただけの攻撃呪文を叩き込んだ。

「ライディーン！」「メラゾーマ！」「いかづちよ！」

沈黙が辺りを包み込んだ。

そこには、黒焦げになった男が一人。

「く、な、何故？」

魔物つてのは、意外と耐久力があるらしい。

まだ息があるようだ。

「お前の敗因は、限られた空間で勝負を挑んだことだ」

そんな言葉を奴にかけ、ロープでぐるぐる巻きにすると、地上に出た。そして、兵士に引き渡すと、そのまま街を出た。

「まさか、お主があのような作戦を立てるとは、見直したぞ」

「さすが、私の勇者さまですわ！」

いや、実は沼地の洞窟で思いついたんだけどね。

シアちゃんに焼き殺された時に。

扉を開けた瞬間に攻撃して、倒せなかったら、シアちゃんにイオナズンで部屋ごと吹き飛ばしてもらおうとか思ってたんだけど、一段階目で倒せて良かった。

「まあ、たまには俺だつて良い所を見せることもあるさ。さあ、雨雲の杖をもらいに行こう」

そして、俺はルーラを唱えた。

「やつぱり、あるじはあるじじゃのう」

「こちらの方が、勇者さまらしいですわ」

再び、地面に頭から垂直に突き刺さった俺の上で、2人が勝手な事を言う。

そんな事はいいから、早く助けてくれ。

俺は、抗議の意味を込めて、足を激しく動かした。

ああ、苦しくなってきた。

オッサン、俺、もうすぐそっちに行くかも。

慌てて引つ張り上げようとする気配と共に、俺は意識が遠くなるのを感じた。

第十八話：予言者

無事に雨雲の杖を手に入れた俺達は、湖畔の街へとやってきた。

ここは、なんといっても竜王の城にもっとも近い街だ。

王城も近いといえれば近いのだが、海を越えられないので却下。

そういう理由で、この街に雨と太陽が交わる場所を探しに来たのだが……。

「大丈夫ですか？ 勇者さま……」

俺は、問題ないとばかりに、姫に手の平を向ける。

でも、本当は全然大丈夫じゃない。

頭はガンガンするし、足はフラフラする。

「湯上りに、あ、あのような事をするからじゃ」

いや、ホント面目ない。

「アリシアさまが羨ましいですわ。後で、私にもしてくださいね」

考えときます。

「もし、その旅のお方。……大丈夫かえ？」

突然、老婆に話し掛けられた。

俺は、顔の前で右手を左右に振る。

「気にするな、とおっしやってますわ」

通訳ありがとう、姫。

「それで、何用じゃ？」

シアちゃんが俺の代わりに返事をする。

「わしは予言者をしておる。おぬし達に少々気になる物が見えての」

「気になる物、ですか？」

「ずばり、おぬしは勇者であろう！」

何故、姫を指差す？

まあ、確かにこの面子を見て、俺が勇者とは思うまい。

姫は、老婆の指差す手をとると、俺の方に向ける。

「勇者さまは、こちらですわ」

自称予言者の驚く顔が見える。

「ふむ、わしも年のせいかな、精度が衰えてきたようじゃ」

本当に、年のせいかな？

老婆は俺を指差したまま、さらに言い募った。

「勇者よ！ 聖なるほこらへ行くが良い。そこにおぬしの求める物があるじやろう」
俺の求める物……風邪薬か？ それとも、平穩な生活か？

熱で濁った頭は、既に当初の目的を忘れていた。

「聖なるほこらとは、どこにあるのですか？」

「南じゃ。この街を出て、南に進めばよい」

姫の問いに、老婆はそう答えた。

「ありがとうな、婆さん」

俺は氣力を振り絞って礼を言い、その場を離れようとした。

だが、そんな俺たちを婆さんはさらに呼び止める。

「待たれよ、勇者よ。何も言わずとも、わしにはわかる」

俺は、もう喋る氣力も無い。

そんな俺に、婆さんは告げた。

「ずばり、おぬしは風邪を引いておるであろう！」

見たまんまじゃねーか。

「わしの孫が宿をやっておつてな。そこでゆつくりと養生するがよい」

しかも、客引きかよ。

こんな訳の判らん婆さんの相手なんてしてる暇は無い。

俺は振り返り、一步踏み出そうとした。

「アレ？」

地面が迫ってくる。

ルーラなんて唱えた覚えはないんだけど。

「勇者さま?!」「あるじ?!」

地面にぶつかる痛みと共に、俺は意識を失った。

次に目が覚めたのは、ベッドの上だった。

「知らない天……」

そこまで口にした途端、濡れタオルを被せられた。

息が詰まる。

次の瞬間、タオルは取り払われ、目の前にシアちゃんの顔があった。

「おお、目が覚めたか？　あるじ」

えーと、今なにを言おうとしてたっけ？

思い出そうとしたが、熱で朦朧とした頭は、考えることを許さない。

途端に、鈍い頭痛と悪寒、関節痛が襲ってくる。

「疲れているのですわ。ゆっくりなさっていて下さい」

思わず起き上がろうとした俺を、姫がそっと押し戻す。

そして、身を横たえた俺の額に、シアちゃんが濡れタオルを乗せる。冷たさが気持ちいい。

「ありがとう」

俺は、再び眠ることにした。

次に目が覚めた時、辺りは暗くなっていた。

頭痛は幾分ましになっていた。

ゆっくり眠ったおかげだろうか？

「気分はどうじゃ？」

シアちゃんの声がする。

そっと額に手が乗せられる。

ひんやりとして、心地よい。

「ふむ、熱は下がったようじゃの」

「……姫は？」

俺の問いに、シアちゃんは何も言わずに俺の足元に目を遣る。

……居た。

椅子に座ったまま、ベッドに寄り掛かるように眠っている。

「夜通し看病すると聞かぬのでな。隙を見て眠りの呪文を使わせてもらった」
王女にまで倒れられてはかなわんとシアちゃんは笑う。

「シアちゃんは？」

「わらわは、闇の眷族ぞ。一日二日の徹夜なぞ、どうということもないわ」

ああ、そういえばそうか。

元魔王だつていう話だし、夜に弱い魔王なんて笑い話にしかならない。

そういえば、ご先祖様の事がうやむやになつてたな。

いい機会だから聞いてみるか。

「シアちゃん」

「なんじゃ？」

「俺のご先祖様つてのは、どんな奴だつたんだ？」

「……アルスの事かの？」

そう、アルス。

自分では気付いてないだろうけど、その名を口にする時のシアちゃんはとても寂しそ
うに笑う。

「わらわが初めて奴と会ったのは、まだ7つの頃じゃ」

齡7才にして、魔法の天才と言われているシアちゃんは、幼い頃から勉強漬けの毎日だったらしい。

そんなシアちゃんを外の世界に連れ出したのが、当時11才のアルスだったそうだ。

「本当の所、誘拐されたんじやがな。身代金目的じやと言っておったぞ」

とんでもない悪党に聞こえるんだが。

しかも、11才で誘拐犯かよ。

「家の外に出たのは初めてだと言うたら、街での遊び方を教えてやるというてな」

一日中連れまわした挙句に、兵士に見つかって御用になったそうだ。

「結局、色々、政治的な理由もあつてお咎め無しとなったようじやが、それから何度連れ出されたことか」

なかなか行動的なお子様である。

「で、なんで勇者なんかに？」

「父親が勇者じゃったからの。しかも、おぬしと同じ体質であつたしの」

ご先祖様も、血筋と能力で選ばれたらしい。

因果な家系だ。

「そのかわり、旅に出る際に条件を付けおつたんじや」

その条件が、仲間を自分で選ぶ事。

その内の一人がシアちゃんだったらしい。

「あるじは、おそらくアルスとリイネの子孫であろうな。どこか、面影がある」

「リイネ？」

「アルスの婚約者でな。賢者の家系じゃ」

アルスとリイネとシアちゃんとあと一人。

それが、勇者ロトのパーティらしい。

シアちゃんは、昔を懐かしむように空を見上げ、そつと目を瞑る。

泣いている様にも見えたが、こちらを向いた時にはいつものシアちゃんに戻っていた。

「さあ、もう眠るが良い。まだ治ったわけではあるまい」

そう言って、俺に布団を掛け直す。

「なあ、シアちゃん。アルスの事、好きだったのか？」

ずつと胸につかえていた事を吐き出した。

シアちゃんは、手を止め、じつと俺の目を見つめる。

そして、コクンとうなずいた。

「ありがとう」

「何故、あるじが礼を言う？」

「さあ、なんでだろう？」

何だか気恥ずかしくなってきたので、俺は目を瞑った。

「じゃあ、お休み。シアちゃん」

「お休み、あるじ」

目を瞑ると、途端に睡魔が押し寄せてくる。

その時、唇にやわらかい感触を感じたのは、気のせいだったかもしれない。

目が覚めると、そこは戦場だった。

「あつ、こら！ 力の入れすぎじゃ。まな板まで斬ってどうする？」

「思い切りやれとおっしゃったのは、アリシアさまですわ」

おそらく、台所からだろう。

けたたましい喧騒がひっきりなしに聞こえてくる。

「ふむ、王女にしては上手いもんじゃな」

「アリシアさまの口出しがなければもつと早くに終わっておりましたわ」

シアちゃんと姫の言葉の後、静寂が辺りを支配する。

これは、夢だ。

俺は自分にそう言い聞かせ、布団をかぶった。

「ほう、わらわは、おぬしが料理を作った事が無いというから、指南してやったのじゃが？」

「知識ばかりで、実践したことがなければ、私と同じですわ」

再び静寂に戻る。

これは夢だ。これは夢だ。これは夢だ。これは夢だ。

俺は、もう一度眠ることにした。

再び目覚めた俺を待っていたのは、それぞれの料理の器を持ったふたりの姿だった。

「勇者さま、私の料理を選んでくださいますよね？」

「あるじ、もちろんわらわの料理じゃろう？」

いつの間にか、料理対決の様相を呈していた。

「私の創ったのは、野菜などがたっぷりのスープですわ」

『創った』って字が気になるんですが。

普通は『作った』では？

あと『など』って具体的に、何が入ってるんです？

「わらわのは、薬膳スープじゃ」

薬膳って、まずそうだな。

でも、死にはしないだろう。

やばそうな材料が入ってないと思われる。

「どっち？」

どっちか選ばないといけないらしい。

見た目は、比較的まともだ。

匂いは、鼻が詰まってるので良く分からない。

無難なところでシアちゃんの料理を試食してみた。

まずは一口。ん？ 味が無い。

さらに一口。でも、味が無い。

そして、三口目でそれはあらわれた。

痛い、痛い、痛い、痛い。

舌が痛い。喉が痛い。唇が痛い。

スープが触れた、全ての場所が痛い。

「み、水、水をくれ……」

姫が慌てて、水を入れた桶を差し出す。

タオルを浸していた桶だろうが、そんな事は関係ない。

俺は、勢い良く顔を突っ込み、何とか事無きを得た。

落ち着いた俺は、シアちゃんを問いただす。

「香辛料を入れすぎたかの？」

彼女から出たのは、その一言だけだった。

そして、次に姫の料理を口にする。

ん？ 意外と美味しい。

野菜にも火が通つてて軟らかい。

何かの出汁がよく効いている。

俺は、姫の料理を完食した。

そして、この瞬間、姫の勝利が確定した。

「シアちゃんのは、論外。姫のは、出汁が効いてて美味かった」

「あるじ……、中身を聞いても、同じ事が言えるかの？」

中身？ そういえば『など』の内訳を聞いてない。

「アリシアさま！ 負け惜しみは見苦しいですわ。勇者さまは私を選んだのです！」

何故か、急に焦りだす姫。

妙に、怪しい。

「中身って、何？」

そう問いかける俺に、シアちゃんはレシピの書かれたメモを渡してくる。

開こうとしたメモを、姫が一瞬の早業で取り上げる。

「乙女の秘密を覗くだなんて、いくら勇者さまでも許しませんわ」

一瞬見えた文字列は『鉄のサソリ』だった気がするが、まさかそんな事はないだろう。

幸い、俺の風邪は2日間で何とか治癒した。

これも、ふたりの献身的な看病のおかげだったに違いない。

あれ以上寝ていたら、命にかかわる事態になると考えた、俺の回復力のなせる業かもしれないが。

そうだったとしても、ふたりのおかげではあるのだが。

あの自称予言者の婆さんが言ったとおり、聖なるほこらなる所に足を運ぶ事にした。

他に、手がかりが無かったためだ。

だが、そこで俺達を待っていたのは一人の老人だった。

「そなたが真の勇者ならば、その印を持っておるはず。愚か者よ！ 立ち去れい！」
身も蓋も無い言葉を一方的に投げかけられ、その場をあとにするしかなかった。

「なあ、シアちゃん、ロトの印って何？」

「さあ、わらわもそのような物は知らんが？」

「これからどうしよう。」

「お父様なら、何か知っておられるかもしれませんわ」

姫の言葉に従って、俺達は王城へ戻る事にした。

第十九話：野宿

城に戻った俺達を待つていたのは、未だ腑抜けたオツサンの姿だった。

「おお、パトリシア……。どこにおるんじや？」

玉座に座るオツサンの様子は心ここにあらずという雰囲気。

その瞳は何もない空中を見つめ、実に痛々しい。

「申し訳ありませんが、勇者様。あの日から、王様はこのような様子で、とても受け答えが出来るとは……」

借金を返した途端に勇者と呼ぶようになった衛兵のおっさんが教えてくれる。

ちなみに、20ゴールドで勇者殿、利息分として10ゴールド余分に払ったら勇者様になった。

「仕方の無いお父様ですわ」

そうなったのは姫のせいでしょうが。

でも、言えない。

俺も共犯者にされてしまう。

いや、姫はきっと勇者さまのために必要だったとか言うだろうから、主犯が俺になる

のか。

どちらにしても犯人は俺。とても口に出すことは出来ない。

「パトリシアとは、なんじゃ？」

シアちゃんの問いに答えるべきだろうか？

まあ、答えるだけなら問題あるまい。

「オツサンの愛馬らしい」

これくらいなら、大丈夫だろう。

関与を疑われることもない。

だけど、シアちゃんの理解度は、俺の想像を遥かに超えていた。

「なんと！ あの男、そのような趣味があるのか……」

えっ、あの、ちよつと、もしもし？

「さすがに一国の主ともなると、嗜好も特殊になるとみえる。王に比べれば、あるじの男好きなど、可愛いものぞ」

すまん、オツサン。

俺の知らない所で、別の意味で馬好きにされてしまいました。

俺の力量不足で、本当に申し訳ない。

でも大丈夫。俺なんて、魔物の世界でも男好きだからさ。

……竜王に迫られたら、どうしよう？

世界の半分をくれてやるから、ワシの物になれ、とか。

うわ、シャレにならん。

竜王がまともな嗜好の持ち主である事を心の底から祈る事にしよう。

「お父様、いいかげんにいたしませんと、また、潰しますわよ♪」

姫が妙なセリフを楽しそうに口にする。

オツサンの様子は変わらなかつたが、何故か、衛兵が股間を押さえて震えだした。

なんだ、そのリアクションは？

またつて事は、過去にもあつたつて事か？

しかも、何故に股間？

……？　なんだ、既視感がある。

確か、オツサンが股間を押さえて……、泡をふいてて、その隣りには……、あどけな

い笑顔の……。

そこまで思い出したところで、悪寒が全身に広がる。

軽い嘔吐感もある。

「どうした？　あるじ」

俺の異常に気付いたのだらう。

シアちゃんが声を掛けてくる。

「い、いや、なんでもない」

「ぎよえー！！」というオッサンの断末魔が頭の中にこだまする。

「これで私と勇者さまの間を邪魔するものはありませんわ」という幼い少女の声か

……！

いや！ 思い出しちやダメだ。思い出しちやダメだ。思い出しちやダメだ！

俺は、この記憶を永遠に封じよう。

引き出しの奥にしまい込んで、2度と思い出さないように。

結局、オッサンの意識はパトリシアから離れる事は無かった。

姫の言葉は、俺と衛兵のトラウマを刺激するだけに終わった。

「仕方ありませんわ。パトリシアを探しましょう」

城を出た所で、姫がそう提案した。

「オッサンがああ調子じゃ、聞くものも聞けないし、仕方ないか」

同意する俺の言葉に、シアちゃんが当然の疑問を口にする。

「探すといつても、手がかりがあるまい」

だが、そんな言葉はスルー。

「とりあえず、廃墟の街の方へ歩いてみましょうか、姫？」

「そうですね。それで見つからなければ、もう少し搜索の手を広めればいいですし」「お主等、何か知っておるのか？」

シアちゃんが睨んでくる。

でも、こうなつたのはシアちゃんのせい、なんだよなあ。

言うべきか、言わざるべきか。

「申し訳ありませんが、ふたりだけの秘密ですわ」

その言い方はまずいです。

ああ、シアちゃんの視線がますます強く。

「そうですね、勇者様♪」

でも、同意を求めてくる姫に、俺はうなずくしかなかつたわけで。

姫と俺は、辺りをきよろきよろと探しながら歩き、シアちゃんはずっと無言でついてくるだけだった。

探索しながらの旅は、思ったより時間が掛かり、行程の半分も行かない所で日が暮れてしまった。

「今日の所は、この辺りで野宿しましょう」

姫の提案で、俺達は役割分担を決めた。

先日のアレで、ふたりに食事当番を任せる事の恐ろしさに気付いた俺は、2人に火の準備を任せ、川に行った。

ひざほどの深さしかない川だが、魚の居そうな場所は、経験からわかる。

両手で抱えられるほどの大きさの石を選び、魚が隠れていそうな石にぶつける。

たちまち、数匹の魚が浮かんでくる。

これで、ガチンコ漁法。効率が悪いが、食べるだけなら充分だ。

何度か繰り返して、10匹ほど捕らえて、持ち帰った。

火を確認すると、早速料理に取り掛かる。

まずは、魚を串にさし、火の周りに並べる。

焼けた魚の半分は、明日の朝食に回し、あとの半分をさらに加工する。

3匹はそのまま焼き魚として、2匹分の身をほぐし、骨を取り出す。そして、魚骨を出汁に、塩と香辛料でスープを作った。

簡単な料理だが、2人はずっとその様子を眺めていた。

姫は、何かメモまで取っている。

「意外と器用じゃのう」

「勉強になりますわ」

そりゃあ、まあ、ガキの頃から一人で家事はこなしてたし、他にする人間もいなかったしなあ。

でも、そんな事言ってもしょうがないしな。

「どんなにダメな人間でも、一つくらい特技はあるんじゃないか」

「職業が主夫というのも、よろしいかもしれないね」

何も言わないと、こうなってしまうらしい。

どうしてそんなに息がびったりなんだ？

何はともあれ、シアちゃんの機嫌も食事時には良くなり、3人で楽しく食事をとった。

ちなみに、シアちゃんの主食は俺の血やら何やらだが、食事でも補えるらしいので、普段は普通に食事をしてもらっている。

やがて、食事も終わり、何故か姫の怪談が始まった。

「真夜中のお城というのは、それはそれは楽しいものですわ。家具が突然震え始めたり、スプーンやお皿が空を飛んだり、そうそうお人形さんと遊んだ事もありますわ」

怪談の割には、実に楽しそうに語る。

「侍女に話すと、何故か怯えるんです。無理に引き止めて、一緒にお人形さんと遊んだら、翌日からお城に来なくなってしまうて……。本当に懐かしいですわ」

それに付きあわされたのか。可哀想に。

「ある日突然、神父様がお越しになられて、それ以来、ぱったりと止んでしまつて。あれから、夜があまりにも静か過ぎて、とても怖い思いをいたしましたわ」

あー、そうですね。

幽霊が出ない方が、怖いと。

かなり、ずれてらつしやいますな。

「あ、あるじは、（こっこ）、怖くないのか？」

シアちゃんが、俺に抱きつきながら、話し掛けてくる。

元魔王のくせに、どうしてまた、こんなに怖がりなのか。

「うーん、特に怖い話つてわけじゃないな」

幽霊なんかより、現実の方がよっぽど怖い。

自称312才の元魔王に、父親の○○を素手で握りつぶすお姫様。

何の力も無いのに不死身の勇者と、その勇者に世界の命運を任せる王様。

これほど怖い話は無いだろう。

「さすが、勇者さまですわ」

姫が笑顔で賞賛を送ってくる。

とりあえず、今のところ、その笑顔が怖い。

記憶の奥底から恐怖が湧き上がって来る。
その時、突然、後ろの茂みから音がした。

「なななな、なんじゃ?」

シアちゃんが裏返ったような声を上げる。

「ケケケケケケ、ケエー!」

それに呼応してか、甲高い声を上げながら、ソレは飛び出してきた。

「ゴースト!」

姫がその名を叫ぶ。

「ギラー!」

すかさず魔法が飛び、ゴーストを消滅させた。

「つてあれ? 今の誰?」

「全く、おどろかすでないわ!」

シアちゃんがそう言いながら、座り直す。

「あれ? シアちゃん、今のゴーストだよね?」

「それが、どうしたんじゃ?」

「いや、幽霊は嫌いなんじゃ……?」

「幽霊は怖いものではありませんでしたか?」

姫が、俺の考えを代弁する。

「何を言つとる？ アレはゴーストじゃぞ。魔物の一種ではないか？」

シアちゃんなりに基準があるらしい。

そして、再び、茂みから音が。

「また、ゴーストか？」

「わらわに任せるが良い」

シアちゃんがその方向に手の平を向ける。

ギラの体勢だ。

だが、現れたのは、巨大な白い影だった。

「ヒッー」

シアちゃんが構えを解き、抱きついてくる。

未だに、基準が良くわからない。

やがて、それは、こちらにその全貌を明らかにした。

「まあ、パトリシアではありませんか」

姫の言葉に気付いたのか、白馬は姫に擦り寄っていった。

えらく頭の良い馬だ。

おそらく、火を見て、人間が居る事に気付いたのだろうと、姫は言った。

「これで、大手を振って、帰れるな」

「そうですわね」

「こやつが、パトリシアか……。王も好き者じゃのう」

一人、妙なコメントを残しているが、気にしないようにしよう。

翌日、パトリシアを連れて城に戻った俺達は、姫を助けた時と同じくらい歓待された。

まあ、その辺は特に語る事も無いので、割愛する。

「勇者よ！ よくパトリシアを救ってくれた。礼を言うぞ」

「そんなことより、お父様」

「そんなこと、わしの可愛いパトリシアがそんなこと……」

妙な方向にダメージが。

姫は業を煮やしたのか、オッサンの耳元で何かを囁く。

途端に、オッサンの腰が引ける。

「な、なんじゃ、どうした？ わしの可愛い娘よ」

何か、今のオッサンを見てると涙が出てくる。

昔の威厳はどこに行っちゃったんだ。

「ロトの印の事、ご存知ではありませんか？」

「ロトの印？ 伝承によれば、手のひら大のメダルで、ロトの紋章が入っているそうじゃぞ。だが、勇者ロトが持っていたとは記されておるが、その後の行方まではな」

「そうですか……」

とりあえず、どんな物かわかっただけでも充分だ。

シアちゃんに心当たりが無いか聞いてみよう。

勇者ロトの縁の地でも捜し歩けば、そのうちぶつかるだろう。

そう考えた俺は、シアちゃんの方を向いた。

「……あれが、ロトの印じゃったのか？」

心当たりがあるようだ。

「知ってるの？ シアちゃん」

「知ってるも何も、アレを捨てたのはわらわじゃぞ」

は？ 捨てた？

シアちゃんの言葉に、俺達は固まってしまった。

第二十話：勇者口ト

勇者口ト、俺のご先祖様だ。

この世界で知らぬ者はいない、伝説の勇者だ。

だが、勇者とはいってもやはり、一人の人間。

知られざる真実が今、白日の下にさらされる。

俺は今、呪文屋に通じる道を歩いている。

一人で街を歩きながら、あの時の事を思い出す。

シアちゃんは一言、許せなかったからだと言った。

アルスとの間に何があったかはわからない。

けれど、俺も姫も、何も聞かなかった。

一人、異議を唱えた者もいたが、姫が力で黙らせた。

あの頃の強かったオツサンはどこに行ってしまったのか……。

姫とシアちゃんは、場所の特定を言うと行ってしまったのか……。

俺は、その間にパワーアップを図ろうと考えている。

やはり、メラとルーラだけでは限界ではないかと思いつたのだ。

思えば、俺が受けたのは勇者コース。

魔法使いコースを受ければ、ヒヤドくらいは覚えられるかもしれない。

そして、再び門をくぐった。

「おや、勇者様ではありませんか」

「久しぶりだな、プラス5才」

女は拳を握り締めている。

「それで、今回はどんなご用件で？」

必死に抑えているようだが、声が震えている。

「呪文を覚えに来た」

そう伝えると、彼女は営業スマイルで料金表を差し出してくる。

「勇者様ですもの。もちろん、勇者コースですよね？」

魔法使いコース——250ゴールド

僧侶コース——200ゴールド

勇者コース——20000ゴールド

相変わらず、勇者コースだけ桁が違う。

でも、今回は魔法使いコース。

しかも、オッサンのお墨付きだから、支払いは100分の1。

「いや、魔法使いコースだけど」

俺がそう告げると、彼女は料金表を奪い取る。

「申し訳ありません、勇者様。こちらは、先週末までの料金表でした。こちらが本日の料金表ですわ」

魔法使いコース——25000ゴールド

僧侶コース——2000ゴールド

勇者コース——2000ゴールド

待てやコラ。

「ほほう、もしや前回もこの手口だったんじゃないやあるまいな」

「さて、何の話でしょう?」

プラス5才女は、そっぽを向いて口笛を吹いている。

上等だ。そっちがその気なら、こっちも目に物見せてくれる。

「さっきのは冗談で、実は勇者コースだ」

「またまた、ご冗談を」

そう言いながらも、彼女の手は、俺が持つ料金表に掛かっている。

「はっはっはっ、勇者の俺が魔法使いコースなわけがないだろう?」

「ふふふふ、勇者様もご冗談がお上手ですわ」

彼女の手が料金表を再度差し替えるのを確認する。

「だけど今回は、魔法使いコースなんだ」

手元の料金表は、250ゴールドに戻っている。

「くっ、謀りましたね」

いや、アンタには言われたくない。

彼女は悔しそうだ。

俺は、しばし勝利の余韻に酔いしれた。

「仕方ないじゃありませんか。このご時世、女が一人で生活するのは大変なんです」

うぐっ、そう言われると反論しにくい。

あっさりとして、ぼったくりを認めた女の言葉に俺は声を詰まらせた、がしかし。

「それで、前回の罪を逃れられると?」

更に追求すると、彼女は開き直った。

「仕方ないでしょ! この一ヶ月、アンタしか客が来ないんだから!」

まだ2回目だが、言われてみれば、他の人間を見た事が無い。

「王様には、庶民の気持ちなんて分かんないのよ! 久しぶりに客が来たと思ったら、100分の1に負けろだなんて、馬鹿にするにも程があるわ!」

それで、相手を見越して料金表の改ざんかよ。

「仕方ない。有り金全部出すから、それで勘弁してくれ」

俺がそう言うのと、途端に笑顔に戻る。

「まあ、さすが勇者様！ 太っ腹ですわ」

また騙された、そう思いながら金をカウンターに置いた。

「……あの、それで全部？」

女が訝しげに俺を見る。

「俺の全財産だ」

「ごめんなさい。下には下がいるのね。私、甘えてたわ」

どういう意味だ。

「うん、これだけで良いから。今回はサービスしてあげるから」

そう言つて、5ゴールドだけ取つた。

なんで、憐れみの表情を浮かべる？

「ちよつと待て。俺は、有り金全部渡すつて言つたんだが」

「だつて、15ゴールドしかないじゃない！」

「衛兵のおっさんに借金返したら、そんだけしか残らなかつたんだよ！」

「どうして、勇者なのにそんなに困窮してんのよ！」

「しょうがねーだろ！ 王様は最初の50ゴールドしか出さねーし、金の管理はシアちゃんかやってんだから！ しかも、小遣い制なんだぞ！」

死んだら、所持金が半分になる人間に財布を預ける馬鹿はいない。

つまりは、そういうことだった。

事情を説明すると、彼女は言った。

「……わかった。全部受け取る事にするわ。そのかわり！」

何だよ？

「全てのコースを受けてもらおうわー」と。

ついでに、これからはお姉さんと呼びなさいとも言われたが。

新しい呪文をいくつか手に入れた俺は、待ち合わせている宿へと戻った。

シアちゃんと姫は、既に特定を終えたようだ。

「廃墟の街の南東に、城塞都市がある。ロトの印はそのさらに南の沼地にある」

地図を見せてもらったが、半端じゃなく遠い。

「廃墟の街までルーラで行って、あとは歩く事になりますわ」

あれ？ シアちゃんはどうやってそこまで行ったんだ？

「シアちゃんのルーラで飛べないの？」

俺は当然の疑問を口にした。

「何せ200年以上前の話じゃ。イメージが固まらぬ」

そりゃそうか。

わざわざ地図を見るくらいだしな。

「では、行きましようか」

姫が音頭をとり、俺達は城下町を後にした。

まずはルーラを使い、廃墟の街まで飛んだ。

姫が、俺をお姫様抱っこするという屈辱的な体勢で、だ。

「勇者さま、もつとしっかり抱き付いて下さい」

残念な事に、鎧のせいで感触が硬い。

それでもシアちゃんには腹立たしいようで、少し機嫌が悪い。

「着地の衝撃で落ちてても、生死に関わるような傷は負うまい。捨て置け」

酷い言い分だった。

さらに、そこから南東へと歩き始める。

道中、シアちゃんにご先祖様の事を聞いた。

誰に話すともなく、突然、語り始めたのだ。

「……あの後、わらわはアルスとリイネの元で暮らしておった」

あの後とは、魔王になったシアちゃんと勇者アルスとの戦いの後のことだろう。

「やがて、2人の間に子どもが生まれての。そんな折、突然アルスが失踪しおった」

「失踪、ですか？」

「うむ、後にはリイネとわらわ、それぞれに宛てた手紙と聖なる護りだけが残されておった」

「聖なる護り？」

「大魔王の手から精霊を救い出した折、勇者へと授けられた物じゃ。アレがロトの印じゃとは、思いもせんかったがの」

「で、手紙には何て？」

「リイネ宛ての手紙は見ておらぬ。ただ、わらわ宛ての手紙に書かれていた内容は、実にふざけたものだった」

シアちゃんは手を力一杯、握り締めていた。

魔力が込められているのだろう、とてつもない力を感じる。

俺は、おそるおそる内容を聞く事にした。

「な、なんて、書いてあったの？」

「俺は、一人の女に縛られるような生き方はしたくない。新しい人生を探しに行く」と書かれておった」

最低だった。

「アルスは、勇者としての能力は高かったのじゃが、如何せん性癖に問題があつた」
シアちゃんいわく、街ごとに複数の女がいて、それを隠そうともしなかつたらしい。

しかも、ある一つの信念というべき物の下に行動していたそうだ。

「女と呼べるのは、18才から。18才未満の少女達は全て俺の妹だ！」

そう公言してはばからなかつたらしい。

「わらわに向かつて、『お兄ちゃんと呼べ』と言つた事もあつたの」

最悪だ。

アルスの名が残らなかつたのも納得がいく。

当時の人々は、勇者ロトの偉業とは切り離してしまつたのだろう。

世界を救つた勇者ロトと、女遊びの過ぎる勇者アルスとを。

「俺は、そんな奴の血を引いているのか……」

無性に恥ずかしかつた。

「あるじの趣味も、自分の年齢マイナス2才以下でなかつ10才以上ではないか」

確かにその通りなんだけど。

「でも、勇者さまは決して浮気などなさいませんわ」

よく考えたら、姫もアルスの子孫なんだよな。

まあ、俺なんか惚れるんだから、変わってるといえば変わってるか。

「俺には、ふたりが居てくれれば充分だよ」

シアちゃんも姫も、俺がそう言うのと真っ赤になっとうつぶわいてしまった。

何か妙な事言ったか？

「あ、あるじは、何ゆえそのようなセリフをさらつと言えるのじゃ」

「勇者の血筋ですわ、きつと」

2人がひそひそと話をしているのを見ながら、そういえば、気になってた事があつたのを思い出した。

「なあ、シアちゃん？」

「な、何じゃ？」

「シアちゃんって、いくつの時にその姿になったの？」

「14の時じゃが、どうしたんじゃ？」

「14?!」

てつきり、12才かと思っていた。

でも、そうすると、アレは？

「何をそう驚くことがある」

「えっ、いや、だって、生えてな……」

俺の視界を真つ赤な炎が覆い尽くした。

「まったく、デリカシーの無いのもあやつ譲りじゃ！」

「その辺りは、個人差もありますし」

「やかましいわ！」

姫とシアちゃんの会話を聞きながら、俺は意識が闇へと落ちるのを感じていた。

第二十一話：ゴーレム

遠くに明らかに人工の物と思われる城壁がそびえ立っている。

「ここまで道のりは、本当に長かった。

岩山を越え、森林を抜け、いくつもの川を渡り、ようやくここまで来た。

「あれが城塞都市か……」

「そのようですね」

無意識に漏れた言葉に、姫が同意を返す。

「ここまで1週間もかかるとは思わなかった」

「うむ。あるじが崖から落ちたり、川に流されたり、森で迷子になったりせなんだら、もっと早く着いたじやろうな」

俺は、シアちゃんの言葉に無視を決め込み、皆を奮い立たせるように言葉を発した。

「さあ、目的地は目の前だ。早く行かないと、門の前で野宿することになるぞ」

太陽は、未だ頭上で輝いている。

「ゆっくり歩いて、昼過ぎには到着いたしますわ」

「もう少し慎重に歩け。常日頃、おぬしはわざわざ自分から悪い選択肢をえらんどる節があるからの」

俺は、心の中でそつと涙を流した。

「何か、いるな」

「なんでしようか？」

「ゴーレムの類か？」

城塞都市の門に辿りついた俺達が見たのは、きつちりと閉じられた扉とその前に鎮座する巨大な石像だった。

「以前に来た時は、あのようなモノは居らんかったぞ」

「昔、この街は竜王の軍勢を撃退したことがあったそうですわ。おそらく、あれがその理由ではないでしょうか？」

魔物に反応して動き出すってことか？

じゃあ大丈夫だろう、そう思った矢先だった。

突然、ゴーレムの眼に光が宿る。

「シンニユウシャ、カ？」

おいおい、アイツしやべってるぞ。

まあ、ドラゴンがしゃべる時代だし、そういうこともあるか。

「俺達は、この街に入りたいだけだ。通してくれないか？」

「なっ?! あるじは、この状況で動じぬのか？」

なんで？

「さすが、勇者さまですわ」

なぜか、褒められた。

「普通、無機物で創造された魔道生物が話す事なんてありませんわ」

「えっ? だって、悪魔の騎士とか、普通にしゃべってたよ」

「アレは、鎧が話していたわけではあるまい」

そうだったけ？

シアちゃんの呆れるような言葉に、あの時のことを思い出す。

「あーそういうえば、中の人がいたなあ」

倒した時に、黒い影が出てきたのを思い出した。

「アレを人と言うのか、おぬしは……」

影がしゃべるのも、じゅうぶん非常識だと思うけど。

まあ、それはそれ。

ゴーレムは、何かを考えるように動きを止めている。

そして、顔の部分をこちらに向けると、順繰りに一人一人を凝視する。やがて、姫に視線を止め、言葉を発する。

「……ニンゲン、モンダイナシ」

次は、俺。

「……ニンゲン? ……モンダイナシ」

ちよつと待て。

なんだ、今の間は?

しかも、ちよつと疑問形じゃなかったか?

ゴーレムは俺の抗議に耳を貸すこともなく、シアちゃんに顔を向ける。

「……マモノ、ハツケン。コウゲキカイシ」

「おお、そういうえば、わらわは魔物じゃったの」

そういうえば、そうだった。

本人すら、すっかり忘れていた事実、改めて気が付いた俺達だった。

ゴーレムの攻撃、とはいっても、腕を振り下ろすだけだ。

当たれば痛いだろうが、当たらなければどうという事も無い。

姫は、攻撃を引き付けながら巧みにかわしている。

悪魔の騎士と比べると、どうにも鈍重な動きだ。

「メラゾーマー！」

シアちゃんの呪文が飛ぶが、ほとんど効いてないようだ。

まあ、石で出来ているだろう身体に、炎が効くとは思えない。

離れた場所で戦術評価をする俺を、シアちゃんが睨みつけてくる。

思わず、口に出していたらしい。

「いかづちよー！」

杖をゴーレムに向けて、力ある言葉を放つ。

杖の先から光がほとばしり、ゴーレムの身体に吸い込まれていく。

衝撃音。

爆煙が晴れた先には、全く無傷のゴーレムの姿。

うん、効いてない。

俺達は逃げ出した。

幸いな事に、門から離れるとゴーレムは動きを止めた。

近付かないかぎり、無害らしい。

眼にともっていた光も消え、再び石像に戻ったゴーレムを横目に作戦会議を開く。

「わらわがおらねば、通れたかも知らんろう」

シアちゃんが謝罪の言葉を口にする。

「一人だけ、野宿させるわけにも行かないさ」

俺はシアちゃんの肩を抱き寄せる。

その動作が気に障ったのか、姫が咎めるようにシアちゃんに話し掛ける。

「勇者さまが一旦、中に入られてから、私達は勇者さまのルーラで街に入るといふ方法もありましたわ」

俺のフォローが台無しだ。

シアちゃんの身体が一瞬、ビクツと震える。

「……やはり、わらわのせいじゃな」

「いや、だめだ！ その方法でも失敗するかもしれないし、失敗したら死んじゃうしき。俺は大丈夫だけど、ふたりに何かあったら、俺は生きていけない！」

……色んな意味で。

オッサンの怒り狂った顔が目には浮かぶ。

飽きるまで処刑を繰り返されそうだ。

そして、未来永劫、あの特別室に閉じ込められる事になるだろう。

その現実感のある想像に、思わず寒気を感じ、腕の中のシアちゃんを強く抱きしめる。

そして、もう片方の腕で姫を抱き寄せた。

「……あるじ」

「……申し訳ありません」

俺達は、気を取り直して、作戦を練った。

「剣は試してないからわからないけど、呪文はまるつきり効かなかったな」

俺の言葉に、2人はうなづく。

「少なくとも、炎は効かなんだ」

「いかづちの杖も効果ありませんでしたし、おそらく雷撃も効きませんわ」

このぶんだと、あの呪文も効果は期待できないだろう。

新呪文のお披露目は、先の事になりそうだ。

「姿を消す呪文で、中に入れるものではありませんか？」

「レムオルか……。すまぬが、わらわには使えぬ」

前に、詩人の街で情報屋のふりをしていた魔物。

あれを尋問していた兵士から連絡があった。

奴は、レムオルという姿を消す呪文を使っていたのだ。

隠形とか、偉そうなことを言っていたが、種は簡単だった。

だからといって、誰でも使えるわけではないらしい。

悪用する者が後を絶たないため、禁呪扱ひされているということだ。

呪文屋のお姉さんに確かめたから、事実だ。

ちなみに、俺は覚えられなかった。

残念。

「そういえば、詩人の街でゴーレムの話を聞いたな」

「なんじゃと!」

「どのような?」

思い出す。もつと思ひ出す。深く思ひ出す。

確か……、ゴーレムは笛の音が苦手だとか。

「笛と言われても、どんな笛じゃ?」

「特別な物ならば、また探さなければいけませんわ」

まあ、当然といえば、当然の反応だ。

今までに、笛らしき物の情報なんてなかったしな。

「また振り出しに戻ったの」

「仕方ありませんわ」

俺達は落胆した。

その時、ある考えが閃いた。

何故、今まで思いつかなかったんだらう。

「あのさ、思ってたんだけど」

俺が話し出すと、ふたりは顔をあげた。

「別に、入る必要なんて無いんじゃない？」

ふたりの顔に、驚きが広がる。

「ロトの印があるのは南の沼地だし、考えてみれば、わざわざ苦労してまで入る必要ない
だろ？」

「言われてみれば、その通りじゃな」

「灯台下暗しですわ」

俺達は、城塞都市に入ることなく、その場を後にした。

2日後、南の沼地に辿りついた俺達は、地獄絵図を目にした。

沼の水は紫色に濁り、辺りにはガスのような物が漂っている。

沼の周辺、いたるところに骨のような物が散乱している。

どうやら、毒にやられてしまった動物の死骸らしい。

「えっと、ここに捨てたの？」

こりやまた、えらい憎まれてたんだな、アルスは。わざわざこんな所に捨ててるなんて、さすがシアちゃんだ。

「そんなに、夜の勇者アルスがお嫌いだったんですか？」

呆けている様子のシアちゃんに、姫が問いかける。

夜の勇者つて、いいネーミングだな。

昼の勇者ロトに、夜の勇者アルスか。

今度から、俺もそう呼ぶ事にしよう。

「よ、夜の勇者？ い、いや、そんな事はどうでも良い」

どうでも良いのか。

「ここは昔、精霊のほころのあつた場所じゃ。精霊の加護が薄れておるのか？ 昔は

ちやんとした沼地であつたぞ」

見渡す限り、毒の沼地。

ここから勇者の印を探すのか……。

俺は、間違いなく数歩も歩かないうちに死に至るだろう。

そこらにあつた棒を、沼に差し入れてみる。

底についたところで引き上げると、深さは膝上辺りか。

「何か良い方法は無いかな？」

少し息苦しくなってきた俺は、沼地から離れた。

シアちゃんも俺についてくる。

しかし、姫はその場にとどまっている。

「姫！ 危険ですよ！」

俺の声に、姫は振り向くと笑顔を見せた。

そして、次の瞬間、沼へと足を踏み入れた。

「そういうえば、光の鎧には毒を無効化する力が備わっておったな」

シアちゃんの言葉どおり、姫の周囲にはガスが寄り付かない。

そればかりか、足元の毒の水すらも、姫を避けるように裂けていく。

「そういう事は、早く言おうよ」

「忘れておったわ」

姫は、沼の中央まで歩みを進めると、何かを拾い上げた。

「見つけましたわ！」

何かを上に掲げている。

俺は思わず姫に駆け寄った。

「あつ、あるじ！ 死ぬぞ！」

はい？

その声を聞きながら、俺は膝から崩れ落ちた。

目の前には、紫色の毒の沼地。

俺は、駆け出した勢いのまま、沼地へとダイブしていた。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！」

久しぶりの、覇気のあるオッサンの声に迎えられる。

「なあ、オッサン」

「どうしたんじや、勇者よ」

「紫色の水って、死ぬほど不味いな」

「何の話じや？」

死ぬ瞬間、口の中に流れ込んだ水は、心底不味かった。

そして、ふたりの所に戻ったら、やっぱり死ぬほど説教喰らうんだろうな。

そう思うと、再び口の中に苦いものが広がるような感じがした。

第二十二話：不安

王城とは海をはさんだ向こう側。

そこが最終目的地、竜王の城。

一体、竜王とは如何なる姿をしているのか？

どれほどの強さを誇るのか？

何も判らないまま、俺達は進まなければならぬ。

……旅の終わりは近い。

俺は、海の方こうに見える竜王の城を見つめている。

全てのアイテムは揃った。

太陽の石と雨雲の杖、そして、ロトの印。

これを聖なるほくらに持っていけば、竜王の城への道が開ける。

シアちゃんがそう教えてくれた。

聞けば、ご先祖様も同じ道を辿ったらしい。

道理で、太陽の石を知っていたわけだ。

「あるじ、どうした？」

城の屋上に立っている俺が気になったのだろうか、シアちゃんが声を掛けてくる。

「シアちゃんこそ、今日は姫と買い物に行ったんじやなかった？」

明日の朝に出発する予定なので、今のうちに必要な物を買ひ揃えようと、ふたりして出かけて行ったのを見送ったはずだ。

「衣装合わせとか言うて、仕立て屋で着せ替え人形じや。面倒じやったので、途中で逃げて来た」

顔をしかめながら話す。

余程、嫌だったらしい。

「衣装合わせ？」

「祝勝会で着るんじやと」

「気の早い事だな」

「そうじやな」

ふたりで示し合わせたかのように、声を上げて笑う。

ひとしきり笑ったところで、シアちゃんが再び問いかけてくる。

「で、わらわの質問には答えてもらえぬのか？」

「やっぱ、ごまかせないか。」

俺は、観念することにした。

「……ずっと、不安なんだ」

「不安？ おぬしは死んでも生き返るのじゃぞ？」

「俺の事なんてどうでもいいんだ。ただ、ふたりを失う事になるかも知れないのが怖い」

幼い頃に両親を失った。

親代わりの人は居たが、どこか寂しきは拭えなかつた。

でも、旅に出て、シアちゃんに出会って、姫に再会して、俺は幸せだった。

この幸せを失うのが、また独りになるのが、たまらなく怖い。

「何じゃ、そのような事で悩んでおったのか」

しかし、不安にかられる俺を、シアちゃんは笑い飛ばす。

「そんな事って、俺は本気で！」

「あるじが本気なのはわかっておる。わらわとて、別れを体験しておる。ずいぶん昔の事じゃがの」

その言葉で、熱くなった頭が急速に冷えていく。

「ごめん」

「良い。わらわとて、魔王の城に臨みし時、同じように悩んだわ」

「シアちゃんも？」

「うむ。まだ14の小娘じゃぞ。当然ではないか」

自分が死んだら、親兄弟は悲しむだろうか。

仲間達が死んだら、自分はどうなってしまうのか。

色々な思いが駆け巡って、その場を動けなくなってしまったそうだ。

「その時、アルスが笑いながら言うた。『大丈夫だ。俺達は強い！』とな。思わず笑ってしもうたわ」

「ご先祖様。やっぱスゲーよ、アンタ。

達者なのは、夜だけじゃねーんだな。

「故に、我らも先代に倣うとしようぞ」

「でも、俺は……」

「気にせずとも良い。わらわも、姫も、おぬしを強いと思うておる。力の大小ではない。

おぬしの心が、じゃ」

「俺の心……？」

いきなり何を言い出すんだ？

「アルスは、死ぬ事を恐れていた。死を恐れ、死にたくないがために強くなった」

おぬしとは、正反対じゃなと笑う。

「おぬしは、仲間を失う事を恐れておる。自らの死を厭わず、仲間を失わぬために強くなろうとする」

「でも、俺は弱い」

「だからこそ、わらわ達も強くあろうと願う。仲間を失いたくないという、おぬしの想いに応えるために」

正直、シアちゃんの言っている事はよくわからなかった。

ただ、俺がふたりを想うのと同じくらい、ふたりが俺を想ってくれていることが、とても心強かった。

「ありがとう、シアちゃん」

「礼を言うのは、わらわの方じゃ。おぬしに愛される事を、わらわは誇りに思う」

俺達は、どちらからということもなく、自然に抱き合い、唇を重ねようとした。

「見つけましたわ！」

突然響いた大音声に、咄嗟に離れる。

「アリシアさま、続きが待っておりますわ」

姫は素早く駆け寄ると、シアちゃんの腕をとる。

「では、勇者さま。アリシアさまは、お借りしていきますわ」

俺はうなずくしかできない。

姫は、そんな俺を見つめると、おもむろに唇を重ねた。

「あーっ!! 何をしておるか!!」

シアちゃんが姫の腕の中で暴れている。

目を白黒させている俺に、姫はいたずらっぽく笑う。

「私も、勇者さまの愛をいただきました。これは、そのお礼です♪」

えっ? それって……。

「さあ、行きますわ」

姫は、俺が問い返すより早く、シアちゃんを抱き上げながら去っていく。

「おぬし、どこから聞いておったんじゃ?!」

「さあ? 何の事でしよう?」

言い争いながら遠ざかって行く彼女らを眺めながら、俺は心が軽くなっているのに気

付いた。

「俺達は強い!!」

海の方こう、竜王の城に届くように、思い切り叫んだ。

どこか遠くで、ふたりが笑ってるような気がした。

第二十三話：ロトの印

ロトの印。

伝承にのみ語られ、ロトの仲間の手によつて歴史の闇に葬られた遺物。

これを見た人間が今もお生き続けているとは考えにくい。

ならば何故、聖なるほこらの老人はロトの印を知っていたのだろうか？

一つ、試してみるとしよう。

「おお！ それはまさしくロトの印！」

勝った！

老人が、コレをロトの印だと認めた瞬間、俺はそう思った。

「そんなバカな……」

シアちゃんは言葉を失っている。

「アリシアさまの負けですわ」

姫がうなだれるシアちゃんに追い討ちをかける。

「さて、何をしてもらおうかな？」

うさみみバンドをつけてもらおうか、それとも……。
色々な想像が頭をよぎる。

「楽しそうですわね、勇者さま」

「もちろん！」

話を始めるタイミングを失って、口をパクパクさせる老人を置いてきぼりにしたまま、俺達の会話は続く。

「あの格好で旅をするのはどうですか？」

「あの格好って、ゆきうさぎ？」

それもいいなあ。

「シアちゃんは、どう……………、アレ？」

さつきまでそこに居たのに、どこに行ったんだ？

首をかしげていると、姫が袖を引っ張る。

「止めた方がよろしいのでは？」

指し示す方向には、老人の胸倉を掴んで前後に激しく揺らす、シアちゃんの姿。

「おぬしが！ おぬしが、しっかりしておれば！」

「あが、あがががが……」

老人は、泡を吹いて失神している。

これ以上は、命に係わりそうだ。

「姫は、シアちゃんを！」

「ハイ！」

なんとか2人を引き離す。

シアちゃんは、姫が気絶させたようだ。

俺は、未だ意識の戻らない老人を見やる。

老人の手の中には、原因となった紙製のメダルがしっかりと握られている。

全ての発端は、昨日の夜へとさかのぼる。

「何をしておる？」

夕食を終え、明日に備えて眠るだけという時間。

俺は、かねてからの疑問を解消するため、工作にいそしんでいた。

「ロトの印を作ってるんだ」

紙を何枚も貼り合わせて、円形に切り取る。

そして、本物を見ながら、紋章を模写する。

出来上がった紙製のメダルは、大きさだけは本物と同じ。

しかし、明らかに子供の工作としか思えない代物だった。

案の定、シアちゃんは呆れている。

「ソレで、何をするつもりじゃ？」

「もちろん、聖なるほこらの老人に渡すんだけど？」

俺は、シアちゃんに語った。

老人もおそらく、伝承でしか知らないのではないだろうか？

ひよつとしたら、偽物でも騙し通せるかもしれない。

全てを話し終えた時、シアちゃんは大きなため息を吐いた。

「馬鹿じゃ、馬鹿じゃとは思ってたが、まさかここまでとは……」

「思い立ったら、即行動。それが俺の信念だ！」

そんな俺のセリフも、ただの開き直りにしか見えなかったらしい。

また、大きなため息を吐いた。

「まあ、どうなさいましたの？」

部屋に入ってきた姫に、一部始終を話す。

「試す価値はありますわ」

姫は、賛成派に回ってくれた。

シアちゃんだけが、そんな俺達に抗議する。

「そのような事に、何の意味がある！」

「俺が満足する！」

しかし、俺の答えに、シアちゃんは満足しない。

そんなシアちゃんに、姫が提案を持ち掛けた。

「では、賭けをしてみてもどうでしょう？」

俺達は、当然、だまされるに賭けた。

シアちゃんは、その反対。

負けた者は、勝った者の言う事を何でも一つ聞く。

ただ、それだけの事のはずだった。

意識を取り戻した老人に、事の顛末を洗いざらい白状した。

「確かに、ワシは本物を見たわけではない。ただ、その形状を知るまでに過ぎぬ。……

じゃが、聞けば済む事ではないか？ まったく、要らぬ恥をかいたわ」

俺は、ただひたすらに頭を下げるだけ。

そして老人に、太陽の石と雨雲の杖を手渡し、本物のロトの印を見せる。

シアちゃんは未だ意識を取り戻さず、姫はそんな彼女を背負っている状態だ。

老人は、そんな俺達を見て、深いため息を吐き、祭壇へと向かった。

「神よ！ この聖なる祭壇に雨と太陽を捧げます」

太陽の石と雨雲の杖が光になり、やがて一つに溶け合った。光がおさまった時、そこにはちいさな宝石があった。

「さあ、勇者よ！ 祭壇に進み、虹のしずくを持っていくが良い！」手に取ったそれは、ほのかに暖かく、不思議な色合いをしていた。まさに、虹のしずくの名にふさわしい。

「ここには、もう用はあるまい。さあ、行くのじゃ。これは、記念にもらっておこう」老人は、紙製のメダルを示し、笑って見せた。

俺は、老人にもう一度深く頭を下げると、その場を後にした。

「はあ、シアちゃんのおかげで、とんでもない目にあつた」

「おぬしが、妙なことを思いつくからいかんのじゃ！」

意識を取り戻したシアちゃんは、早速俺にかみついてくる。

確かに、元々の原因は俺にあるけど、手を出したのはシアちゃんだよなあ。そう思いながらシアちゃんを見ると、睨みつけてくる。

俺はため息を吐くと、こう切り出した。

「おわびに、シアちゃんの頼みを一つだけ聞くよ」

「これが悪夢の始まりだった。」

「あのさあ、シアちゃん。コレ、なに？」

「首輪と縄じゃ。見て判らぬのか？」

いや、それは判るんだけど。

「どうして、俺の首につけるのかな？」

「首に縄を付けておかんと、何をしでかすか判らぬからの」

湖畔の街へと戻った俺達は、早速シアちゃんに雑貨屋へと連れて行かれた。

そこで、コレを付けられたのだ。

言っておくが、ここは街中、しかも繁華街の中心部だ。

恥ずかしい事、この上ない。

「首に縄を付けるつてのは、言葉のあやって奴で……」

「問答無用じゃ。わらわにも、この格好を強要するのじゃ。覚悟は出来ておろう？」

そう言つて、今までに無い気迫で凄むシアちゃんの頭上には、2本の長い耳が揺れている。

例の賭けの結果だ。

服装はいつもと同じローブ姿だが、うさみみが可愛らしさを際立たせている。

一方、俺はというと、いつもの服装に首輪と縄。

しかも、縄の端はシアちゃんが握り、先導している。

姫は、いつもの格好でシアちゃんの隣りを颯爽と歩いている。

蒼い鎧を着込んだ凜々しい女性。

隣りには、うさみみを付けた少女。

そして、その少女に引つ張られる首輪付きの男。

明らかに怪しい組み合わせだった。

街の人間の視線が痛い。

老若男女を問わず、厳しい視線を投げかけて来る。

当然だ。俺も当事者でなければそうする。

やがて、奇妙な行進は終わりを告げ、今日泊まる宿が見えてくる。

やっとこれで解放される。

そう思ったのも束の間、目の前の扉から老婆が出てきた。

その姿には見覚えがある。以前に会った、自称予言者の婆さんだった。

「おお、久しぶりじゃな、勇者よ」

コラ、身元をばらすな。

案の定、それを聞いていたであろう周囲の人々から、失意と感嘆の声が聞こえてくる。

「ねえママ、あの人、勇者だって」「ダメよ。あんなの見ちやいけません!」

「さすが、勇者ともなると、やる事が違うねえ」「確かにありやあ、ある意味、勇者だな」

俺は地面に両手をついて突っ伏した。

そんな俺を見て、自称予言者はのたまった。

「ずばり、おぬしらは、女王様と犬じやろう!」

「違うわ!」

俺は即刻抗議した。

しかし、この場に俺の味方はいなかった。

「まあ、勇者さまだったら、こんな所で四つん這いにならなくともよろしいのに」
「あるじ、そんなに犬になりたかったのか?」

周りの喧騒に気付いているのかいないのか、ふたりしてひどい事を言う。

さすがに、この状況に耐えかねた俺はキレた。

「くつくつくつく……」

「……まさか、泣いておるのか?」

「……少し、やりすぎてしまいましたか?」

姫の言動を聞く限り、どうもふたりの策略だったらしい。

、何が目的なのかは知らないが、もう、どうでもいい。

「…………マホトラ」

姫とシアちゃんから、魔力を少しばかり分けてもらう。

「なんじゃと?!」

「勇者さま?!」

呪文屋のお姉さんの説明を思い出す。

俺は、魔力の上限が高いが、なぜか最大まで回復する事が出来ないのだそう。

そして、生命力も著しく低い。

理由は簡単。シアちゃんとの契約のせいらしい。

元魔王と契約して、死なない事が奇跡だと言われた。

まあ、それに関してはどうでもいい。

彼女と共に生きる事を決めたのは、俺自身だからだ。

それに、魔力を補いさえすれば、魔法が発動することが証明された。

その前段階が、この魔力吸収呪文、マホトラだ。

そして、次に唱えるのは、最低最悪最凶の呪文。

出来れば使うな、と忠告を受けたが、今この場で使わせてもらう。

俺は万感の思いを込めて、その言葉を叫んだ。

勇者はパルプンテを唱えた。

どこかで何かが壊れる音がした。

宿の建材の一部が落ちてきて、勇者の頭を直撃した。

20のダメージ。

勇者は死んでしまった。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！」

もう、笑うしかない。

俺は、どうやってもこうなる運命から逃げられないらしい。

「ど、どうしたんじゃ、勇者よ」

慌てるオツサンを尻目に、俺は声が枯れるまで笑い続けた。

あの後、街は大混乱に陥ったそうだ。

勇者が自滅した上に、その場から消え去ったからだ。

泣きながら謝るふたりに聞いた。

首輪を付けたのは、俺を戒めるためだったらしい。

俺のためにしたことなので、結局、許す事にした。

その代わり、俺の言う事を一つずつ叶えてもらったが、内容については割愛させてもらう。

ただ、出発が1日延びることになったとだけ言っておこう。

第二十四話：エリザ

この海の向こうは竜王の領域。

そこに最も近い岬に立ち、虹のしずくを掲げる。

途端に辺りに霧が広がり始める。

それが晴れた時、目の前には虹の橋が架かっていた。

「おとぎ話の主人公になった気分ですわ」

虹の橋を見た、姫の第一声は明らかにこの状況を楽しむものだった。

……怖くは無いのだろうか？

俺は、正直怖い。

これを渡るくらいなら、揺れるつり橋を全速力で走り抜ける方がましだ。

「あるじ、何をしておる？」

シアちゃんが不思議そうに俺を見る。

「こ、これを渡るのか？」

及び腰の俺を見て、ふたりは不思議そうに首をかしげる。

前に渡った事のあるシアちゃんはまだしも、初めて渡る姫にも恐怖心はないようだ。

「先に行きますね」

姫はスタスタと歩いていく。

意外と虹の表面は硬いらしい。

姫は、虹のアーチの頂点部分、橋の真ん中に立って、俺を呼ぶ。

「大丈夫ですよー！ 勇者さまー！」

大丈夫って言われても……。

「ほれ、さっさと行かぬか」

シアちゃんに後ろから押される。

仕方なく歩き出しても、橋に差し掛かったところで足が止まってしまう。

なにしろ、幅が両手を広げた程しかなく、高さに至っては城の屋上よりも高いのだ。

そして当然、欄干など無い。

さらに後ろから押され、思わず地面に手をついてしまう。

「ふう、仕方あるまい」

シアちゃんが前に回って、俺の首に何かを付ける。

「、これはまさか……?」

「さっさと行くぞ」

言いながら、縄を引つ張る。

当然のことながら、それは俺の首から伸びている。

「何でまだ持つてんの?!」

「せつかく買ったのに、捨てるわけにもいくまい」

俺の抗議に、至極当然のような口振りで言う。

「ほれ、はよう来ぬか」

引つ張られるが、俺は必死で抵抗する。

静かな攻防がしばし続いた。

姫は、後にこう語った。

その様は、まるで、飼い主の少女と散歩を嫌がる犬のようだったと。

その戦いは唐突に終わりを告げた。

虹の橋が消え始めたのだ。

空を見上げると、厚く立ち込めた雲に太陽が隠れようとしていた。

「おぬしがモタモタしておるせいじゃ!」

「シアちゃんが、首輪なんて付けるから！」

俺達は言い争いをしながら、必死に走る。

走る後ろから、橋が消えていく。

「勇者さまー!! もう少しですー!!」

向こう岸で叫ぶ姫の姿がだんだん大きくなってきた。

到着、と思った瞬間、足場が消えた。

とっさに傍らのシアちゃんを姫に投げ渡す。

「あるじ?!」

俺は、やっぱり落ちるのかと思いつつながら重力に身を任せた。

「がふっ!!」

首に衝撃。息が詰まる。

見上げると、俺の首から伸びた縄を腕に絡めているシアちゃんの姿。

姫は、そのシアちゃんを必死で支えている。

「ぐっ、ふぐう……」

手を離すように言おうとするが、息が詰まって声にならない。

縄がシアちゃんの細い腕に食い込んでいる。

何とかしなければと思うのだが、意識がだんだんと暗くなっていく。

素直に落ちると、窒息して死ぬのとどちらが良かったのか。どっちにしても、死ぬんだけどな。

「……さま！ 勇者さま！」

姫が呼ぶ声が聞こえる。

オツサンの声じゃないってことは、死なずに済んだらしい。

後頭部に暖かくて柔らかい感触を感じる。

膝枕かな？

もう少しこのままでもいい。

「うーん、あと5分」

甘える俺を、神様は許してくれなかった。

「寝ぼけるでないわ」

シアちゃんの声と同時に、何か棒状の物で顔面を痛打された。

「乱暴はいけませんわ！」

「この阿呆に現実を教えてやったまでじゃ！」

目を開けると、ひのきの棒を振り上げるシアちゃんと、羽交い絞めにする姫の姿が見えた。

あれ？　じゃあ、この膝枕の持ち主は？

振り向く俺の眼前には、巨大な目と口。

ソレは、真つ赤な色でと弾力性に富んだ身体を持つ生き物。

俺の生涯のライバル、スライムベスの姿だった。

「うおわむ g y c c せ z j p !？」

意味不明の叫びが口をつく。

「その方が、助けてくださいましたの」

姫の言葉に呼応するかのように、奴の身体が揺れ動く。

お、俺はコレを膝枕と間違えたのか？!

中型犬並みの大きさの軟体動物を見やる。

何てことだ……。

よりによつて、ライバルに助けられる日が来ようとは。

「そうか、ありがとうな。……お前、名前はあるのか？」

ひざまずいて視線を合わせて問いかける。

スライムベスは首を振る。

多分、首だろう。正確にはわからないが。

シアちゃんが翻訳してくれる。

「出来れば名付けてほしいと言っておるぞ」

スライムベスだな。

ベスじゃ、安直過ぎるな。

よし、決めた。

「エリザってのはどうだ？」

「安直よのう」「エリザベス、ですか？」

間髪入れず、ふたりが突っ込んでくるが無視。

奴は、満面の笑みを浮かべてうなづく。

常に、笑みを浮かべているような気もするが。

「よしっ！ お前は今日からエリザだ。っと、女の名前付けちまったけど、いいのか？」

「スライムに雌雄は無い。卵で殖えるわけでは無いからの」

どうやって殖えるのかは疑問だったが、問題は無いようだ。

俺達は、固い握手を交わした。

多分、手だろう。伸びてきたし。

「種族を越えた友情ですわね。さすが、勇者さまです」

姫は素直に感心していた。

「今のあるじと、どちらが強いのかのう?」

シアちゃんは4戦目を期待しているようだ。

では、期待に応えるでしょう。

「やるか?」

エリザと目を合わせる。

向こうも戦う気があるらしい。

互いに間合いを取る。

俺はひのきの棒を水平に構える。

エリザも体当たりの姿勢だ。

申し合わせたように走り出す。

と、何かに足を引っ掛ける。

勇者の攻撃。

勇者は何かにつまづいて転んでしまった。

しまった! やられる?!

しかし、同時に攻撃しようと言合いを詰めていたのであろう。

転んだ拍子に、手に持った武器がエリザに直撃した。

会心の一撃。そして、痛恨の一撃。

エリザはひのきの棒の一撃で、俺は地面に顔面を叩き付けた衝撃で、仲良く気絶していた。

こうして、4戦目は引き分けに終わったのだった。

「やはり、こうなるのじゃな……」

目覚めた俺を待っていたのは、シアちゃんの冷たい視線だった。

その視線から逃れるように、エリザと顔を合わす。

「別に、狙ってるわけじゃないんだけどな……」

エリザは同意するように首を振っている、多分。

「運も実力のうち？ 馬鹿な事を言うでない」

そんな事、言ってるのか？

さすが、親友。

俺達はさらに固い友情を誓い合った。

「さよーならー！」

エリザは、俺たちを竜王の城へと案内すると、何も語らず去っていった。

姫は、そんな後ろ姿に手を振っている。

「これで良かったのか？」

シアちゃんが俺に問いかける。

「竜王を倒すために力を貸してくれなんて言えないよ」

「そうじゃな。スライムベスの力を借りたなど自慢にもならぬわ」

遠く見える竜王の城を見上げる。

空にはいつの間にか暗雲が立ち込め、不気味な様相を見せていた。

決戦の時は刻一刻と近付いていた。

第二十五話：死神の騎士

竜王の城へと至る道を歩きながら、ふと考える。

こんな所に住んでいて生活が成り立つのだろうか、と。

王様って事は、身の回りの世話をする侍女とかがいるんだろう。

あのオツサンにすら、侍女が付いていた。

初めて見たときは、てつきり愛人かと思つて聞いてみたら、女性には泣かれるし、オツサンには斬り殺されるしで、最悪だった。

竜の王様だし、やっぱりドラゴンが侍女とかやってんだらうな。

そんな事を考えていたら、いつの間にかふたりとの距離が離れていることに気付いた。

俺は、彼女達に追いつこうと走り出した。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！」

あれ？ 何でここにいるんだ？

気が付くとそこはオツサンの前。

「なあ、オッサン。俺、何で死んだんだ？」

「わしが知るわけが無かるうが」

そりやそーだ。

ひよつとして、魔物の不意打ちでも受けたのか？

それなら、こうしてはいられない！

急いで、戻らないと！

「じゃあ、俺行くから！」

走り出そうとする俺を、オッサンが呼び止める。

「勇者よ、一つだけ教えてくれんか？」

「なんだよ！」

焦って、つい声を荒げてしまった俺に、オッサンが静かに問いかけて来る。

「それは、おぬしの趣味か？」

それ？

オッサンの指先を辿ると、俺の首元を指している。

手をやると、何やら革の感触。

……しまった、首輪を外し忘れていた。

「あ、いや、これは、事情があつてな」

「以前にも着けておったな」

ああ、そういうえば、パルプンテで死んだときも、コレ着けてたっけ。

「あはははは、ま、まあ良いじゃないか」

急いで外そうとするが、焦ってなかなか外れない。

仕方ない。オッサンに外してもらおうか。

「悪い、外してくれ」

「わしは一応、この国の王じゃぞ。……まったく」

文句を言いながらも、オッサンは玉座から降りてくる。

俺は、外しやすいように、中腰の体勢になって、顔を上に向ける。

「む、むう、金具が曲がっておって、なかなか手強い」

苦戦しているようだ。

「もう少し、上げたほうがいいか？」

そう言つて、少し腰を上げた時、背後で扉が開く音がした。

「王様、ご報告したい事が……?! そんな、ひどい……。僕というものがありませんから、

王様と……。失礼します!!」

一方的に、それだけを告げると、門番は走り去っていった。

何のことだ？

オッサンとしぼし顔を見合わせる。
状況を整理してみよう。

ひざまずく俺と、その前に立つオッサン。

俺は首輪をして顔を見上げている。

オッサンはその首輪を持って、俺を見下ろしている。

これは、もしかすると……？

「ちよつと待て!!」

何を勘違いしてるのかは知らんが、それは大きな間違いだ!

ふと、オッサンを見ると、剣を抜いている。

「何をする気だ!?!」

「……口封じをせねばならん」

口封じって、姫と同じ発想かよ?!

……やっぱり、親子なんだな。

しみじみそう思っていると、オッサンは抜き身の剣をこちらに向ける。

えーと、なんで？

「何を怖がっている?　そもそも元の凶を外してやろうとしているのだぞ」

言いながら、オッサンは首輪に手を掛けて、隙間に剣を挿し込もうとする。

「待て待て待て待て！ オツサン、それ、両刃！」

俺の抵抗もむなしく、オツサンは、よりにもよって首の左側に剣を挿し込み、捻る。

「げふ」

一瞬、首が絞まったかと思うと、解放される。

と、何かが噴き出す感覚と同時に身体の方が抜ける。

「おお、スマンスマン。つい、斬ってしまった」

斬ってしまった、じゃねーよ！ ぜってー、ワザとだ！

意識が暗くなると、すぐにクリアになる。

「おお、勇者よ。死んでしまうとは、情けない」

「普通、頸動脈斬られりや死ぬわ！」

しかも、やったのはアンタだ！

だが、オツサンは悪びれることなく、扉へと歩き出す。

「そのような瑣末なことなど、どうでも良い」

人を斬り殺しておいて、瑣末とか言うな！

口を開こうとした俺の首に、冷たい感触が押し当てられる。

「瑣末なこと……だな？」

満面の笑みで静かに恫喝するオツサンに、俺はうなづくことしか出来ない。

仕方なく付いていくと、向こうから侍女が歩いてくる。

「あの娘に聞いてみたら？」

俺の提案に賛同すると、さすがに、剣をおさめて話しかける。

それでも、鬼気迫るオッサンの様子に、侍女は怯えているようだ。

話をぼかして、門番の行方を聞くと、一枚の手紙を差し出してくる。

『一身上の都合で、退職します 門番』

署名も、門番でいいのか、オイ。

「くつくつく、わしから逃げられると思っておるのか？」

オッサンは、にやりと笑い、再び剣を抜くと、駆け出していった。

この国は大丈夫なんだろうか？

それは、とても不安にさせる光景だった。

今更、噂の一つや二つ増えた所で痛くも痒くもない。

第一、あの門番がいなくなるのは、俺としても万々歳だ。

後の始末をオッサンに任せて、俺はルーラを唱えた。

そして、俺が死んだ原因には、竜王の城の上空で気付いた。

城の周りが毒の沼地で覆われている。

姫から離れたせいで、ロトの鎧の浄化作用から外れてしまったらしい。

その姫が、地表で手を振っている。

隣には、同じように見上げているシアちゃんの姿。

なぜだろう？ 睨まれているような気がする。

「ゴメン、いつの間にか死んでた」

地表に降りて、開口一番、俺は謝った。

「あれほど、離れるなど言うたであろうが」

「次は、気をつけてくださいね」

気のせいではなかったようだ。

シアちゃんが、これ以上無いってほど、睨んでくる。

でも、俺としては、姫の方が怖い。

なにせ、笑顔なのだ。

さっきのオッサンの様子を見る限り、この親子は笑顔の方が恐ろしい。

後ろめたい事があるせいかも知れないが。

俺は、海の方こうの王城を眺めながら、あの門番の冥福を祈った。

改めて、竜王の城を見上げる。

結構、大きいな。

やっぱり、最後のボスなんだから、最上階にいるんだろう。

そう思った俺は、思いついたことを口に出してみた。

「なあ、シアちゃん」

「なんじゃ？」

「ここから、ありったけの攻撃呪文を撃ち込んだら、中に入らなくてもいいんじゃない？」

さすがに、竜王が瓦礫に埋まったくらいで死ぬとは思えないが、配下の魔物と戦う必要が無くなるのではないかと思ったのだ。

だが、彼女の反応は芳しくなかった。

「大魔王の時と状況が変わってなければ、奴の居城は地下深くにあらう」

地下の方かよ、面倒くせー。

「さあ、私たちの未来のために、行きましょう、おふたりとも」

姫だけは、妙に前向きだった。

けれど、シアちゃんの顔は緊張に強張っている。

「どうしたの？」

「……何か、嫌な予感がするのじゃ」

そう呟くシアちゃんの手を握る。

「?」

「俺達は強い、だろ?」

俺の言葉にようやく微笑を見せる。

「ふふっ、そうじゃったの」

俺達は、城の中へと足を踏み入れた。

城の中なのに、所々、地面が剥き出しになっている。

何も知らずに入っていたら、ただの廃城だと勘違いしたかもしれない。

先に進むと、青い光の壁があった。

「何だ、コレ?」

触れようとすると、後ろから引つ張られる。

「触ると、死ぬぞ」

シアちゃんがそんな事を言う。

半信半疑の俺を見かねたのか、地面に落ちていた小石を投げ込む。

触れるか触れないかの所で、激しい火花が散って、小石が消滅する。

「うおっ! こんなもん、どうやって通るんだ?!」

「私は、大丈夫みたいですよ」

姫が、壁の中に手を突っ込んでいる。

これも、ロトの鎧の効果のようだが、もしもの事を考えたりはしないんだろうか。と、シアちゃんが呪文を唱え始める。

「トラマナー！」

俺達の身体を、青い光の膜が覆う。

「これで、問題あるまい」

言われた通り、手を触れてみる。

壁のように見えるが、抵抗があるわけでもない。

なにか、不思議な感じだ。

中に入るが、別段変わったことも無い。

視界が真つ青になるんじゃないかと、密かに期待していたんだが。

さらに先に進むと、玉座があった。

シアちゃんは、その後ろに回りこむと、俺のひのきの棒で地面を叩き始める。

しばらくそれを見ていると、ある事に気付いた。

明らかに、ある一点だけ音が響くのだ。

地面を探ると、繋ぎ目がある。

隙間に指を引つ掛け、思い切り持ち上げた。

すると、地下へと続く階段が現われた。

「この先が、竜王の居城か」

「中は、意外と明るいですね」

なにか、魔法的なものでも施されているのだろうか、天井が淡く光っている。さすがに、真昼の様とまでは行かないが、朝日が昇る直前くらいの明るさだ。

目が慣れてくれば、問題は無い。

「あの頃と、さほど変化は無いの。強いて言えば、昔はもう少し明るかったようにも思う」

シアちゃんの言葉に、ご先祖さまに思いをはせる。

「いったい、どんな思いでココを通ったのだろうか。」

「打算だったのか、使命感だったのか。」

シアちゃんの話の聞いていると、前者だったとしか思えないが。

いくつかの階段を下り、地下深くへと潜って行く。

なぜか、ここまで魔物に出会うことは無かった。

通路は大きく、ドラゴンが通っても問題ないほどだ。

けれど、待ち伏せも何も無かった。

そのうち、ちよつとした広間へと辿りつく。

「ふははははははは！ よくぞ、ここまで辿りついたものだな、勇者よ！」
この狭い空間で、その大声は凶器だった。

思わず、耳を塞いでうづくまる。

「うるさいわー！」

シアちゃんが、反射的に炎を放つ。

メラゾーマが声を出した対象を炎で包み込む。

「やったか!？」

無意識に声を上げる。

しかし、炎が収まった先には、先ほどと変わらない奴の姿。

「くくく、そのような炎が、この死神の騎士に効くとも思ったのか？」

姿を現したのは、巨大な鎧姿の魔物。

死神の騎士と名乗ったそいつは、悪魔の騎士に酷似していた。

「悪魔の騎士か？」

俺の呟きに、奴が反応する。

「違う！ 死神の騎士だ！」

「どこがどう違うんだよ」

「勇者さま、良く見て下さい。赤くなっています」

確かに、赤くなっている。

でも、この薄闇の中では赤も黒も区別がつかない。

「そんなもん、わかるか！」

「おのれ、勇者め。我が強さを見て、驚くがいいわ！」

今、戦いの火蓋が切って落とされた。

第二十六話：口卜の劍

全身がズキズキと痛む。

空を見上げると、ぽっかりと空いた穴から薄明かりが差し込んでいる。

「あるじ、ケガは無いか？」

上から、少女の声が降ってくる。

「……ああ」

懐から薬草を一枚取り出し、口に含む。

ゆつくりと痛みが引いていく。

「あるじ？」

心配そうにこちらを覗き込む彼女に、もう一度大きく返事をする。

「こつちは大丈夫！ それより、そつちは？」

「こちらも問題は無い。奴は、王女が相手しておる」

その言葉通り、何度かの衝撃と共に埃が舞い落ち、劍戟が鳴り響く。

辺りを見回すが、上の階層とは違い、闇が濃い。

搜索しなければ、上へ戻ることも出来そうに無い。

「こっちはこっちで何とか上に戻る道を探してみる。だから、シアちゃんは姫を……」
「皆まで言うな。こちらは任せるが良い。それよりも、早く戻らねば、わらわ達だけで竜王まで倒してしまうぞ」

シアちゃんはからかうようにそう言い、頭を引つ込める。

姫の援護に戻ったのだろう、衝撃音が更に大きくなった。

『王女よ、そのまま抑えておけ！　くらえ、ベギラゴン！』

天井が震える。

『ぐうっ、き、貴様、仲間諸共、我を消そうとは。正気か!？』

『ちっ、外したか!』

『……アリシアさま、今、私を標的にしていませんでしたか?』

『気のせいに決まっておろう?』

『そうでしたか?』

『そうじゃ』

一瞬の沈黙の後、再び衝撃音と死神の騎士の悲鳴が響き始める。

早く戻らないと、別の意味で危ない。

俺は、たいまつに火を点し、歩き出した。

そもそも俺だけが下の階層に落ちてしまったのには理由がある。

まあ、俺としてはごくありふれた理由だ。

戦闘が始まって、一歩目で落とし穴にはまったのだ。

普通は運が悪いと嘆くところだろう。

だが、この時ばかりは神に感謝した。

何しろ、目の前に巨大な斧が迫ってたからだ。

やっぱり、魔法使いが前衛に回るもんじゃ無いな。

いや、死んでもオツサンの所に戻るだけなんだが、一人じゃバリアがくぐれないんだね。

今、初めて気が付いた。

そうこうしているうちに、壁にたどり着く。

壁に沿って進むと、通路がある。

壁に目印を書いて、部屋の中をグルツと回ってみたが、通路はこの一本だけのようだ。

しばらく考えてみたが、天井の揺れがますます激しくなる。

崩れるかもしれない、そう頭に浮かぶと同時に通路に飛び込む。

なるべく早く抜け出すべきだな。

圧死の経験はさすがにしたくない。

更に歩くと、道が二又に分かれている。

俺はいかづちの杖を真ん中に立て、倒れた方向に進もうと考えた。

右か左か、どっちだ！

杖は、真正面に倒れた。

まっすぐ進めって事か？

さすがに腹が立つて、正面の壁を蹴りつけると、壁が崩れて、通路が現れた。

通路の先は、ほんのりと光っている。

俺は、光に向かって走り出した。

光の正体は、得体の知れない魔法陣だった。

ほのかに明滅する不可思議な円の中央には、鞘におさまった劍が刺さっている。

これもロトの遺物かも知れない。

そう思った俺は鞘ごと劍を引き抜いた。

思ったよりも軽い。

劍を鞘から抜き、刃を確かめる。

長い間、武器屋に勤めていたからこそ分かる。

これは、名剣と呼んでもいい。

こいつはとんでもない剣だ。

もし店屋に見せても、こいつの値打ちはわからないだろう。

一応、俺にも装備は出来るようだ。

試してみるか。

剣を上段で構え、目の前の壁めがけて思い切り振り下ろす。

抵抗は無かったが、壁にはまっすぐにキズが付いている。

剣術のけの字も知らない俺が使ってもこの威力。

姫に持たせたら、どれほどの物だろう。

〇〇に刃物という言葉が頭に浮かんだが、必死に振り払う。

再び元の通路に戻ると、上を目指して歩きだした。

辺りは惨憺たる有様だった。

壁や床には大穴が開き、所々が崩れている。

死闘が繰り広げられただろう事は容易に予想がつく。

そして、広間の中央には打ち捨てられたように転がる死神の騎士。

それを挟むように、ふたりの少女が肩で息をするように立っている。

俺が来たことに、まったく気付いてないようだ。

ふと、死神の騎士と目が合った。

死神の騎士は、仲間になりたそうにこちらを見ている。

仲間にしてあげますか？ はい いいえ 止めを刺す ⇒目を背ける

勇者は、知らないふりをした。

背後で断末魔の叫びが響いた。

死神の騎士が倒れても、戦闘は終わらない。

すでに、目的と手段が入れ替わっているようだ。

さすがに、割って入る勇気は無いので、ふたりの息が上がるのを待って、仲裁に入る。

「勇者さま、ご無事だったのですね」

「おぬしがグズグズしておるから、倒してしまっただけではないか」

「ああ……、うん、大変だったみたいだね。すごい衝撃が伝わってきたよ」

主に、本来の戦闘終了後に。

まあ、事実を知っている奴の口は封じたし、問題は無いだろう。

しかし、あれだな、姫とシアちゃんって互角なんだな。

姫は剣に秀で、シアちゃんは魔法に秀でる。

うまくバランスが取れているようだ。
ますます、俺の立場が無くなって来る。

どうしたものか。

「よくぞ、我を倒した。ロトの血を引く者達よ」

大破した鎧の残骸から、黒い影が抜け出してくる。

最初に見た時より、随分小さくなっているようだ。

それほどダメージを受けたということだろう。

しかし、コイツもある意味、不死身だよな。

だが、ソレの出現に気付いているのは、俺一人。

少女達は、俺の持ち帰った剣に釘付けになっている。

「これは、王者の剣ではないか?！」

やはり、勇者ロトの剣らしい。

シアちゃんの話では、力が封印されているらしいのだが。

例の魔法陣の影響か?

だとしても名剣と呼んでもおかしくない代物だ。

「本当に、私が持っていてよろしいのですか?！」

姫の声には、嬉しさが滲み出ている。

一流の剣士である彼女にとって、これほどの剣を扱えるのは誇らしい事であるようだ。

嬉しそうに、型を繰り返している。

「コ、コラ！ 乱暴に扱うでないわ！」

アルスの剣が姫の手におさまっているのが気に入らないのか、シアちゃんがしきりに注意する。

「くやしかったら、取り返してみてはいかがですか？」

姫が挑発するように、剣をシアちゃんの頭上に掲げる。

シアちゃんは、手を伸ばすが、ギリギリの所で届かない。

実に微笑ましい光景だが、彼女たちの場合、殺し合いに発展する可能性もあるので気が抜けない。

まあ、俺の目の前ではそんな事も無いだろうし、ああ見えて、結構仲が良いので放っておこう。

「で、どこまで話したっけ？」

無視されて、目の前で縮こまっている怪しい影に話し掛ける。

「ふ……ふふふ……ふはははは！ 我を倒した所で、貴様らが竜王様に勝てると思ったら

大間違いだ！」

うんうん、それで。

「竜王様は、我などが足下にも及ばぬほどに強い！　今の疲れきった貴様らでは、手も足も出まい！」

まあ、そうだろうね。

「貴様らが地面に這いつくばる様が目に浮かぶようだ。さあ、進むが良い。地獄への一歩を——」

未だ話し続ける影を無視して、じゃれ合うふたりに声を掛ける。

「じゃあ、一応ここまで来たし、一度戻ってまた来ようか」

「うむ、そうじゃな。ずいぶん魔力も使ってしまった」

シアちゃんはよほど悔しかったのか、目に涙を浮かべながら、俺の言葉に同意する。

「仮にも、王を名乗る者に会うのですから、身だしなみを整えてからにしませんと」

姫は反対に楽しそうだ。

「えっ？　ちよつと、おい」

影が呼び止めるが、当然無視。

コイツもさすがに一晩では復活も出来まい。

「じゃあ、シアちゃん。頼むよ」

「うむ、リレミト！」

こうして、俺達は再び地上へと帰還したのであった。

第二十七話：リバスト

一夜明けて、再び竜王の城へ。

相変わらず魔物の気配の無い地下道を歩きながら、俺は姫に尋ねた。

「そういえば、姫はどうやってさらわれたんですか？」

常々疑問に思っていた。

正直言つて、彼女の強さは並じゃない。

なにせ、元魔王であるシアちゃんと互角に戦うほどなのだ。

よほどの数の魔物で襲撃をかけたとしか思えない。

けれど、城下町に住んでいた俺は、そんな派手な戦いの覚えが無い。

それにオッサンいわく、何時の間にかいなくなっていたらしい。

そして、部屋には竜王からの手紙が残されていたのだそうだ。

「私も、その瞬間は覚えておりません。ただ——」

気付いたときには、既に巨大な漆黒のドラゴンにつかまれて、空を飛んでいたらしい。

けれど、さすが姫というべきか、果敢にも攻撃を仕掛けたそうだ。

「武器になるような物は、何一つ持っておらず、幾度か雷撃の呪文を放ったのですが——」

目に見える効果が表れないうちに、呪文の使いすぎで気を失い、気付いたときにはあの部屋に閉じこめられていたとの事。

姫が気を失うほどの、ライデインの連発に耐える魔物。

そんな奴がいるとは思えないが、姫がわざわざ嘘をつく必要は無いだろう。

「おそろく、ソレは竜王であろうな」

シアちゃんの言葉に、俺は絶句する。

今から、その竜王と戦いに行くのだ。

正直、逃げ出したい気分だった。

やがて、死神の騎士が死闘を繰り広げた広間へと辿りつく。

昨日の事を思い出すと、背筋に悪寒が走る。

さつさと通り抜けようとした俺達の前に、鎧姿の魔物が立ちはだかった。

「(ハハ)は通さぬー」

声は死神の騎士に酷似しているが、余りの変わりように涙がこみ上げて来そうになる。

「その姿をしておると、初めて会った頃を思い出すのう、サイモン?」

シアちゃんが、目の前で通せんぼをする『さまようよろい』に話し掛ける。

サイモンが本名らしい。

「くつ、貴様等のせいで元の身体に戻ってしまったのだ! どうしてくれる?!」

コイツも、さすがに一晩でパワーアップは出来なかつたようだ。

しかし、昨日あれだけの目に遭いながら、再び彼女達の前に立ちはだかるその姿にある種の感動を覚えた俺は、ある提案を持ちかけた。

「なあ、ここらで停戦というわけにはいかないか?」

「あるじ、何を言っておる?」

「勇者さま?」

突然の俺の申し出に目を白黒させるふたり。

まあ、シアちゃんの目は紅白なんだが。

「そのような事が信じられると思うのか?」

当然、奴の口からも真偽を問う言葉が発せられる。

何となくとはいえ、口に出してしまったからにはもう後には引けない。

竜王の側近であるコイツをこちら側に引き入れることが出来れば、竜王と戦わなくても済むかもしれない。

そんな打算が俺の思考を押し進める。

「そもそも俺達が竜王を倒すはめになったのは、姫をさらったからだ。そして、事態を重く見たオツサ……国王が、勇者である俺を呼び寄せた」

ここまではわかるな、と皆の顔を見回す。

そして、理解が広がるのを確認して続きを話す。

「姫を無事に取り戻した今、竜王がこれ以上何もしないと約束するなら、俺達が戦う理由は無い」

「相変わらず、おぬしは甘いろう」

話し終わった俺に、シアちゃんがそう声を掛けてくる。

「甘いのは嫌か？」

問いかける俺に、シアちゃんは微笑む。

「嫌ではない。そういうおぬしじゃからこそ、わらわもここにおるのじゃ」

シアちゃんも元々は魔物退治の依頼を受けて知り合っただったな。

今の竜王とほぼ同じ立場だったわけだ。

当然、賛成に回ってくれる。

「私は、勇者さまのお考えに口を挟むつもりはございません。ただし、絶対に、未来永劫、悪事を働かないと約束してもらいます」

さらわれた当事者である姫が賛成してくれとは思わなかった。

でも、心の底から賛成しているわけではないようだ。

ギュツと握られた拳が、言葉に秘められた感情を表している。

俺は彼女の手を取り、その拳を両手で包む。

「ありがとう、姫」

俺の手の中で、姫の拳はゆつくりと解け、互いの手のひらを合わせる格好になる。

「……こちらこそ、ありがとうございませす、勇者さま」

小さな声でそんな言葉が聞こえた。

俺は、小さくうなずいて手を離した。

サイモンが俺達の姿に何を見たかはわからない。

だが、扉を開き、自分の後について来いと言う。

どこに行くのかと問う俺に、こう言った。

「そういう事なら適任者がいる。今は、竜王様の命により幽閉されているが、あのお方なら、貴様等の力になれるやもしれん」

幽閉やお方など、気になる単語もあったが、会えばわかると思い、おとなしくついて行くことにした。

やがて、壁にいくつもの扉が並ぶ通路にやって来た。

その一番奥の扉の前に立ち、おもむろに扉を叩く。

「若様、客人を連れて参りました」

若様？ 一体、何者だ？

「入れ」

若い男の声で返事がする。

サイモンが扉を開けると、部屋の中には、椅子に座ったままの青年がいた。

「こちらは、竜王様のご子息、リバスト様だ。粗相のないようにせよ」

「ようこそ、ご客人。何も無い所だが、ゆっくりされるが良い」

柔らかな微笑で客を迎え入れる青年の正体に、俺達は言葉を失った。

「その節は、本当に迷惑を掛けた。父に代わり、私が謝罪する。どうか赦して欲しい」

自己紹介が終わり、リバストが姫に向かって頭を下げている。

さすがに、面と向かって謝られるのは予想していなかったらしく、珍しく慌てた様子を見せる姫。

俺とシアちゃんは、皇子自らが入れてくれたお茶を飲みながら、それを眺めている。

「なんか、シアちゃんやリバストやサイモンを見てると、魔物に対するイメージが変わる

よなあ」

「どういう意味じゃ?」

アレと一緒にするなと、不機嫌な声で言う。

「いや、悪い意味じゃなくてさ。どこか人間臭いというか」

俺の言葉に、意外な所から答えが返ってくる。

「それは仕方あるまい。我とアリシアは元々は人間であつたし、若様にも半分は人間の血が流れておるのだからな」

「だから、貴様と一緒にするなと言っておろうが!」

サイモンの言葉に反論するシアちゃん。

だが、それよりも気になる言葉があつた。

「じゃあ、リバストの母親って……」

「いかにも。私の母は、真正正銘の人間だ」

謝罪は終わったのだろう。

リバストが姫の手をとり、歩いてくる。

椅子を引き、姫を座らせると、自分も手近な椅子に座り、話し始める。

優雅な所作を見せるリバストに、少々腹立たしいものを感じながらも、その話を聞く

ことにした。

「私の母は、優れた戦士だった。そして、自分の腕を試すために、竜王に戦いを挑んだ」

物語としてはよく聞く話だ。

そして幾度と無く戦う間に、恋におち、子どもが生まれた。

それにしても、この国の女性というのは、強いのが当たり前なのだろうか？

そのわりには、女性の兵士に出会った事は無いのだが。

「お母様は、今？」

姫の問い掛けに、リバストは首を振る。

「死んだ。もう、3年も前のことだ」

謝る姫に、気にかけることは無いと笑う皇子。

そして、俺たちに問いかける。

「停戦の意思があるというのは、本当なのか？」

「ああ」

根拠は無いが、力強くなさく俺。

しばし見詰め合い、皇子は口を開いた。

「ならば、条件がある」

思わず身を乗り出す俺に、青年は静かに告げた。

「年上の綺麗なお姉さんを紹介してくれ」

「わかった」

間髪入れずに了承した俺達を、激しい炎が包み込んだ。

「ごめんなさい。調子に乗ってました」

声を揃えて土下座する、俺とリバスト。

そんな俺達を冷ややかに見下ろす、シアちゃんと姫。

サイモンは、惨劇の一夜を思い出したのか、頭を抱えてガタガタと震えている。

「それで、最期に言い残すことはあるか？」

その言葉におそるおそる手を挙げる、竜王の息子リバスト18才。

「何じゃ？」

「巨乳万歳」

再び炎に包まれた、我が同志。

スゲーよ、今のお前は輝いてるぞ、友よ。

女性の好みは相容れないが、お前の生き方は俺に道を指し示してくれた。

その漢気に俺も殉じるとしよう。

そして、まっすぐに手を挙げる、俺・勇者20才。

「勇者さまも何か？」

「ふくらみかけ最高」

室内に雷鳴が轟いた。

すっかり仲良くなった俺とリバストは意気投合し、四方山話に花を咲かせる。

女性陣の相手は、サイモンに任せた。

ぎすぎすした雰囲気、時折泣きそうな雰囲気、助けを求めてくるが、完全無視。

「悲しい事に、この城に居る限り女性との出会いなど、全く無いのだ」

そりやそーだろーな。

いるのは、マニアな鎧騎士とドラゴンだけだもんな。

普通の女性がここまで来るとは、まずありえない。

普通じゃない女性なら、来る可能性はあるかもしれないが。

そう思いながら、気分を損ねてしまった愛する少女達を見やる。

「何か？」「何じゃ？」

「いや、怒ってる顔も可愛いなと思って」

カップが2つ飛んでくる。

甘んじてそれを顔面で受け止めると、派手に流血する。

「大丈夫なのか？」

「ああ、俺は彼女達の事を、心の底から愛してるから」

俺の言葉に、ふたりはあからさまに動揺する。

「そ、そのような事を人前で言うなどあれほど……」

「勇者さまが、私のことを愛してる、だなんて……」

すかさず真つ白な光が俺を癒し、ハンカチが投げ付けられる。

その様子を眺めていたりバストは、溜息を吐いた。

「女性と付き合うのも、なかなか大変なものなのだな」

「人によると思うぞ」

どちらか片方だけなら楽だったかもしれないが、ふたりとも愛してしまったんだから仕方が無い。

「本当に、年上で、包容力のある、綺麗なお姉さんを紹介してくれるのか？」

何気に一つ項目が増えているが、問題は無いだろう。

俺は、呪文屋のお姉さんを頭の中に思い描いた。

年上なのは、間違いない。(自称23才だ)

包容力もあると言えなくも無い。(15ゴールドで全コースを受けさせてくれた)

一応、綺麗な部類には入るだろう。(せめて、後10才若ければ)

「約束は守る。ただ、巨乳じゃないぞ」

「……その辺りは、妥協しよう」

契約が成立した。

「母が死んでしばらく経った頃、父の様子がおかしくなった」

最初は、愛する者を失った衝撃が大きかったせいだと思った。

だが、だんだん理性を失い、粗暴な態度が表れ始め、配下の魔物達は次々と去っていったのだそう。

ここまで魔物がいなかったのは、そのせいらしい。

そして、あるとき事件が起こった。

竜王による、姫の誘拐事件のことだ。

夕暮れ時に飛び去った竜王は、戻った時には一人の女性を連れていた。

だが、竜王はその時既に、事切れていたのだと言う。

俺達は思わず顔を見合わせた。

姫のライデインは効いていたのだ。

そして、それは竜王の命を奪っていた。

まさに、衝撃の事実の発覚であった。

「あの時、確かに父は死んでいた。だが、王女をあの部屋に閉じ込めて戻ってくると、死んだはずの父が居た」

「では、あの玉座におられる竜王様は何者だと言うんです?！」

突然の告白に恐慌状態に陥ったサイモンがリバストに詰め寄る。

「というか、姫をあそこに監禁したのはお前か、リバスト。」

「少なくとも、父ではない。別の何かだ」

そして、俺達は依頼された。

「父の姿を奪った魔物を倒すのを手伝って欲しい」と。

事態は思わぬ方向に進み始めていた。

第二十八話：魔王

竜王の間への扉を開く。

玉座には、一人の男が座っていた。

ローブを着込み、顔はフードで覆われている。

あれが竜王なのか？

「不甲斐ないものだな、我が息子よ」

途轍もない威圧感と共に、しわがれた声がりバストに向かう。

「黙れ！ 父の名を騙る魔物め！」

青年の声に、偽竜王はただ笑うのみ。

「我が生け贄の祭壇へようこそ、勇者殿」

「出来れば、こんな所まで来たくなかったんだけどな」

俺の返事に、偽竜王は腹を抱えて笑う。

「ふははははっ！ 今回の勇者はユーモアのセンスがあるようだ」

そんなにおかしい事を言っただけは無いんだが。

それよりも『今回』？

俺以外の勇者に会ったことがあるのか？

「アリシアさま、どうされました？」

姫の声で、シアちゃんの様子がおかしいことに気付いた。

全身は震え、元々白かった顔がさらに白くなっている。

「ま、まさか……?! 何故、奴がここに……?!」

シアちゃんが声を上げる。

偽竜王はそれに気付いたのか、彼女に顔を向けた。

それと同時に、彼女が叫ぶ。

「何故、何故貴様がここにいる!?! 大魔王ゾーマよ!」

何……?!

今、何て……?!

「ふはははははは! どこかで見た顔だと思えば、勇者と共にあった魔法使いではないか」

シアちゃんの事を知ってる？

じゃあ、本当に、勇者口トの伝説の……?!

「我が復活を祝いに来たか？ それとも、勇者の敵討ちにでも来たのか？」

「敵討ち……? 何の話じゃ？」

シアちゃんの返答に、魔王は狂ったように笑い続ける。

「な、なにがおかしい!」

「知らぬのか? 勇者アルスをこの世から消し去ったのが、このわしだという事を」

「な………に?」

魔王が語った言葉は衝撃をもたらした。

世界を救った一人の勇者の物語。

この世界を覆い尽くした闇を打ち払い、光をもたらした救世主。闇に堕ちたかつての仲間に光を与え、そして姿を消した。

彼の名は、アルスと言った。

だが、彼の話はここで終わりではなかった。

闇は滅びたわけではなかったのだ。

妻子のもとを、仲間のもとを去った勇者は、闇の復活を知った。どちらが先だったのかは、わからない。

闇の復活に気付いたのが先だったのかもしれない。

ただ言える事は、彼はたった一人で戦いを挑んだと言う事だ。

長きにわたったその戦いは、結局の所、引き分けに終わった。

魔王は力を失い、復活までの長き眠りを余儀なくされた。
そして、勇者は……。

「奴は、このわしが直々に次元の狭間へと放り込んでやったわ。光も無く、時の流れも無い、永劫の闇へとない！」

仲間に頼らず、単身魔王に戦いを挑んだ勇者。

決して、富や名誉のためではない。

家族のために、その選択肢を選んだんだ。

俺は、アルスを誇りに思う。

そんな男がご先祖さまであることを。

「そんな、そんなこと。わらわは、なにも……」

シアちゃんは呆然としている。

無理も無い。

彼女の知っているアルスは、妻子を捨て、他の女の所に行ったはずなのだ。
こんなところで、魔王と戦っていたとは考えもしなかったに違いない。

俺は、彼女を強く抱きしめる。

心がどこかへ行ってしまうないように。

「竜王様は？　竜王様は今どこにおられる？」

サイモンが、魔王に尋ねる。

「これは、異な事を。目の前におるではないか」

「貴様、まだ父を愚弄するか！」

リバストの叫びに、魔王はローブを翻す。

「少なくとも、肉体はここにある。魂は、我が糧になつてもらつたがな」

言葉と同時に、魔王の身体が闇に包まれる。

闇は凝集し、巨大な何かを形成していく。

凶悪な爪を生やした手足。

醜悪な翼。

そして、漆黒の鱗に覆われた巨体。

魔王と化した竜王の降臨だった。

「我こそは、全てを滅ぼす者。再びこの世を絶望へと包んでくれよう」

魔王の言葉が絶望を突きつける。

だが、そんな物がどうだというんだ。

俺達は、絶対に負けない。

「ならば、俺達はお前を滅ぼす。二度と貴様が復活できないようにな」

俺の言葉に、仲間達が声を上げる。

「父上の仇！」 「竜王様の仇を！」

「勇者さま、行きましよう」

「あるじ、もう大丈夫じゃ。こんな事ではアルスに笑われてしまうわ」

笑顔を見せるシアちゃんに、姫に、リバストに、サイモンに声を掛ける。

「俺は勇者だけど、正直言って、何の力も無い。だから、皆の力を貸してほしい」

「何を今更……」

シアちゃんが呆れたように言う。

「私の力は勇者さまのために」

姫が、忠誠を誓う騎士のように、剣を掲げる。

「友に力を貸すのは当然のこと」

リバストがそういつて笑う。

「仕方が無い。手伝ってやろう」

サイモンはどうでもいい。

最後の戦いが始まった。

先制攻撃は、魔王からだった。

大きく息を吸い込み、灼熱の炎を吐き出す。

俺達を包むかと思われた一瞬、リバストの防御呪文が飛ぶ。

「フバーハ！」

光の幕に散らされる炎。

すかさず、シアちゃんの呪文。

「メラゾーマー！」

炎が魔王に襲い掛かる。

しかし、炎は黒いもやのような物にかき消され届かない。

姫の剣が一閃する。

鱗が数枚はじけ飛び一筋の傷を与える。

だが、それだけだった。

「いかづちよー！」

杖から魔力を放つが、鱗の表面で弾けるだけ。

何の痛痒も感じていないようだった。

サイモンは身を守っている。

何度か攻撃を繰り返したが、奴にそれほどのダメージを与えることが出来ない。

唯一、目に見える効果があったのは、姫の持ったロトの剣だけ。

その傷も、見る見るうちに癒えていく。

他にわかった事といえ、黒いもやは連続で使用できないことくらいだろうか。あの肉体は既に死んでいる。

魔王は、それに乗り移っているだけだ。

ならば、どうする？

周りを見渡した俺は、ある事に気付いた。

そういえば、似たような奴がこちらにもいる事に。

身を守るだけで、攻撃に参加していないサイモンを呼ぶ。

そして、望む回答を得た俺は、行動に移すことにした。

シアちゃんに杖を渡し、サイモンに攻撃力上昇呪文バイキルトを掛けてもらう。いぶかしげな表情をしていたが、作戦だと言うと従ってくれた。

「シアちゃんトリバストは奴の気を引いてくれ。姫は、合図と同時に電撃呪文を」
皆に指示を出し、サイモンに剣を構えさせる。

その剣に少し細工をしつつタイミングを図る。

姫はというと、目を瞑り両手を掲げ、呪文を唱え始めている。

「シアちゃん！ リバスト！ 何とか隙を作ってくれ！」

ふたりに声を掛けて、俺も呪文を唱え始める。

「いかづちよー！」

杖から放った魔力が、黒いもやにかき消される。

それと同時に、呪文が解放される。

「イオナズン！」

相変わらず効いた様子は無いが、爆発の衝撃にバランスを崩す魔王。

そこへリバストが追い討ちを掛ける。

「バギクロス！」

風の刃が魔王を押し倒す。

今だ！

俺は、サイモンの背中に両手をつき、力ある言葉を解き放つ。

「バシルーラー！」

サイモンは、剣を構えたまま矢のように飛び出し、魔王の右目に突き刺さった。

「姫！」

俺の声に、姫は目を開くと両手を振り下ろす。

「ギガデイン！」

幾条もの電撃が、サイモンを避雷針代わりに集束していく。

「があああああ!!」

断末魔の叫びを上げ、魔王は崩れ落ちる。

「よー」

思わず拳を握る俺に衝撃が襲い掛かる。

頭を殴られたような激痛に、しばし悶える。

顔を上げると、何故か激怒しているシアちゃんの姿。

杖を振り下ろしている所を見ると、犯人は彼女のようだ。

「よし、では無い！　いかに敵であったとはいえ、他人を犠牲にしてまで勝利を得ようとは、見損なったわ！」

目に涙を溜めたまま、怒っている。

どうも、サイモンを攻撃に使ったのが許せないらしい。

俺は、シアちゃんを無視して、その背後に声を掛ける。

「良かったな、サイモン。そんなに嫌われてたわけじゃないみたいだぞ」

「うむ。勘違いとはいえ、我の死に涙するとは。やはり、我のことを少なからず想っておるようだな」

背後から聞こえるサイモンの声に、呆然とするシアちゃん。

振り向いて、黒い影がそこにいるのに気付くと、烈火のごとく怒り出す。

「生きておるなら、生きておるとさっさと言わんかー！」

声と同時に炎が飛ぶ。

「うおっ、殺す気か?!」

杖を振り回して影を殴りつけるシアちゃんを、姫が羽交い絞めにして取り押さえる。

一応、照れ隠しなんだよな、アレ。

しかし、物理攻撃が効くのか、あの影。

ふと、頭の痛みが軽くなる。

気がつくのと、リバストがホイミを掛けてくれている。

「大したものだ。一体、どういう原理なんだ?」

魔王が倒れた理由を聞きたいらしい。

仕方ない。解説するとしよう。

「あいつがどうやってあの身体を動かしているのか、それが疑問だった」

だから、俺は似たような構造であるサイモンに聞いた。

すると、こう答えた。

鎧を動かすには、隅々まで自分の身体を詰め込まなければならぬと。

それは、中がからんだからだ。

現に死神の騎士の中に入っていたサイモンはダメージを受けたせいで身体が縮み、さ

まようよろいへと姿を変えている。

ならば、それが生物だったときは？

生物の身体には、神経や筋肉が詰まっている。

どうやって、その肉体を動かすのかを考えた時、ある答えに行き着いた。

「そうか、脳だ」

リバストが正解に辿りつく。

その通り。

脳を破壊するために、眼球を狙ったんだ。

そして、サイモンを使った理由はというと。

一番、いなくなっても痛くなさそうだったからなんだけど、これは黙っておこう。

「そして、電撃で止めをさす。もつとも、まさかギガデインとは思わなかったけど」

これは、嬉しい誤算だった。

……実は、念の為にもう一つ細工してるんだけどな。

解説が終わった頃に、再び魔王の声が響く。

「くくく、まさか、そのような方法があったとはな。だが、この程度の攻撃でこのわしが

倒れると思ったのか？」

起き上がろうとする魔王に、皆の顔が強張る。

「倒れるさ。その肉体はもう終わりだ」

俺がその声をかけると同時に、魔王が操っていた竜王の肉体が崩れ出す。

「何?! 貴様、一体何をした?」

「何って、毒針を仕込んだのさ。サイモンの剣にな」

急所に打ち込めば、一撃で生物を死に至らしめる武器。

脳に毒を打ち込まれては、たとえ竜王であろうと無事で済むはずが無い。

グッバイ、俺の980ゴールド。

だが、魔王と道連れだ。

お前も本望だろう?

旅の初めから、冒険を共にしてきた武器に別れを告げる。

「おのれ、おのれおのれ! まさか、このわしが、人間などに倒されようとは! だが、

ただでは倒れん!」

嫌な予感が頭をよぎる。

「シアちゃん! リレミトを!」

辺りが爆音に包まれた。

第二十九話：決戦

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

死んだのか、俺？

このタイミングで死んだということは……？

皆は?!

皆は無事なのか?!

「勇者よ、一体何が起こっておる？」

「悪い！ オツサン、今はそれどころじゃない！」

俺は、扉に向かって走り出した。

扉に手を掛けようとしたその時、向こうから扉が開いた。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは情けない！」

また、死んだのか？

しかも、扉に激突して……。

と、それよりも！

再び走り出そうとする俺を、オツサンが呼び止める。

「待たんか！ 先程、兵士より報告があつた」

さつき俺を殺したのは、そいつか。

「竜王の城が崩壊し、闇が噴き出しておるそうだ」

オツサンと共に、屋上へと出る。

海の方こうに見えていたはずの城が跡形も無い。

空は闇に閉ざされ、太陽の光も届かない。

それなのに、夜よりも深い闇の塊が城のあつた場所にわだかまっている。

おそらく、アレが魔王の本体なのだろう。

皆は、皆は無事なのか？

シアちゃん、姫、リバスト、ついでにサイモン。

ん？ 今、何か光つたような？

「オツサン！ 今、何か光らなかつたか？」

傍らのオツサンに尋ねる。

「何も……。ん？ いや、何か見えるな」

オツサンが話している間にも、光が瞬く。

あれは、呪文の光だ！

皆、生きてるんだ！

そして、戦っている。

「オッサン！　ここから先は何が起こるかわからない。街の人間を連れて、出来るだけ遠くへ避難してくれ」

「おぬしはどうする？」

「もちろん、アレと戦うのさ」

指差す方向には、黒い影。

オッサンは、一度だけソレを見て、俺の方へ顔を向ける。

「勝てるのか？」

娘の事が気になっっているだろうに、一言も口に出さず、そんな事を言う。

だから、俺もそれに応える。

「勝つさ。俺達は強いからな」

呪文を唱える。

そして、仲間達のもとへと飛んだ。

光が見える。

小さなソレは、戦場を照らし、仲間達の無事を教えてくれる。

あれは、シアちゃんの創った魔法の光だろう。

果敢に闇の塊に斬りつける姫の姿が見える。

絶え間なく援護に走るリバストの姿も。

そして、それに追従するサイモンの影。

シアちゃんは、少し離れたところから呪文で攻撃している。

城から見えたのは、この光だったのだろう。

「イオナズン！」

一際大きな爆発が辺りを揺るがす。

心なしか闇が削り取られたかのように見える。

俺は、さらに後方に降り立つと、彼女に向かって走った。

「シアちゃん！」

俺の声が聞こえたのか、彼女が振り向く。

「遅いぞ、あるじ！」

声を荒げる彼女に走りより、強く抱きしめる。

「な、何をするか！」

「良かった、皆無事で、本当に良かった」

彼女の小さな身体は、腕の中にすっぽりと納まる。

その感触に、涙があふれそうになる。

「あるじ……」

そんな俺の様子に、彼女はそつと身体をあずけてくる。

くちびるが触れ合おうとしていたその時。

「アリシアさまばかり、ずるいですわー！」

疾風が飛び込んできた。

姫は、俺とシアちゃんを引き剥がすと、俺の腕の中に入ってくる。

「さあ、続きを……」

「邪魔をするでないわー！」

また、喧嘩モードに入ってしまった。

「さすがに、戦闘中にぞ、そういうコトをするのは、ちょっと——」

女性に免疫が無いリバストは、口にするのも照れるのか、微妙にどもりながら俺を論ずる。

「おのれ、勇者め。見せつけおって」

サイモンは妙に反抗的だ。

話によると、彼女いない暦300年らしい。

さもありなん。

「勇者よ、これで世界は闇に堕ちる。貴様等のやった事は、全て無駄に終わるのだ」
相手をしてくれない俺達に、しびれを切らしたのか、突然魔王が語り出す。

「全ての生命を生贄にし、この世を絶望で覆い尽くしてやろう！」

今更、そんな脅し文句で俺達が引き下がるとでも思ってたのか？

俺は、シアちゃんと姫を抱き寄せ、魔王に告げる。

「悪いが、俺達の未来はもう決まっている。俺は彼女達と、光あふれる世界で生き続ける
！」

「勇者さま……」

「あるじ……」

リバストとサイモンも、追従するように叫ぶ。

「まだ見ぬ、年上のお姉さんのために！」

「女日照りにピリオドをうつために！」

いや、お前ら、さすがにそれはどーかと思うぞ。

「滅びこそ、我が喜び。死に行く者こそ美しい。さあ、我が闇の中で息絶えるが良い」
世界を天秤にかけた、最後の戦いが始まった。

リバストと姫とシアちゃんの呪文が乱れ飛ぶ。
サイモンは身を守っている。

「おい、コラ。攻撃くらいしろよ、サイモン」

「はっ、貴様に言われたくないわ。大体、この姿で攻撃方法があるなら、鎧を纏う必要もあるまいが」

くっ、ムカつくが、確かにその通りだ。

俺の攻撃力の無さは身にしみてわかつている。

やりようが無くも無いが、一度死んでやり直しになったからな。

魔力が根本的に足りない。

ちびちびとマホトラで削るとするか。

戦闘が始まってから一体どれだけの時間が流れたのか。

辺りは闇に包まれ、今が昼なのか夜なのかさえ定かではない。

くそっ、あれからどれだけ攻撃したと思っている！

いい加減に倒れやがれ！

「その程度でわしに勝とうとは、笑わせてくれる」

前線で動いていたリバストと姫は、完全に息が上がってしまっている。

後方で支援していたシアちゃんさえも、肩で息をしているほどだ。

サイモンも、リバストを庇ってダメージを受けている。

無傷で体力が残っているのは、俺だけ。

だが、決定打が無い。

「では、こちらから行くぞ」

逡巡しているうちに、魔王が動き出す。

闇がわだかまり、腕のような物を形成されたのが見て取れた。

「マヒャド」

呪文を紡ぐと同時に無数のつららが空中に生まれ、前線にいるふたりに降り注ぐ。

「フ、フバーハー」

リバストが力を振り絞って呪文を唱えるが、完全には相殺しきれない。

光の幕を貫いた幾つかの氷柱が姫とリバストを襲う。

呪文の衝突で霧が発生したために、ふたりの様子はわからない。

と、姫が霧を突き抜け、魔王に斬りつける。

しかし、それを予想していたのか、あっさりと身をかわし、闇の腕を叩きつける魔王。

少女は地面を跳ねながら俺達の方に飛ばされてきた。

「姫！」

仰向けに倒れた姫は、全く動かない。

最悪の予想が頭をよぎる。

そんな状態の姫に、サイモンがふよふよと近付く。

「気を失っているだけだ」

その言葉に胸を撫で下ろす。

そういえば、リバストはどうした？

先程までの霧は、魔王の動きで霧散している。

そして、青年の姿はそこにあった。

地面に手をつき、かろうじて倒れてはいない。

だが、戦闘不能であることは見て取れる。

「おのれ、魔王！」

シアちゃんが両手に魔力の輝きを湛え、走り出す。

だめだ、シアちゃん！

そんな彼女を、俺は追いかける。

「イオナズン！ メラゾーマー！」

続けざまに放たれる呪文を意に介さずに、魔王の影がシアちゃんに迫る。

間に合わない！

「ルーラー！」

目標は、シアちゃんだ。

魔王の攻撃が届く前に、彼女を腕の中にさらい、地面に触れるや否や、再びルーラーでサイモンの所に戻る。

「あ、あるじ？」

呪文の同時使用で一時的に魔力を使い果たしたシアちゃんをサイモンに預け、ロトの剣を手取る。

「あつという間に、貴様一人になったな、勇者よ。くつくつくつくつ」

「まだ、負けたわけじゃない」

剣を構え、呪文を唱える。

「ルーラー！」

剣を掲げたまま、一直線に魔王に突っ込む。

さすがに進路を読まれていたようで、体を傾けてかわす。けど、まだ終わりじゃない。

「ルーラー！」

再び呪文を唱え、進路を変える。

ここまででは予想していなかったのか、剣が魔王の体を掠める。そして、再びルーラ。

何度も繰り返し返し、魔王の体にはダメージが蓄積していく。

しかし、同時に俺の魔力も少しずつ失われる。

そして、限界が訪れた。

「ルーラ……！」

呪文が発動しない。

俺の身体は空中にあつたため、タイミングをつかみ損ねた俺は、地面に叩きつけられる。

「あるじー！」

シアちゃんの悲痛な叫びが聞こえる。

俺は、彼女の声を、剣を支えにして立ち上がる。

「ほう、まだそんな力が残っているのか？」

「当たり前だ。なぜなら俺は、勇者だからな！」

実際には力なんざ、これっぽっちも残ってない。

気力だけで身体を奮い立たせる。

「ならば、貴様も落ちるがいい！ かつての勇者と同じ場所へな！」

魔王が何かを呟くと、空間に亀裂が入る。

そこには、暗黒の淵が覗いていた。

俺はここまでなのか？

魔王の体越しに、生まれ故郷の街が見える。

皆は今、どうしてるんだろうか？

今までに出会った人々の顔を思い浮かべる。

オッサンに門番、衛兵や呪文屋のお姉さん。

酒場の店主や宿屋の主人、俺を育ててくれた武器屋の親父。

もうこの世にはいない、父さんと母さん。

そして、共に戦ってくれた仲間と、愛するふたりの女性。

「まだだ！ まだ俺は戦える！ 惚れた女の一人や二人、守れなくてどうする！」

俺は、最後の力を振り絞って、剣を上段に構える。

そして、振り下ろそうとしたその時、声が響いた。

「ギガデイン！」

叫びと共に、幾条もの電撃が魔王の体に絡みつく。

姫が目を覚ましたのかと思った。

しかし、違った。

電撃は、空間の裂け目から発せられていた。

「ま、まさか、まさか、そんな事があるはずが無い!」

魔王は、これまでに無いほど動揺を見せている。

ふと、亀裂の縁に中から手が掛かる。

「ようやくと、開いてくれたな」

そして、一人の青年が姿を見せる。

「アルス!」

シアちゃんの声が正体を教えてくれた。

闇に消えた、伝説の勇者の復活だった。

「よっ、久しぶりだな、アリシア」

青年は、軽い口調でシアちゃんに話しかける。

この人は、状況を理解しているんだろうか?

「久しぶりも何も、あれから300年も経っておるわ! ふざけた事を言っておらんで、

さっさと手伝わぬか!」

青年は「げっ、マジ?」と眩きながら、俺の方を向く。

「ソイツを持つてるって事は、俺の子孫なんだろうな」

「多分な」

それだけを答える。

「なら、力を貸してやるから、お前が倒せ」

「ああ、もとよりそのつもりだ」

その返答に、伝説の勇者は笑う。

「いい返事だ」

何故か、力がわいてくる。

目の前に青年が立っている。ただ、それだけで力が満ちてくる。

「久しぶりで悪いが、さよならだ、魔王」

アルスの呪文が魔王を撃つ。

「ギガティーン！」

そして、俺は心に浮かんだ呪文を解き放つ。

「ギガソード！」

上段に構えた剣に天から雷が降り注ぎ、天地を結ぶ巨大な光の剣となる。

俺は、それを思い切り振り下ろした。

光の剣は、空を覆った闇を切り裂き、そのまま魔王をも切り裂いていく。

「おのれ、勇者どもめ……。だが、光ある所、必ず闇もまたある……。再び闇が現れた時、

お前達はもう生きてはいまい。はははは……」

「その時はまた、俺達の子孫がやってくれるさ」

魔王の身体を構成していた闇の粒子が散っていくのを見ながら、俺の意識も暗転していった。

暖かい。

目を開くと、青空が見える。

そして、久しぶりの太陽も。

ふと、光が翳る。

「勇者さま?」

「目が覚めたか、あるじ?」

そこには、愛する女性達の顔。

血や泥にまみれ、それでいてとても美しい。

まさに、太陽に勝るとも劣らない。

「目が覚めたか?」

「若様に心配を掛けるな」

身体を起こすと、近くにはリバストと、どこからか鎧を調達してきたのだろうか、さ

まよう鎧に戻ったサイモンの姿があった。

「アルスは？」

そう尋ねると、サイモンがあごをしゃくろる。

そこには、瓦礫に座り、俺達をまぶしそうに見詰める青年の姿があった。

「アリシア、いい仲間を見つけたな」

シアちゃんに話しかける青年。

「ああ、わらわにはもつたいないくらいじゃ」

彼女はそれに笑顔で答える。

「アリシア、リイネは幸せだったか？」

ふいに、真面目な表情で尋ねるアルス。

「さあのう？ 幸せとは、その人物の主観で決まるものじゃ。リイネが幸せだったかは

わからぬ」

とぼけるように答える少女。

「しばらく見ないうちに、理屈をこねるようになったな」

「当たり前じゃ。もうおぬしより300才も年長なのだぞ」

「そういえば、そんな事も言ってたな」

「……リイネは、笑っておった。いつどんな時でもな。それでは答えにらんか？」

アルスは、シアちゃんに歩み寄る。

「いや、充分だ。ありがとう、俺のわがままに付き合ってくれて」

青年は、少女の頭をそつと撫でる。

「いい女になったな、ちつちやいまんまだけど」

少女はその手を払い、杖を振り回す。

「一言多いわ！ それより、おぬしはこれからどうするんじや？」

青年は、思案するように上を向き、答えた。

「旅にでも出るかな」

そして、シアちゃんの方に手を伸ばす。

「一緒に行かないか、アリシア？」

シアちゃんは、それに応えるように手を伸ばし、しかし、アルスの手を払う。

「すまぬが、わらわは行けぬ。この情けなくて弱い、けれども誰よりも強い男を愛してしまおうたからの」

どこか矛盾することを言いながら、彼女は俺の手を取る。

そして、俺もその手を強く握りかえす。

「じゃあ、俺はまだ見ぬいい女を探しに行くとするか。じゃあな、俺の妹を泣かせるんじゃないぞ」

そう言い残し、伝説の勇者は去って行く。

その後姿に、俺は声を掛けた。

「アンタも程々にしとけよ、ご先祖さま！」

彼は振り向かず、ヒラヒラと手を振って消えていった。

「まずは、地下を掘り起こさねばなりませんな」

「そうだな。父上の亡骸を弔わなければな」

リバストとサイモンは、しばらくこの地に留まるそうだが、数少ない配下の魔物を総動員して、再建を進めるらしい。

例の約束は、それからということだ。

そして、俺達は……。

「さあ、そろそろ帰ろうか、俺達の街へ」

「お父様が首を長くして待っておりますわ」

「うむ、勇者の凱旋じゃ」

呪文を唱える。

「ルーラー！」

身構えるが、何も起こらない。

時間だけが過ぎていく。

そういえば、魔力がスツカラカンドったことを思い出した。

何となく気まずい。

「……ひよつとして、魔力切れか？」

「……勇者さま？」

非難の目が集まる。

「ゴメン、シアちゃん。お願い」

少女達は呆れたように笑う。

「まったく、最後まで締まらん男よの」

「これでこそ、勇者さまですわ」

結局、シアちゃんの呪文で、俺達は日常への帰還を果たしたのだった。

第三十話：リボン

「雲一つ無い青空というのは、こういう事かろう、勇者よ？」

魔王を倒して、一夜明けた今日。

俺は、玉座の間でオッサンと対面していた。

「空が闇に覆われたときは、この世の終わりかと思つたものじゃ」

ここに居るのは、俺一人。

シアちゃんと姫は衣装合わせに行くと言つて、姿を消した。

あれほど嫌がつていたシアちゃんが率先して行くなんて、きつと逃げたに違いない。

「おぬしも見よ、この爽やかな青空を。失いかけて、初めてありがたみがわかつた」

上を見上げると、オッサンの言うとおり、爽やかな青空がどこまでも続いている。

そして、暖かな陽の光が差し込んでくる。

「これこそが、勇者の成した功績と言つても差し支えないだろう」

俺もさすがに、これ以上は耐えられそうも無い。

だから、一言だけ言わせて欲しい。

「頼むから、言いたい事があるなら素直に言ってくれ」

天井に開いた大きな穴を見ながら、俺は、オツサンに懇願した。

天地を繋いだ光の剣は、空を覆った闇を切り裂き、魔王をも切り裂いた。

だが、それで終わりではなかった。

天をも切り裂いた剣は、海を越え、向こう岸まで到達し、城をも一刀両断したのだ。

さらに、城下街にも一部損害があった。

事前の避難勧告で、死傷者こそ出なかったのが不幸中の幸いか。

さんさん皮肉を言われた俺は、さすがに意気消沈して玉座の間を後にし、街に出る。

街の喧騒が、どこか懐かしい。

人々の顔には笑顔があふれ、あちこちで子ども遊ぶ姿が見える。

……正直、魔王を倒す前と何一つ変わってないんだが。

まあ、魔王が具体的に何かを起こそうとする前に倒したせいでもある。

やった事といえば、昼を夜に変えたことくらいか。

派手ではあるが、恐ろしいほど効果が地味だ。

実際に戦った俺達が死にそうな目に合ってるわりに、人々の評価が芳しくない理由は

そこにある。

派手といえ、俺が最後に使った呪文だろう。

天地を貫く巨大な光の剣と、それがもたらした災厄。

こちらの方がインパクトが強かったらしい。

そのせいで人々の間には、勇者を排斥する動きもあるそうだが、いかんせん、俺＝勇者者という認識が広まってない。

おかげで、こうして普通に街中を歩けるわけだ。

……改めて考えてみると、無性に悲しくなる。

もう考えるのはよそう。

「きやー！ 誰か、助けて！」

突然の悲鳴。

駆けつけた俺の目の前には、全身鎧の男がいた。

しかも、若い女性に絡んでいる。

「その道行く娘。我が花嫁になる気は無いか？ 今ならコレがついてくるぞ」

どこかから取り出したメイド服を女性に見せながら絡む男に、俺は背後からそつと近付く。

そして、背中に両手をつき、呪文を唱えた。

「バシルーラ」

男は、地面を弾みながら吹っ飛んでいく。

被害が広がらないように、下向きに放ったせいでもある。

20歩ほどの距離を飛んだところで、地面にめり込んで止まる。

「さあ、今のうちこ」

何故か顔を青褪めさせた女性をうながし、ここから離れさせる。

何事かと人々が集まってくる。

ここは、早めに離れたほうがいいだろう。

そう考えていると、野次馬から悲鳴が上がる。

男がおもむろに立ち上がったのだ。

……頭を小脇に抱えた状態で。

男は何事も無かったかのように、頭を元に戻し、駆け寄ってくる。

「貴様、突然何をする!?!」

もの凄い勢いで走ってくるサイモンの姿に、俺はそつと溜息をついた。

「何をやってるんだ、お前は?」

俺の当然の疑問に、サイモンは胸を張って答える。

「見てわからんか？ ナンパだ」

どこがだ。

大体、なんで普通に街中を闊歩してやがる。

「どうして、ここににいるんだ？」

「若様の護衛だ」

「で、肝心の若様はどこにいる？」

「はぐれた」

「で、お前は何をやってるんだ？」

「ナンパだ」

どうやらコイツには、常識というものが無いようだ。

何しに来たのかはわからんが、リバストも放つて置けない。

とりあえず、コイツはどうしたものか。

辺りを見回した俺は、ある事を思い付く。

「サイモン、一つだけ教えて欲しいんだが、お前、泳げるか？」

「いや、さすがの我も、鎧の重量ゆえに水に沈んでは起き上がることも出来ぬ」

やっぱりそうか。

「何故、そのような事を聞く？」

首をかしげるサイモンに両手をつける。

「……バシルーラ」

通りに沿って流れる川に、盛大な水しぶきが上がった。

リバストは思っていたよりも簡単に見つかった。

というか、向こうから声を掛けてきた。

「探したぞ、勇者」

探したのは、俺の方だ。

「さっきサイモンに会ったから、来ているのは知っていたんだが、何しに来たんだ？」

「うむ。人間の王との間に友好条約でも結んでおこうと思つてな」

当然といえば、当然だな。

今なら竜王の軍勢も弱体化しているからな。

オツサンのことだ。

即時殲滅とか言い出しかねない。

一応、竜王の息子の力を借りたとは言つておいたんだが。

「それで、サイモンはどこだ？」

「川に沈めてきた」

「そうか。まあ、たまには良い薬になるだろう」

それでいいのか、次期竜王。

「……それで、どうして俺を探してたんだ？」

突っ込むのはやめた。面倒くさい。

「国王に会う前に、民間レベルで親交を深めておくのも良いだろう？」

あー、なるほど。

約束の年上のお姉さんに会わせろということか。

まったく、どいつもこいつも。

「……はあ、わかったよ。ついてこい」

足取り重く、呪文屋への道を辿った。

突然だが、俺は今、窮地に立たされている。

目の前には、怒りに燃えるお姉さんの姿。

「な、何て言うか、ご愁傷様です」

その言葉に、更に怒りのボルテージが上がっていく。

「たった15ゴールドで呪文を教えたお礼が、この仕打ち？」

指差す先には、飛んできた城の破片によって見事に全壊した呪文屋の姿。

ははは……、一部損害つて、ここの事か。

「えーと、不可抗力？」

お姉さんが呪文を唱え始めると、右手に炎、左手に氷が凝集する。

そして、両手を合わせると、弓矢のように引き絞る。

初めて見る魔法だけど、間違いなくやばい。

俺の経験がそう語る。

「お姉さん、その魔法、危なくない？」

俺の質問に、にっこりと笑いながら答える。

「大丈夫。私は死なないわ」

それって、俺は死ぬって事？

勇者は逃げ出した。

しかし、回り込まれた。

「覚悟は良い？」

良いわけが無い。

ん？　　そういえば、リバストはどうした？

見回すと、呆気にとられたように硬直する姿が。

「ちよつと待った！」

俺の制止の声に、お姉さんは一旦動きを止める。

「なに？」

リバストを前面に押し出す。

「お姉さんと交際したいなんて言う、奇特な男を連れて来たんだけど、どう？」
「どういう意味だ、それは？」 「どういう意味かしら、それは？」

ふたりの声がハモる。

なんとなく、命の危険を感じる。

何か悪いことを言ったか、俺？

「バギクロス！」

リバストの唱えた風の呪文が、俺を天高く舞い上げる。

そして、お姉さんの引き絞る光の矢が解き放たれた。

「メドローア！」

空中で身動きの取れない俺を光の矢が穿つ。

薄れ行く意識の中で、ふたりが仲良く手を取り合うのが見えた。

「……幸せになれよ」

俺の言葉が風に消えていった。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！」
オッサンの声で再び目覚める。

「魔王を倒した今、おぬしはいつたい誰と戦っておるんじや？」
「……運命、かな？」

呆れかえるオッサンを残し、王城を後にする。

そういえば、シアちゃんと姫はどうしてるのだろうか？

王族御用達の衣装屋つて、どこにあつたつけ？

道行く人に尋ねながら、その店へと歩いた。

「こ、このような物を身に付けねばならんのか？」

扉をくぐると、そんな声が聞こえた。

「これが、大人の女のたしなみですわ」

ふたりで何かを選んでいるようだ。

奥へ進むと、色とりどりの小さな布が飾られた場所に辿りつく。

まあ、俗に言う『下着売り場』だ。

「何やってんだ、ふたりとも？」

声を掛けると、シアちゃんはビクツと身体を震わせてこちらを凝視し、姫は優雅に礼

をする。

「勇者さま、良い所にいらっしやいました」

「まさか、あるじに伺いを立てる気か?!」

何やらふたりに揉めている。

首をかしげていると、姫が2枚の布をこちらに広げてみせる。

「こちらの絹の物と、こちらの木綿の物と、どちらがアリシアさまにお似合いになると思
います?」

大人っぽいデザインのシルクの下着と子どもっぽいデザインの木綿の下着。

俺は迷わず指をさす。

「こっちの木綿の奴」

「まあ、どうしてですか?」

そんなのは、当然だ。

「だって、シアちゃんだし」

「だそうですわ、アリシアさま」

シアちゃんは、真っ赤な顔をして、シルクの下着を手に取る。

「わらわは、コレに決めた!」

店員にソレを包んでもらっているシアちゃんを見ながら、首をかしげる。

「シアちゃん、どうしたんだらう？」

「女心というのは、男の方にはわからないものですわ」

姫は、そう言つて笑つていた。

店を出ようとした時、ある物が目に留まつた。

扉を開けた瞬間、風に舞つた赤いリボンと青いリボン。

2本で10ゴールド。

決して高い物ではないが、今の俺には精一杯か。

懐を覗くと、ぴったり10ゴールド。

さっきの死亡が何気に痛い。

「店員さん、コレください」

店の外で待つているふたりの所に行つて、寄つて欲しい所があることを告げる。

突然、思い立つたのだ。

「どこに行くんじや？」

「ふたりに会つて欲しい人が居るんだ」

それだけを言い、町外れへと歩く。

途中、シアちゃんにお金を借りて、花束を買い、目的地が墓であることを言う。

「来たよ、父さん、母さん」

目の前の小さな墓に花束を置き、今までの事を報告する。
勇者になってしまった事、魔王を倒した事。

そして、生涯を共に生きたいと思う女性に出逢った事。

「ふたりに言わなきゃいけないことがある」

俺は、両親の墓の前でふたりの女性と向かい合う。

「俺と結婚してくれないか、シアちゃん、姫……いや、ローラ」

双方とも、一瞬何を言われたのか理解していないようだったが、やがて変化が現れた。

「私、私、とても嬉しいです、勇者様……。この日が来るのをどんなに待ち望んだことか」

姫は、いや、ローラは満面の笑みを浮かべて、涙を流す。

一方のシアちゃんは、何かに耐えるように唇を噛み、そっぽを向く。

「……そっか。シアちゃんは、嫌なんだ……」

俺の呟きが聞こえたのか、シアちゃんが叫ぶ。

「嫌ではない！ ただ、わらわは、おぬし達とは、生きる時間が違う」

言葉と同時に、押し殺していた涙が瞳から溢れ出る。

ローラとは違う、悲しみの涙だ。俺は、そんな彼女を抱きしめる。

「シアちゃん、俺、前に誓ったよね。絶対に寂しい思いはさせない。生きている限り、ずっとそばにいるって」

腕の中で彼女がうなづく。

「あれ、少し変えようと思うんだ」

その言葉に顔を上げる少女。

「俺は、いや俺達は、シアちゃんに絶対に寂しい思いはさせない。たとえ死が俺達を別つとしても、俺達の絆は生き続けるんだ」

包みから、赤と青の2本のリボンを取り出す。

「本当は、指輪とかが良いんだろうけど、これが俺達の絆の証だ」

シアちゃんの髪を赤いリボンで結ぶ。

彼女の瞳から再び涙が溢れる。

「……約束したからの。絶対に破るでないぞ」

約束の印として、口づけを交わす。

シアちゃんを立てせ、ローラも同様に髪を青いリボンで結ぶ。

「父さん、母さん、紹介するよ。俺の妻達だ」

「初めまして、ローラと申します」

「む、その、なんだ。アリシアじゃ、その、まあ、それだけで良からう?」

照れるシアちゃんの姿に、俺とローラは笑い、シアちゃんは怒る。

俺達は、ずっとこうして生き続けるのだろう。

ずっと、3人で。

たとえ死が俺達を別つとしても、俺達が生きた証はこの世界に生き続ける。世界を魔王から救った、勇者の伝説として。

第三十一話：結婚式

船に揺られて、俺達は何処に行くのだろう。

姫は剣術の鍛錬。

シアちゃんは何が楽しいのか、海の中を覗き込んでいる。

そして、俺は遠ざかる故郷をじつと眺めていた。

「オッサン！ ローラとの結婚を許してくれ！」

いつもの玉座の間。

俺は、玉座に座るオッサンに頭を下げている。

「ならん！」

オッサンの態度はつれない。

うむ、頼み方が悪かったのかもしれないな。

「娘さんを俺にくださいー！」

「駄目じゃー！」

これも駄目か。

ならば……。

「僕は死にましえん！」

「嘘をつけ！」

一刀のもとに斬り捨てられた。

文字通り、一瞬で距離を詰めたオッサンの手によって。

「おお、勇者よ。死んでしまふとは情けない」

その声に、意識が引き戻される。

俺を見下ろすオッサンの眼は限りなく冷たい。

当然、見上げる俺の視線も冷たい。

「あんな、オッサン……」

さすがに文句の一つも飛び出しそうになる俺を、姫が止める。

「お父様！　勇者さまと私は、既に夫婦の契りを交わしております！　いくらお父様が駄目だとおっしゃっても、私は勇者さまと添い遂げます！」

その言葉に、オッサンの絶対零度の視線が、灼熱の怒りに変わり始める。

「ほほう、それは本当のことか？」

声は冷静だが、眼が怖い。

手は既に、剣に掛かっている。

「い、いや、それがな、覚えてないんだよ」

余りの恐怖に、つい本当の事を洩らしてしまう。

「そんな、ひどい！ あの熱い夜を忘れてしまったのですか？ 私、初めてでしたのに

……」

覚えてねー！ マジで覚えてねー！

困惑する俺をよそに、オッサンの怒りはどんどん盛り上がっており、姫の嘆きも強くなっていく。

だが、ここで気付いた。

シアちゃんがえらく静かだという事に。

「私、勇者さまとおはようのキスマでいたしましたのに……」

それは、確かにした。それは、覚えてる。

俺は思わずうなずく。

「あるじ」

シアちゃんの俺を呼ぶ声が、その場の時を止める。

「何かな、シアちゃん？」

シアちゃんの顔は拗ねているように見える。

「生娘の戯言は放っておくとして、その、おはようのキスの話は本当か？」

「えっ、あ、うん、本当だけど」

「……わらわはしてもらった事が無い」

眩くように言い、そっぽを向く。

その初々しさに愛しさを覚える。

「今度、ね」

「うむ。約束じゃぞ」

頬を真っ赤に染めたシアちゃんはとても可愛かった。

……って、ちよつと待て！

今の会話の中に、重要な単語が無かったか？

「……生娘？」

そうだ、生娘だ。

生娘って、確か処女の事だよな。

「俺、ローラに手を出してないってことだよな？」

シアちゃんに確認を取る。

「そのくらい、匂いですぐに判る。たとえば、あるじが、わらわと契った時には、既に童貞では無かった事とかのう」

「ぶ—————！」

知ってたのか?!

い、いや、知っていたとしても、シアちゃんが何かするとは思えないが。今までだって、言わなかったんだし。

ふと、横目でローラの様子を窺う。

やばい、目が合った。

笑ってる。笑ってるよ、おい。

底冷えのする眼差しで俺を見詰めながら、口元はにこやかに笑っている。明らかに、怒り心頭の状態だ。

「今の話は本当ですか?」

『本当です』素直に口にしそうになるが、その言葉を必死に押し止める。

「あー、まあ、その、俺の事は後にするとして」

咄嗟に話を逸らそうとする俺に、3人の視線が集まる。

うう、やりにくい。

「オッサン! 聞いてたんだろ? 俺は、ローラには手を出してない!」

「確かに、娘には手を出しておらんようだな」

しかし、次の瞬間、希望は絶望に変わった。

「だが! 他の娘には手を付けているようだな」

シアちゃんは真つ赤になつてうつむいてしまふ。

「オツサンには悪いけど、俺はふたりの事を心の底から愛している。もう、一生手放すつもりは無い！」

俺は、オツサンに宣言する。

「良からう！ ならば、わしの屍を越えて行け！ わしを地に這わせる事が出来れば、認めてやろう！」

叫びながら剣を抜くオツサン。

俺は、それに応えて杖を……、あれ？

いかずちの杖はどこに行つた？

そういえば、シアちゃんに渡したきり、返してもらつた覚えが無い。

「ちよつと待つた！ オツサン、素手でやらないか？」

「……まあ、良からう。すぐに終わつては面白くないからな」

……怖いぞ、オツサン。

オツサンは剣を鞘におさめて、玉座に置く。

「では、行くぞ」

「血の海に沈めてやる」

男の意地をかけた闘いが始まつた。

あれから、5時間が経った。

何度も殺され続けた俺だが、さすがにオッサンにも疲れが見え始めた。

俺の方とは言えば、死ねばリセットされる身。

いつでも体力は満タんだ。

「……おお、勇者よ。死んでしまうとは、…情けない」

もう、息も絶え絶えだ。

チャンスは今しかない!!

「メラー！」

しかし、俺の指先から飛び出した火球は、オッサンの顔をかすめて背後の壁に炸裂する。

その瞬間、オッサンが壮絶な笑みを浮かべ、真っ直ぐに突っ込んでくる。

あの笑みは、怒りの証。

怒りで我を忘れていようだ。

「かかったな！ ヒヤドー！」

俺は、地面に氷の呪文を唱える。

「ぬおっ?!」

真つ直ぐ突つ込んできたオツサンは、凍った地面に足を取られて、顔面を打ち付ける。

しばらく、沈黙が辺りを支配した。

「勝負あり！ この勝負、勇者様の勝ちとする！」

いつのまにか審判をしていた衛兵が叫ぶ。

つて、本当にいつのまに現れた？

疑問を抱えながらも、さすがに気力を使い果たした俺はその場に座り込む。

「勇者さま！」 「あるじ！」

じつと見守つてくれていた少女達が俺に駆け寄ってくる。

「勝ったよ」

そう告げる俺に、ふたりは口々に賛辞を送る。

「さすが、勇者さまですわ。あのような策、私では到底思いつけませんわ」

「うむ、常人では考え付かぬな。さすが、あるじじや」

賛辞……、だよな？

「勇者よ……」

倒れ伏していたオツサンが、仰向けになつて俺を呼ぶ。

「なんだよ、オツサン？」

俺は、オッサンに顔を向ける。

「ローラを幸せにしろよ、馬鹿息子め」

「そんな事は言われなくてもわかってるよ、クソ親父が」
こうして、俺達の結婚は認められた。

「そういえば、気になってる事があるんだけど」

船上で剣を振っているローラに話しかける。

「なんですか？」

剣を止め、こちらを見るローラに問い掛ける。

「あの時の宿の主人、どうした？」

ローラが裸で横に寝ていたときに泊まった宿の主人の事だ。

シアちゃんのおかげで、俺の疑惑は晴れたわけだが、無かったはずの事で責められた主人はどうなったのだろうか？

ローラの脅しのせいで、かなり消耗していたのか、あれから一度も会えてないんだが。

「あの方ですか？ きちんと後始末は付けておきましたわ♪」

……何をしたのか、聞くべきだろうか？

いや、いやいやいや、聞かないほうがいいな、うん。

「そ、そうなんだ。はは、良かった良かった」

「ええ、今頃は、温泉の村で優雅な隠居生活を送っていらっしやるでしょうね
はい？ それは、どういう意味ですか？」

後日、宿の主人もグルだった事が判明する。

ちくしょう、俺のなけなしの50ゴールド返しやがれ。

俺達の結婚式が大々的に行われた。

城には、大勢の来賓が呼ばれ、祝福を受けた。

その中には、リバストと、その妻となった、呪文屋のお姉さんの姿もあった。

「勇者よ、お前には本当に感謝している」

「ええ、おかげでこんな良い旦那さまに出逢えたんだもの」

あれからほとんど日数が経ってないんだが、いつの間にそんなに仲良くなつたんだ？

仲睦まじいふたりの姿は、出逢つて数日とは思えない。

「じゃあ、呪文屋を壊した事は不問にしてくれるんだね」

「それはそれ、これはこれよ」

満面の笑みを浮かべて言い放つ彼女に、リバストも追従する。

「この国の王になれば、そのくらい事は容易じゃないのか？」

そりやまあ、お姫様と結婚するんだし、やがては王様になるんだろうな。

でも、王様なんて柄じゃないよな。

だから、俺としては……。

考え込む俺をリバストは不思議そうに見ている。

口を開こうとした俺の声を、歓声が掻き消す。

そちらを見ると、主賓の一人が化粧直しをして戻ってきたようだ。

「勇者さま、どうですか？」

純白のドレスに身を包んだ彼女は、まさに純真無垢。

とても戦場で鬼神のように剣を振るっていたとは思えない。

「ああ、とても綺麗だよ」

その言葉に、太陽のような笑顔を見せてくれるローラ。

またもや、歓声上がる。

どうやら、もう一人の主賓も戻ってきたようだ。

「一人で先に行くでないわ！」

現れて早々、ローラに文句を言う。

「どうやら、同時に登場する手はずになっていたらしい。

「シアちゃんも、とても可愛いよ」

薄い青色のドレスが、銀髪と相俟って涼やかな印象を与える。

彼女が過去に魔王と呼ばれた存在だと誰が考えようか。

「そ、そのような事は口に出すでない」

頬を真っ赤に染めて照れる彼女は可愛いとしか言い様が無い。

「これで、魔王を倒したメンバーが勢揃いしたわけだな」

リバストの言葉に、ローラとシアちゃんがうなずく。

「そうか？ 一人足りないような気がするんだが。」

まあいいか、居ても居なくても些細な事だ。

「さて、ご来場の皆様。ご歓談中の所、申し訳ありませんが、国王様から重大発表がございます」

司会が突然、そんな事を言い出す。

途端に畏まる招待客達。

常と変わらないのは、俺達だけだ。

「皆の者、今宵は祝いの席。そのように畏まらずとも良い」

オッサンは、そう言うのと俺達に前のように言う。

一体、この期に及んで何の用だ。

「おぬしたちのおかげで、この世界は救われた。礼を言おう。本当にありがとう」

歓声と拍手が俺達を包む。

なんか改めて言われると照れるな。

「褒美といつてはなんじゃが、竜王リバスト殿とは、永遠の同盟を結ぼうと思う。問題は

あるまいな」

「ええ、もちろんです」

オッサンとリバストが握手を交わす。

再び、歓声が辺りを包む。

「そして、勇者よ。おぬしには、わしに代わってこの国を治めて欲しい。やってくれるな」

人々の目が俺に集中する。

オッサンの目は、真剣にこちらを凝視している。

そして、俺の返答は……。

その答えが、船の上だ。

あの時、俺がそう答える事を、皆、気付いていたのかもしれない。

招待客は驚いていたようだが、ローラもシアちゃんも、そしてオッサンさえも何も言わなかった。

そして、一カ月後。

俺達と共に行く事を希望した者達と、船に乗り込んだ。

「勇者よ、我らは何処に居ようとも親友だ」

別れ際のリバストの言葉だ。

そして、俺は彼に一振りの剣を手渡した。

「親友の証として、これをお前に預ける」

鞘におさめられたロトの剣が、親友の手に委ねられる。

「良いのか？」

「ああ、俺達で決めた事だ。未来で何かあったら、勇者に授けてやってくれ」

こうして、俺達は別れた。

「勇者よ、おぬしの我が俣を聞いてやったのだ。一つ約束してもらおう」

「何だよ、オッサン？」

「これから先、わしにあの台詞を言わせたなら、問答無用で地下牢に入ってもらおう」

死んでしまうとは情けないってか？

この先、死ぬような事なんてありやしないよ。
なんたって、俺には最強の妻達が居るんだし。

「ああ、わかったよ。約束する」

そして、オツサンとも別れた。

「勇者様、何か仕事はございませんか？」

船の上、その声を掛けてくる男の姿。

そう、魔王との戦いの前、オツサンに追いかけていた、あの門番だ。

「特に無い。いいから、お前は奥さんのそばにいてやれ」

「は、はいー！」

船室に駆け込む男を見送って、苦笑する。

まさか、あいつが結婚するとは。

お相手は、あの時、手紙を渡してきた侍女だ。

元々、あのふたりは幼馴染だったらしい。

あの事件で、侍女の部屋に匿われ、あいつ曰く、男に裏切られて女に走ったということだが、侍女と良い仲に。

そして、めでたくゴールイン、と行きたい所だが、何せアイツは指名手配犯。

俺の旅立ちには、まさに渡りに船だったというわけだ。

その奥さんは、船酔いで休んでいる。

俺とオツサンの事が誤解だとわかってても、奥さんの事は大事なようだ。

「やはり、後悔しておるのか、あるじ?」

何時の間にか、シアちゃんが背後に立っている。

「生まれ故郷を離れるのは、やはり寂しいものですわ」

ローラもそばに来る。

いつまでも、妻達に心配を掛けるわけにもいかない。

「いや、違うよ。俺達の国の名前を考えていた」

俺は、故郷に背を向け、柵に身体を預ける。

「ローレシアってのは、どうだろう?」

「ローレシアですか?」

「おぬしにしては、良いネーミングじゃのう」

俺にしては、つてのが気になるが、概ね好評のようだ。

「俺達3人の名前を合わせたんだ」

「『ロー』は、私の名から取ったのですね?」

「そして、わらわは『シア』か」

ふたりはそれぞれ納得したようにうなずく。

「で、俺の名前から『レ』」

が、ここで彼女達が揃って首をかしげる。

「そういえば、おぬし、何と言う名じや？」

「私も存じませんわ」

結婚して一ヶ月になるダンナの名前くらい知ってようよ。

溜息をつきながら、何となく力が抜けた俺は、更に後ろに体重を掛けながら答える。

「…………ふたりとも、ちゃんと覚えておくように。俺の名前は、アレ…………、あれ？」

木材が折れるような音と共に、俺の視界が上下逆になる。

そして、次の瞬間、海面に叩きつけられた。

「がぼ、がぼぼぼ…………」

咄嗟の事で、準備のできないまま海に投げ出された俺は、大量の海水を飲んでしまう。

その時、海の底に動く何かが見えたような気がしたが、息が続かず海面に浮かび上がる。

「あるじ、これにつかまれー！」

投げ込まれる浮き輪にしがみつく。

こんなところで、オツサンの世話になるわけにはいかない。

「勇者さま、危ない！」

これ以上、何が起こるといふのか。

見ると、海の底から何かが急速に浮かび上がってくる。

「大王イカだ!!」

船員の叫びが聞こえる。

あれ？ モンスターはリバストの命令で、一切、出て来れないはずなんだけどな。

俺の疑問もどこ吹く風、大王イカは触手を伸ばし、巻きついてくる。

「捕まえたぞ、勇者よ。今こそ、我が恨みを晴らしてくれん」

大王イカの中から声がする。

それも、どこかで聞いた事のある声だ。

「お前、まさかサイモンか?!」

「そうだ、忘れていたとは言わせんぞ」

スマン、すっかり忘れてた。

そういうえば、川に沈めたままだったよな。

どうにかして、鎧から抜け出し、コイツに取りついたらしい。

生物を操る要領は、前の魔王との戦いで学んだのだろう。

「勇者さま、そのモンスターと知り合いなのですか？」

おいおい、覚えといてやれよ。

「サイモンだよ！ サイモン！」

俺の叫びに、シアちゃんが反応する。

「サイモンじゃと？ もしかして、彼女いない暦300年、人間時代は弱い弱いと馬鹿にされ、魔物になっても鎧にしがみつくしか能のない、あのサイモンか？」

あー、これはワザとだな。

シアちゃんの言葉はさらに続く。

「女への未練で死に切れず、あのメイド服を着せてみたかったの一念で魔物となったサイモンの事か？」

あのメイド服には、そんな因縁が……。

船上の人々に、哀愁が広がる。

「ググググググウ……、どこまでも馬鹿にする気か？ だが、我が手には勇者がある」

途端に強気になり、俺を掲げるサイモン。

「魔王を倒した今、世界の加護の無い貴様など取るに足らん。魔王に対する呪いとして

の効力も無くなったはずだ。もう生き返る事もあるまい」

思わせぶりな事を口にするサイモン。

「ちよつと待て！ 今のは、どういう意味……」

そこまで口に出した所で、絶望的な状況に気が付く。

見上げると、右腕に雷を纏わせたローラの姿。

「今、お助けします、勇者さま！」

そして、右腕を振り下ろす。

「ライデイン!!」

雷光は、サイモンを貫き、俺にまで到達する。

「ぐああああああ!!」

断末魔の叫びが辺りにこだまする。

皆、覚えておこう。

海水は、電気を通しやすい。

そして、俺は意識を手放した。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！」

あれ、生きてる？

サイモンの話だと、死んでもおかしくないはずなのに。

まあ、あれから何度も死んでるんだし、今更って感じはするなあ。

「どしたの、オツサン？」

なぜか、オツサンが睨み付けてくる。

なんかしたつけ、俺？

「約束は、覚えておろうな？」

「約束？ ……あつ?!」

オツサンが立ち上がるのを確認するよりも早く、その場を後にする。

「じゃあな、オツサン！」

扉を開け、屋上へと走る。

「待て、待たぬか、勇者め！」

オツサンの声が近付いてくる。

光が見えたと同時に呪文を唱える。

「ルーラー！」

間一髪、間に合ったようだ。

背後で悔しがるオツサンの姿が、遠ざかっていく。

やがて、海上を進む船を見下ろす上空まで辿りついた。

船の上には、縮こまってシアちゃんの説教を受けるサイモンとローラの姿がある。

サイモンは、例の黒い影の姿だ。

アイツも不死身といっても問題は無いな。

いつも通りの姿にどこか安心する。

ローラが俺に気付いたのか、手を振る。

シアちゃんも、それに追従するように手を振る。

サイモンはどこか不貞腐れている様だ。

俺も、彼女達に手を振り返す。

空は、俺達の旅立ちを祝うかのように青く澄んでいる。

これからも苦難が待ち受けている事だろう。

だが、彼女達がいれば、どんな所も天国だ。

目測を誤って、海面に叩きつけられる寸前、俺は心の底からそう思った。

「おお、勇者よ！ 死んでしまおうとは、情けない！」

そう、妙に楽しげなオッサンの声を聞くまでは。

第三十二話：勇者

どうやら夢を見ていたらしい。

ずいぶんと昔に過ぎ去った思い出。

見回すと、部屋の壁には何枚もの絵が飾られている。

結婚したばかりの頃に描かれたもの。

その絵の中では、若かりし頃の俺とふたりの妻が笑っている。

隣には、オッサンから建国記念に贈られた2枚の絵。

『魔王の最期』と名付けられた絵には、黒い闇を斬り裂く光の剣が描かれている。

『勇者の旅立ち』という絵には、水平線の向こうに消えようとする船の姿が。

一応、友好の為に描かれたはずだが、前者には片隅に破壊される城の姿。

後者には、船の脇に大きな水柱が描かれている辺りにオッサンの悪意が見て取れる。

そのオッサンも、20年程前に死んでしまった。

今は、ローラとの間に生まれた長男が、オッサンの後を継いでいる。

6人もいた息子も皆、成人して自立した。

最後に描かれた絵には、ローラとシアちゃん、そして、6人の子供たちの姿。息子達は今や、方々に散らばり、街の領主になっていたり、新たに国を興したりしている。

「世界征服が完了致しましたわ」

そう言つて笑う、ローラの姿が思い起こされる。

そんな彼女も、5年前に逝つてしまった。

今、俺のそばに居るのは、もう一人の妻だけ。

ベッドに崩れ落ちるように眠っている彼女の頬に手をのばす。

老いて節くれ立った手で、柔らかな感触を味わう。

彼女だけは、昔と何一つ変わらない。

いつどんな時も、俺のそばに居てくれた。

「……………んん？ なんじゃ、くすぐりたい……………」

頬を撫でられる感触で目を覚ましてしまったらしい。

「……………おはよ……………う、シアちゃん」

かすれた声しか出ないのが悔しい。

「……………うん？ ……………!! 目が覚めたのか、あるじ！」

寝ぼけた様子を見せていた彼女も、俺が起きた事に気付くと飛び起きる。

どうやら、また何日も眠ってしまったらしい。

最近は、起きていられる時間が極端に減ってしまった。

医者の話では、もう永くは無いだろうと言う事だ。

きつと、俺が起きるまで寝ずに待っていたのだろう。

彼女はどこか疲れた様子を見せている。

「何……日……？」

前に目を覚ましてから、何日経ったのだろう？

そんな簡単な事も言葉に出来ない自分がもどかしい。

「もう、3日も経っておる」

彼女にはそれだけで解ったのだろう。

俺の知りたかった事を教えてくれる。

「それよりも、あるじ。とつとと目をつむらんか！」

言われた通りにすると、唇に柔らかな感触。

結婚当初から続いている朝の習慣だ。

何十年と続いているのに、未だに照れる彼女の姿が微笑ましい。

でも、これで最後になりそうだ。

「何かして欲しい事はあるか？」

「……手を、…手を握ってて…欲しい」

訝しげな表情を浮かべながら、俺の手を握ってくれる彼女。

「……ありがとう。ずっと、そばに居てくれて……」

「突然、どうしたんじや？」

彼女の手を強く握る。

それだけで、何かに気付いたのだろうか。

「待っておれ、すぐに医者連れて来る！」

席を立とうとする彼女を引き止める。

「いいんだ……。シアちゃんが居てくれれば、それでいい」

俺の言葉にしたがって、再び椅子に座り直す。

そして、しっかりと手を握る。

もうほとんど何も見えない。

世界との繋がりが、彼女の手だけになってしまったかのようだ。

神様がくれた最後の時間。

これから長い時間を一人だけで生きる事になる彼女との別れ。

「何かして欲しいことはあるか？」

再び、そう問いかけてくる彼女にそつと首を振り、最後の頼みを口にする。

「……手を握っていて欲しい。…最期まで」

力が抜けていく俺の手を、彼女がしっかりと握っていてくれる。

俺の魂をこの世に繋ぎとめるかのように、強く握り締める。

やがて、どれだけの時間が流れたのだろうか。

意識が解放されていく。

俺の顔に温かな水滴が落ちる。

何度も何度も。

それが、彼女の涙だと気付いたときには、俺の魂は天に召されていた。

深い後悔の念と共に。

「おお、勇者よ！ 死んでしまうとは、情けない！」

懐かしいフレーズが響く。

顔を上げると、さらに懐かしい顔が。

「オッサン?!」

死んだはずのオッサンがここに居るって事は、ここが死後の世界か？

オッサンは黙って俺に紙とペンを差し出す。

「何だ？」

紙には大きく、『いきますか、いきませんか』と書かれている。どちらかを選べって事か？

単純に考えて、『逝きますか、逝きませんか』って事だろうか？

いや、もしかすると『いきますか、いきませんか』かもしれない。でもそうすると逆の意味になってしまう。

って、待てよ。

今から生き返れるのか?!

「おぬしの選択を後押ししてやろう。それを見て、どちらかを選べ」

オッサンが指を鳴らすと、空に映像が映し出される。

俺の手を握ったまま、涙に暮れるシアちゃんの姿。

胸が強く締め付けられる。

けれど、戻ったとしてもまたいつか別れの時が来る。

また彼女に悲しい思いをさせてしまう。

逡巡する俺に、オッサンが語りかけてくる。

「魔王とは、世界の理の外に在る者。そして、勇者とは、魔王に対して世界が創り出した呪い」

それは、いつぞやサイモンが俺に言った言葉。

あの後、ふたりのいない所で問い詰めてみたが、アレ以上の事は何も知らなかった。

アイツの話が真実ならば、魔王を倒した俺は死ななければならぬ。
でも、選択肢を与えられるのは、どういう理由だ？

「そして、おぬしは未だ魔王を倒しておらぬ。故に、死んでもらうわけにはいかん」
はい？

「ちよつと待て！ 俺は、確かに魔王ゾーマを倒したはずだぞ」

「一人の魔王に対して、勇者は一人」

オツサンの答えはにべも無い。

どういふことか考えてみよう。

元々、魔王ゾーマは300年前に猛威をふるった存在。

そして、300年前にアルスによって倒された。

復活した魔王は、俺が倒した。

やはり、復活したアルスの加勢によって。

「……てことは、あくまでもゾーマはアルスの管轄であって、俺が倒すべき魔王は別に居
る。」

俺が導き出した答えにうなづくオツサン。

「なんてこった……」

あまりにも無情な現実に愕然とする。

けれど、魔王なんて他にいただろうか？

「おぬしの倒すべき魔王は、既に世界の脅威足りえん。それゆえの選択肢」
どういふことだ？

「どんな奴なんだ？」

俺の質問に表情を変えることなく、オッサンは答える。

「おぬしも知っておろう」

俺が知っている魔王？

ま、まさか、ひよつとして……？

「彼女がそうなのか？」

オッサンはその言葉にうなずく。

彼女を倒すために現世に戻るか、それを防ぐためにここに残るか？

……いや、違う。

第三の選択肢が残っている。

「気付いたか？」

オッサンは微笑を見せる。

今まで見せた事の無い表情に、今まで感じていた違和感の正体に気付く。
そう、オツサンが俺に優しすぎる。

「ああ、俺は彼女のもとに戻る」

そう言った俺を慈しむように見るオツサン。

いや……、この人はオツサンじゃない。

「では、行くが良い勇者よ。おぬしが魔王を倒して再び戻ってくる日を楽しみに待つておるぞ」

旅の始まりの時のように、オツサンがその言葉を口にする。

すると、映像に映し出されていた俺の遺体が消え始める。

その手を握っていたシアちゃんは軽いパニック状態になっている。

同時に、今ここにいる俺の身体も透け始める。

なるほど、俺が死ぬときは今までもこんな状態だったのだろう。

「ありがとう、オツサン。いや、神様」

その言葉に、オツサンの姿が光に包まれる。

再び現れたときには、若い女性の姿になっていた。

「私の名は、精霊ルビス。この大地を創りし者。世界が平和であらんことを祈ります」

その言葉を最後に、俺の視界は真っ白に塗りつぶされていった。

「おお?! 勇者よ、死んでしまおうとは情けない……?」

何で疑問形なんだ。

顔を上げると、そこは懐かしき玉座の間。

そして、玉座には久しぶりに見る息子の姿。

「もしま、父上……ですか?」

「何だ? 父親の顔をもう忘れたのか?」

そう言う俺に、そばに仕えていた騎士が手鏡を差し出す。

「勇者様、これを」

この男は、あの門番の息子だ。

父親と同じように、俺の息子に仕えてくれている。

母親の教育が良かったのだろうか、それともローラに師事していたおかげかもしれない。
い。

文武両道、質実剛健、父親に似なくて良かったというよりほかは無い。

手渡された手鏡を覗き込む。

俺の顔が、若かりし頃に戻っている。

旅を始めたばかりのあの頃の姿に。

神様も、いやルビス様も粹な事をしてくれる。

「どういうことですか？」

息子が俺に尋ねてくる。

どう答えるべきだろうか？

「まだ、仕事が残ってるんだとさ」

それだけを答えて、別れを告げる。

今は、一刻も早く、帰還を告げなければならぬ人が居る。

俺は、屋上に上がり、ルーラを唱えた。

俺とシアちゃんだけで暮らしていた、小さな家の前に立つ。

国を息子に任せした後、隠居した小さな我が家だ。

扉を叩いて、その言葉を口にす。

「ただいま、シアちゃん」

途端に、扉が開き、小さな身体が飛び出してくる。

涙に濡れた彼女の顔は、押さえ切れない喜びに輝いている。

「あるじー」

胸に飛び込んできた彼女を力いっぱい抱きしめる。

ここ何年かは、ついで出来なかった事だ。

「ただいま、シアちゃん」

もう一度、万感の想いを込めてその言葉を口にする。

「おかえり、アレク」

彼女が俺の名を呼ぶ。

そして、どちらからともなく唇を重ねる。

話さなければならぬ事はたくさんある。

けれど、今はこうしていたい。

時間はたつぷりとあるのだから。

勇者の戦いはまだ始まったばかり。

精霊ルビスが願った、世界の平和の為に。

そして、愛する者の笑顔の為に、この世界を生き続けよう。

我が愛しき魔王と共に。